

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 264

絵 図 遺 跡 2
原 尾 島 遺 跡

2 0 2 3

岡 山 県 教 育 委 員 会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 264

絵 図 遺 跡 2
原 尾 島 遺 跡

2 0 2 3

岡 山 県 教 育 委 員 会

序

旭川の下流に形成された岡山平野には、いにしえに吉備と呼ばれたこの地域の中樞を担った数多くの遺跡が所在しますが、本書に収載した絵図遺跡と原尾島遺跡もそうした集落遺跡の一つです。

一般国道53号のキャブシステム建設に伴い発掘調査を実施した絵図遺跡は、稲作がはじまった頃の集落として著名な津島遺跡の南に位置しています。このたびの調査では、弥生時代中期の柱穴や土坑、古墳時代前期の井戸などが重なり合って見つかり、津島遺跡から続く集落の一部と思われます。

建設省（当時）藤原宿舎3号棟建設に伴い発掘調査を実施した原尾島遺跡は、洪水で埋もれた弥生時代後期の水田が調査された百間川原尾島遺跡と、古墳時代に鉄や滑石製白玉の生産を行っていた原尾島遺跡（藤原光町3丁目地区）の間に位置しています。このたびの調査では、掘立柱建物や土坑、溝などを検出し、鎌倉時代に営まれた集落の一端が明らかとなりました。

本書がこの地域の歴史研究の資料として活用されることを期待いたします。

発掘調査に当たりましては、関係機関や地元住民の皆様から御理解・御協力を賜りました。ここに厚くお礼申し上げます。

令和5年3月

岡山県古代吉備文化財センター
所長 大橋 雅也

例 言

- 1 本書は、一般国道 53 号キャブシステム建設に伴って岡山県教育委員会が建設省中国地方建設局から委託を受け岡山県古代吉備文化財センターが実施した絵図遺跡と、建設省藤原宿舎 3 号棟建設に伴って岡山県教育委員会が建設省中国地方建設局から委託を受け岡山県古代吉備文化財センターが実施した原尾島遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 絵図遺跡は岡山市北区絵図町 1 番地に、原尾島遺跡は岡山市中区藤原西町 2 丁目 3-34 に所在する。
- 3 絵図遺跡は、文化財センター職員 亀山行雄が担当して平成 5 年 4 月 25 日～ 28 日に立会調査（40 m²）を、平成 5 年 5 月 17 日～ 28 日に本発掘調査（90m²）を実施した。
原尾島遺跡は、平成 11 年 6 月 14 日～ 18 日に文化財センター職員 金田善敬が担当して確認調査（20m²）を、平成 11 年 11 月 18 日～平成 12 年 3 月 17 日に文化財センター職員 土師忠満・高田恭一郎・柴田英樹が担当して本発掘調査（510m²）を実施した。
- 4 本書の作成は、絵図遺跡を亀山が、原尾島遺跡を柴田・高田が行った。
- 5 本書の本文は、絵図遺跡を亀山が、原尾島遺跡を柴田が執筆した。
- 6 本書の編集は柴田が行った。
- 7 本書の遺構写真は調査担当者が撮影した。また、遺物写真の撮影にあたっては江尻泰幸の協力と援助を得た。
- 8 本書に収載した遺構・遺物の図面・写真等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市北区西花尻 1325-3）に保管している。

凡 例

- 1 本書に用いた高度値は海拔高である。
- 2 本書に用いた北方位は、平面直角座標第V系（日本測地系）の座標北である。
- 3 収載した各遺構・遺物図の縮尺は、下記のとおりである。
遺構 掘立柱建物：1/60 土坑：1/20、1/30
遺物 土器：1/4 石製品・土製品：1/2、1/3 木製品：1/4
- 4 遺構・遺物の番号は、各遺跡ごとに種類別で通し番号を付し、さらに石製品にはS、土製品にはC、木製品にはWの記号を番号の前に付した。
- 5 遺物観察表に記載した色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修）による。
- 6 土器実測図の上端線あるいは下端線が中軸線の左右で途切れているものは、小破片のため復元径が不確実であることを示す。
- 7 本書第2図及び第20図の周辺遺跡分布図は、国土地理院発行の1/25,000地形図「岡山北部」・「岡山南部」を複製・加筆したものである。
- 8 本書で用いる時代区分は、一般的な政治史区分に準拠し、それを補うために文化史区分や暦年代を併用した。

目 次

序

例 言

凡 例

目 次

第 1 章 絵図遺跡	1
第 1 節 遺跡を取り巻く環境	1
第 2 節 調査の経過	4
第 3 節 調査の概要	7
第 4 節 総括	23
第 2 章 原尾島遺跡	33
第 1 節 遺跡を取り巻く環境	33
第 2 節 調査の経過	36
第 3 節 調査の概要	40
第 4 節 総括	51

図 版

報告書抄録

図目次

絵図遺跡

第 1 図	遺跡位置図 (1/1,500,000) ……………	1
第 2 図	周辺遺跡分布図 (1/25,000) ……………	2
第 3 図	国道 53 号キャブシステム建設に伴う 調査位置図 (1/8,000) ……………	4
第 4 図	調査区配置図 (1/1,000) ……………	7
第 5 図	基本層序模式図 ……………	7
第 6 図	立会調査区・発掘調査区全体図 (1/300) ……………	8
第 7 図	立会調査区遺構配置図 (1/50) ……………	9
第 8 図	発掘調査 1・2 区遺構配置図 (1/50) ……………	10
第 9 図	発掘調査 3 区遺構配置図 (1/50) ……………	11

第 10 図	立会調査区・発掘調査区断面図 (1/50) ……………	12
第 11 図	立会調査区の遺構 (1/20) ……………	13
第 12 図	発掘調査区の遺構 1 (1/20) ……………	14
第 13 図	発掘調査区の遺構 2 (1/20) ……………	15
第 14 図	立会調査区の弥生土器 (1/4) ……………	17
第 15 図	発掘調査区の弥生土器 1 (1/4) ……………	18
第 16 図	発掘調査区の弥生土器 2 (1/4) ……………	19
第 17 図	発掘調査区の土師器・須恵器・木器 (1/4) ……………	20
第 18 図	立会調査区・発掘調査区の石器 (1/2・1/3) ……………	21

原尾島遺跡

第 19 図	遺跡位置図 (1/1,500,000) ……………	33
第 20 図	周辺遺跡分布図 (1/50,000) ……………	34
第 21 図	調査位置図 (1/15,000) ……………	36
第 22 図	確認調査及び発掘調査区配置図 (1/800) ……………	37
第 23 図	調査区平面図 (1/400) ……………	40
第 24 図	土層断面図 (1/80) ……………	41
第 25 図	中世以降遺構配置図 (1/150) ……………	42
第 26 図	掘立柱建物 1 (1/60) ……………	43
第 27 図	柱穴列 1 (1/60) ……………	44
第 28 図	土坑 1 (1/30) ……………	44
第 29 図	土坑 1 出土遺物① (1/4) ……………	45

第 30 図	土坑 1 出土遺物② (1/4) ……………	46
第 31 図	土坑 2 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	47
第 32 図	土坑 3 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	47
第 33 図	土坑 4 (1/30)・出土遺物① (1/4) ……………	48
第 34 図	土坑 4 出土遺物② (1/4) ……………	49
第 35 図	土坑 5～9 (1/30)・土坑 9 出土遺物 (1/4) ……………	50
第 36 図	溝 2 断面図 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	51
第 37 図	周辺の地割と主な小字名 (1/10,000) ……………	52

表目次

絵図遺跡

表 1	文化財保護法に基づく提出書類一覧 ……………	6
表 2	遺構一覧表 ……………	25

表 3	遺物観察表 ……………	30
-----	-------------	----

原尾島遺跡

表 4	文化財保護法に基づく提出書類一覧 ……………	39
表 5	遺構一覧表 ……………	54

表 6	遺物観察表 ……………	54
-----	-------------	----

図版目次

絵図遺跡

図版 1

- 1 立会調査状況（北東から）
- 2 立会調査状況（南西から）
- 3 立会調査区遺構完掘状況（西から）

図版 2

- 1 発掘調査 2 区遺構検出状況（北東から）
- 2 発掘調査 3 区遺構検出状況（南西から）
- 3 発掘調査 2 区北遺構検出状況（北西から）
- 4 発掘調査 2 区中央遺構検出状況（北西から）
- 5 発掘調査 2 区南遺構検出状況（北西から）
- 6 発掘調査 3 区北遺構検出状況（北西から）

図版 3

- 1 発掘調査 1 区遺構完掘状況（北東から）
- 2 発掘調査 1 区遺構完掘状況（南西から）
- 3 P247（北西から）
- 4 P243（西から）
- 5 P236・237（南西から）
- 6 発掘調査 2 区遺物出土状況

原尾島遺跡

図版 7

- 1 1 区調査前状況（東から）
- 2 2 区発掘作業状況（西から）
- 3 調査区土層断面（g-h）（南から）
- 4 中・近世遺構（1 区東）検出状態（南西から）

図版 8

- 1 土坑 1 遺物出土状態（東から）
- 2 土坑 1 埋土断面（東から）
- 3 土坑 3 遺物出土状態（南から）
- 4 土坑 4 遺物出土状態（南から）

図版 4

- 1 P194 上層遺物出土状況 1（北から）
- 2 P194 上層遺物出土状況 2（北から）
- 3 P194 上層出土遺物（北から）
- 4 P194 下層遺物出土状況（北から）
- 5 P194 下層出土遺物（W1）

図版 5

- 1 立会調査区出土弥生土器
- 2 発掘調査区出土弥生土器

図版 6

- 1 発掘調査区出土土師器
- 2 立会調査区・発掘調査区出土石器・木器

図版 9

- 1 土坑 1 出土遺物①

図版 10

- 1 土坑 1 出土遺物②
- 2 土坑 3 出土遺物
- 3 土坑 4 出土遺物

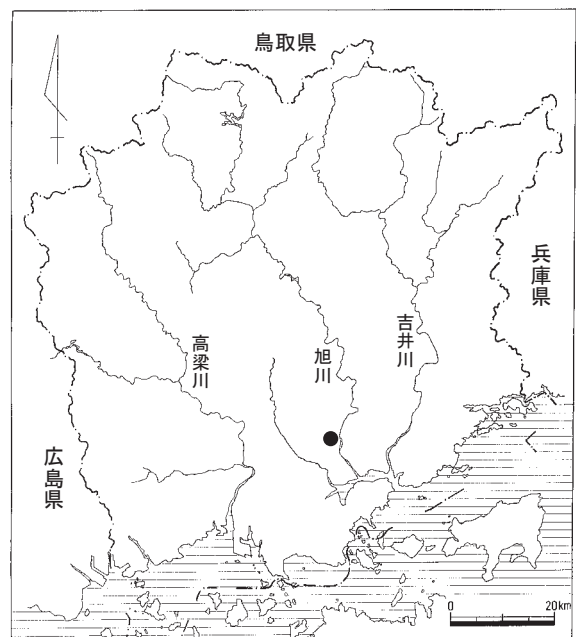
第1章 絵図遺跡

第1節 遺跡を取り巻く環境

現在、岡山市街地が広がる旭川の西岸平野は、かつて北を半田山山塊、西を京山山塊、東を旭川、南を瀬戸内海で区切られる、東西約2km、南北約5kmの小単位地域をなしていた。

半田山の山裾では縄文時代前期にはじまる朝寝鼻貝塚が知られているが、ここから南に1.5km離れた南方釜田遺跡においてはこのころの汀線が確認されている。晩期になると「弥生の小海退」によって陸化が進み、この一帯には厚い腐植土層が形成された。この腐植土層を基盤とする人びとの営みの跡は津島岡大遺跡や津島遺跡などで認められ、ことに弥生時代前期の水田は津島遺跡から北方遺跡群にかけて東西1.5kmにも及んでいる。しかし、その耕作に携わった人々の集落はわずかに津島遺跡が知られているのみで、未だ経営の実態は明らかとなっていない。中期に入ると南方遺跡、絵図遺跡、上伊福九坪遺跡など、東西1.5km、南北1kmの範囲に人々が集住するようになる。ここでは磨製石斧や木製品などの製作が行われているほか、南九州の土器や南海産の貝輪も出土していて、生産・流通の拠点として機能したものと思われる。しかし、沖積化の進行に伴ってその機能が失われるとこの拠点集落は解体に向かい、中期末には津島遺跡や伊福定国前遺跡、天瀬遺跡や鹿田遺跡などの集落が分散して営まれる。このうち伊福定国前遺跡では、後期末の竪穴住居が多数検出されている上、近畿・東海・山陰・四国からの搬入土器も出土していて、この時期の流通拠点であったことがうかがえる。

古墳時代初頭には、旭川の河口を見下ろす東岸の操山山塊に網浜茶白山古墳や操山109号墳といった全長70～80mの前方後円墳が築かれるが、西岸では都月坂1号墳や七つ丸1号墳など全長30～40mの前方後方墳がみられるにすぎない。前期後半には全長155mの神宮寺山古墳が築かれるものの、西岸ではこれを最後に大型古墳はみられなくなる。集落は、津島遺跡や伊福定国前遺跡、上伊福九坪遺跡などが弥生時代に引き続いて営まれるが、中期に入ると津島遺跡を除いて姿を消す。こうした中であって津島遺跡の東に隣接する北方下沼遺跡では、朝鮮半島系土器がまとまって出土しており、渡来系氏族の来住も推測される。後期には再び集落が増加し、津島遺跡のように鉄生産に関わる遺物を出土するものもある。しかし、後期古墳は矢坂山で20基ほど知られるにすぎず、集落とは不均衡なあり方を示す。令制下の御野郡を本貫地とする三野氏は、北に隣接する津高郡の大領を勤めたことが知られる。笹ヶ瀬川の流域に



第1図 遺跡位置図 (1/1,500,000)



第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

- | | | | | | |
|-----------|-----------|------------|-----------|-----------|-----------|
| 1 絵図遺跡 | 2 朝寝鼻貝塚 | 3 津島岡大遺跡 | 4 津島遺跡 | 5 南方遺跡 | 6 上伊福九坪遺跡 |
| 7 伊福定国前遺跡 | 8 天瀬遺跡 | 9 鹿田遺跡 | 10 都月坂1号墳 | 11 七つ坑1号墳 | 12 津倉古墳 |
| 13 神宮寺山古墳 | 14 北方下沼遺跡 | 15 北方藪ノ内遺跡 | 16 大供本町遺跡 | 17 新道遺跡 | 18 岡山城跡 |

開けた津高郡では西山古墳群などの有力な群集墳や荒神廃寺のような古代寺院、白壁奥遺跡・津高台団地遺跡群といった製鉄遺跡が存在し、東西に走る山陽道には津高駅が設けられている。三野氏は本来、この両郡を勢力基盤としていた可能性が高い。

半田山の南麓を東西に走る福隆寺（福輪寺）畷は、山陽道と備前国府を結ぶ支路の一部と考えられている。御野郡衙の所在はこれまでのところ明らかではないが、この支路にほど近い津島江道遺跡では石帯や和同開珎を伴う建物群が検出されている。平安時代末には、平家の有力な家人であった妹尾兼康がこの福輪寺畷で木曾義仲勢を迎え撃ったことが平家物語に見える。鎌倉時代、東大寺の再興に当たった重源は、伊福郷の南にあった野田荘を得てその開発に当たる。一方、伊福郷の地頭として来住したと伝えられる松田氏は、南北朝時代に備前守護をつとめ、室町時代には応仁の乱に乗じて備前回復を目指す赤松氏に味方し備前守護代に任じられた。やがて守護代独占を図る浦上氏によって排除されるものの、山名氏や毛利氏の助力を得て浦上氏と抗争を繰り返し、永禄11（1568）年に宇喜多氏に滅ぼされるまで西備前に勢力を保ち続けた。このころの集落は、奈良時代から続く鹿田遺跡・大供本町遺跡・新道遺跡（鹿田荘）のほか、鎌倉時代にはじまる伊福定国前遺跡（伊福郷）、北方藪ノ内遺跡（弘西郷）などが知られている。しかし、いずれも戦国時代には姿を消しており、江戸時代の村落と直接の繋がりとは認められない。江戸時代の津島村や西国往還を境に下伊福村と分かれた上伊福村は、いずれも2000石を超える村高を持ち、備前国有数の富裕な地域であった。

明治22（1889）年、上伊福村は津島村・万成村と合併して伊島村となり、明治33年には御野郡と津高郡の合併により誕生した御津郡の郡役所が上伊福に置かれた。明治40年、第17師団の駐屯地となった伊島村には兵舎や練兵場が建設され、京山の山裾には衛戍病院（後の陸軍病院）も設けられた。岡山市に編入された大正時代には倉敷紡績や備作製錬（後に片倉製糸、第二海軍衣糧支廠）などの工場が建設されたが、昭和20（1945）年の岡山空襲により絵図町や清心町、奉還町でも住宅が全焼する被害を出した。岡山大学やノートルダム清心女子大学が開学した昭和24年には、練兵場跡地を利用して県営総合グラウンドの建設がはじまり、昭和37年に開催された第17回国民体育大会の主会場となった。これに併せて国体道路（現在の国道53号の一部）も建設され、周辺の宅地化が進んだ。絵図町やいずみ町が誕生したのもこのころである。現在では、ノートルダム清心女子大学をはじめ岡山商科大学附属高等学校、県立岡山工業高等学校、県立生涯学習センター（県立鳥城高等学校）などの教育施設を抱えた住宅地として発展している。（亀山）

参考文献

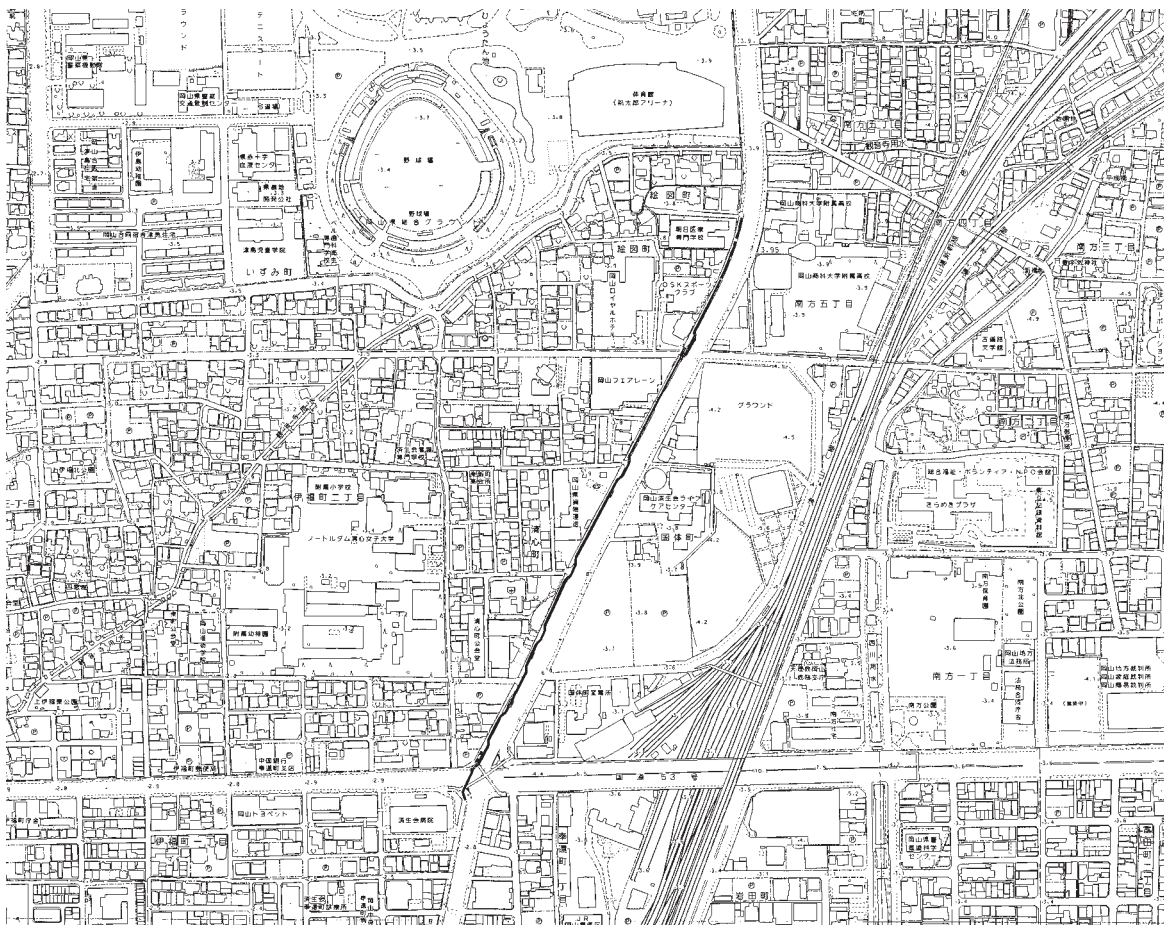
- ・ 亀山行雄 2010 「遺跡を取り巻く環境」『伊福定国前遺跡』岡山県教育委員会
- ・ 畑 和良 2020 「文献史料から見た備前国の中世城館」『岡山県中世城館跡総合調査報告書 第1冊』岡山県教育委員会
- ・ 高原忠敏 1981 『京山物語』郷土史「京山物語」をつくる会

第2節 調査の経過

1 調査の経緯と経過

平成5（1993）年3月16日、一般国道53号のいずみ町～伊福町地内において、電線などの各種ケーブルを集約して地中に埋設するキャブ（CAB、Cable Boxの略）システム建設の協議書が、建設省中国地方建設局から岡山県教育委員会へ提出された。この場所は津島遺跡と南方遺跡の間に当たり、遺跡の所在が予想されたことから、工事に際して岡山県教育庁文化課の職員が立ち会うこととした。

4月25日、県営総合グラウンドの南約40～70mの歩道に鋼矢板を打ち込み地表下1.6mまで掘削された工事現場を文化課職員が確認したところ、掘り床に遺物を包含する黒色土の広がり認められた。このため、翌26日に掘削範囲（延長22m）の遺構検出、掘り下げを行って記録を作成するとともに、残る工事範囲（延長41m）の取り扱いについて建設省と協議し、発掘調査を行うこととした。5月17日～28日にかけて実施した発掘調査では、弥生時代中期の柱穴・土坑・溝、古墳時代前期の井戸など数100基にのぼる遺構を検出した（本書）。こうしたことから、これより南の工事区間についても発掘調査の対象とすることになり、平成6年6月4日～11月30日にOSKスポーツクラブ岡山前から清心町交差点までの約600mについて発掘調査を行った。



第3図 国道53号キャブシステム建設に伴う調査位置図（1/8,000）

日誌抄

平成5年（発掘調査）

4月26日（月）工事立会に際して遺構確認
4月27日（火）遺構掘り下げ、記録作成

5月17日（月）発掘調査着手

5月28日（金）発掘調査終了

2 報告書作成の経過

平成6年度に実施した発掘調査の調査記録及び出土品については翌年度に整理作業を行い、平成8年3月に「絵図遺跡 南方遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』110として刊行した。しかし、平成5年度の調査については報告書作成の対象とされず、未整理のままとなっていた。令和元（2019）年度から、刊行されていない発掘調査報告書の作成と刊行を進めることとなり、絵図遺跡についても令和3年度に取り組んだ。わずか2週間の緊急調査であったことから記録として十分なものとは言い難いが、12月末にひとまず整理を完了した。（亀山）

日誌抄

令和3年（報告書作成）

4月1日（木）整理開始、遺構図面整理、
遺物実測着手
7月30日（金）遺物実測、遺構図面整理
終了

8月2日（月）遺構・遺物図トレース着手

9月30日（木）遺構・遺物図トレース終了

10月1日（金）原稿執筆着手

12月28日（火）原稿執筆終了、整理終了

3 発掘調査及び報告書作成の体制

平成5年度（立会調査、発掘調査）

岡山県教育委員会

教育長 森崎岩之助

岡山県教育庁

教育次長 黒崎 一秀
岸本 憲二

文化課

課長 渡辺 淳平
課長代理 松井 新一
課長補佐（埋蔵文化財係長） 高畑 知功
主査 時長 勇
文化財保護主事 亀山 行雄
（立会担当）

岡山県古代吉備文化財センター

所長 横山 常實

次長 葛原 克人

〈総務課〉

課長 北原 求

課長補佐（総務係長事務取扱） 小西 親男

主査 石井 茂

石井 善晴

主任 三宅 秀吉

〈調査第一課〉

課長 正岡 睦夫

課長補佐（第一係長事務取扱） 松本 和男

文化財保護主査 桑田 俊明

文化財保護主任 榎野 芳典

文化財保護主事（文化課本務） 亀山 行雄

（調査担当）

令和3年度（報告書作成）

岡山県教育委員会

教育長 鍵本 芳明

岡山県教育庁

教育次長 池永 亘

文化財課

課長 小林 伸明

副参事（文化財保存・活用担当）

尾上 元規

総括主幹（埋蔵文化財班長） 河合 忍

主幹 松尾 佳子

主事 九富 一

岡山県古代吉備文化財センター

所長 大橋 雅也

次長（総務課長事務取扱） 浅野 勝弘

参事（文化財保護担当） 亀山 行雄

（整理担当）

総括参事 高田恭一郎

〈総務課〉

総括主幹（総務班長） 多賀 克仁

主任 井上 裕子

表1 文化財保護法に基づく提出書類一覧

埋蔵文化財発掘の通知（法第57条の3）

文書番号 日付	種類及び名称	所在地	面積 (㎡)	目的	主体者	期間	主な勧告事項
教文埋 第7198号 H5.3.16	集落跡 津島・上伊福・南方遺跡	岡山市いずみ町～ 伊福町地内	1,400	電線埋設	建設省中国地方建設局長	H5.2.1～ H7.3.31	工事立会

埋蔵文化財発掘調査の通知（法第98条の2）

文書番号 日付	種類及び名称	所在地	面積 (㎡)	目的	主体者	担当者	期 間
教文埋 第1235号 H5.5.17	集落跡 絵図遺跡	岡山市絵図町1番地	90	キャブシステム建設に伴 う発掘調査	岡山県教育委員会教育長	亀山行雄	H5.5.17～6.11

埋蔵文化財発見の通知（法第98条の3）

文書番号 日付	物件名	出土地	出土年月日	発見者	土地所有者	現保管場所
教文埋 第3043号 H5.6.17	土器（弥生土器・土師器・須恵 器）15箱、石器（石斧・石鎌・ 剥片等）10点、木器（四脚盤）	岡山市絵図町1番地	H5.4.26～H5.5.28	岡山県教育委員会教育長	建設省	岡山県古代吉備 文化財センター

※文化財保護法の条項は当時のもの

第3節 調査の概要

1 基本層序

県営総合グラウンドの南80m（現あんしん祭典岡山前）から着手されたキャブシステムの建設工事は、国道53号の西側歩道部分に車道に接して鋼矢板を約2mの間隔で2列に打ち込み、その間を地表下約1.6mまで掘削する形で行われた。このため、立会調査区から発掘調査区に至る土層を通して観察することはできなかったが、立会調査区北端に残された土層断面によると、この地点の基本層序は次のとおりである（第5図）。

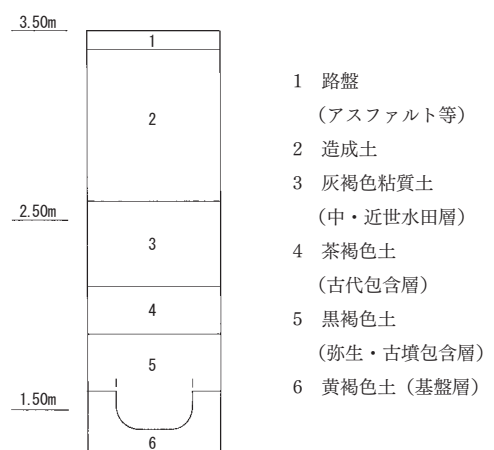
標高3.50mを測る厚さ10cmほどの路盤（アスファルト舗装、碎石）の下には厚さ80cmの造成土が施され、その下には灰白色をなす中世～近世の水田層が厚さ45cmにわたって認められた。さらにその下層には弥生時代～古墳時代の遺物を包含する茶褐色～黒褐色土層が厚さ55cmあり、これを除去すると標高1.6mの黄褐色をなす基盤層に達する。遺構はこの基盤層上で検出したが、本来は褐色～黒褐色土層中から掘りこまれていたものと思われる。



第4図 調査区配置図 (1/1,000)

2 概要

立会調査区は、県営総合グラウンドの南東隅から南へ約80m離れた位置にあり、延長22.3m、幅1.6～1.9m、面積は40㎡を測る。立会を行った時点では、すでに西半が基盤層まで掘削されており、遺物を包含する黒褐色土層は東半の幅約1mの範囲に残るのみであった。遺構はこの黒褐色土層から掘りこまれているものと思われたが、遺構の検出が困



第5図 基本層序模式図

難であったことから基盤となる黄褐色土層まで掘り下げて遺構を確認した。検出した遺構には、北端に重複して検出した溝2条と柱穴3基のほか、土坑43基がある。

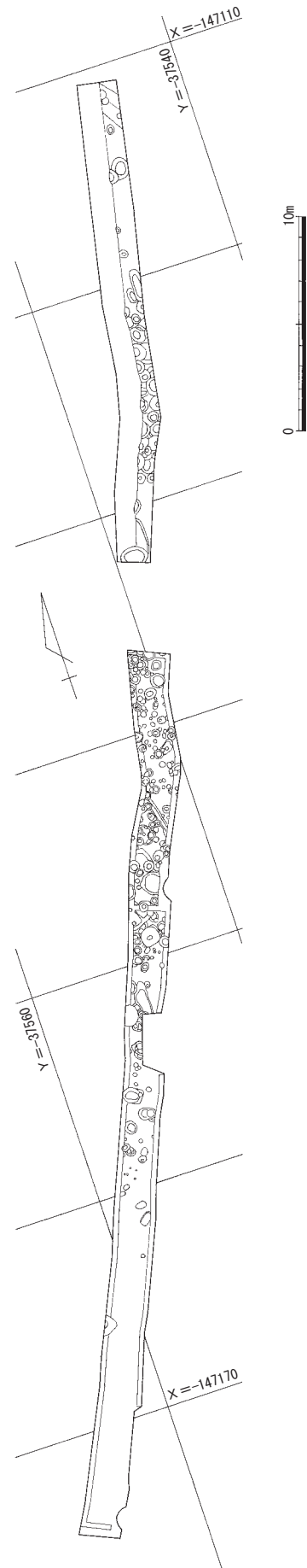
立会調査区の南に設定した発掘調査区は、延長40.8m、幅1.7～2.0m、面積71m²を測る。排土の都合上、1～3区に分割して調査を実施した。調査に当たっては、重機を使用して造成土を除去し、中世～近世の水田層と思われる灰白色土層から人力で掘り下げを行った。その下には弥生～古墳時代の遺物を包含する茶褐色土層、黒褐色土層が堆積していたが、いずれも層中で遺構を確認することはできなかった。基盤となる黄褐色土層の上面で検出した遺構には土坑36基、柱穴170基、溝1条があるが、そのほとんどは北側の1区、中央の2区に集中し、南側の3区では希薄であった。

3 検出遺構

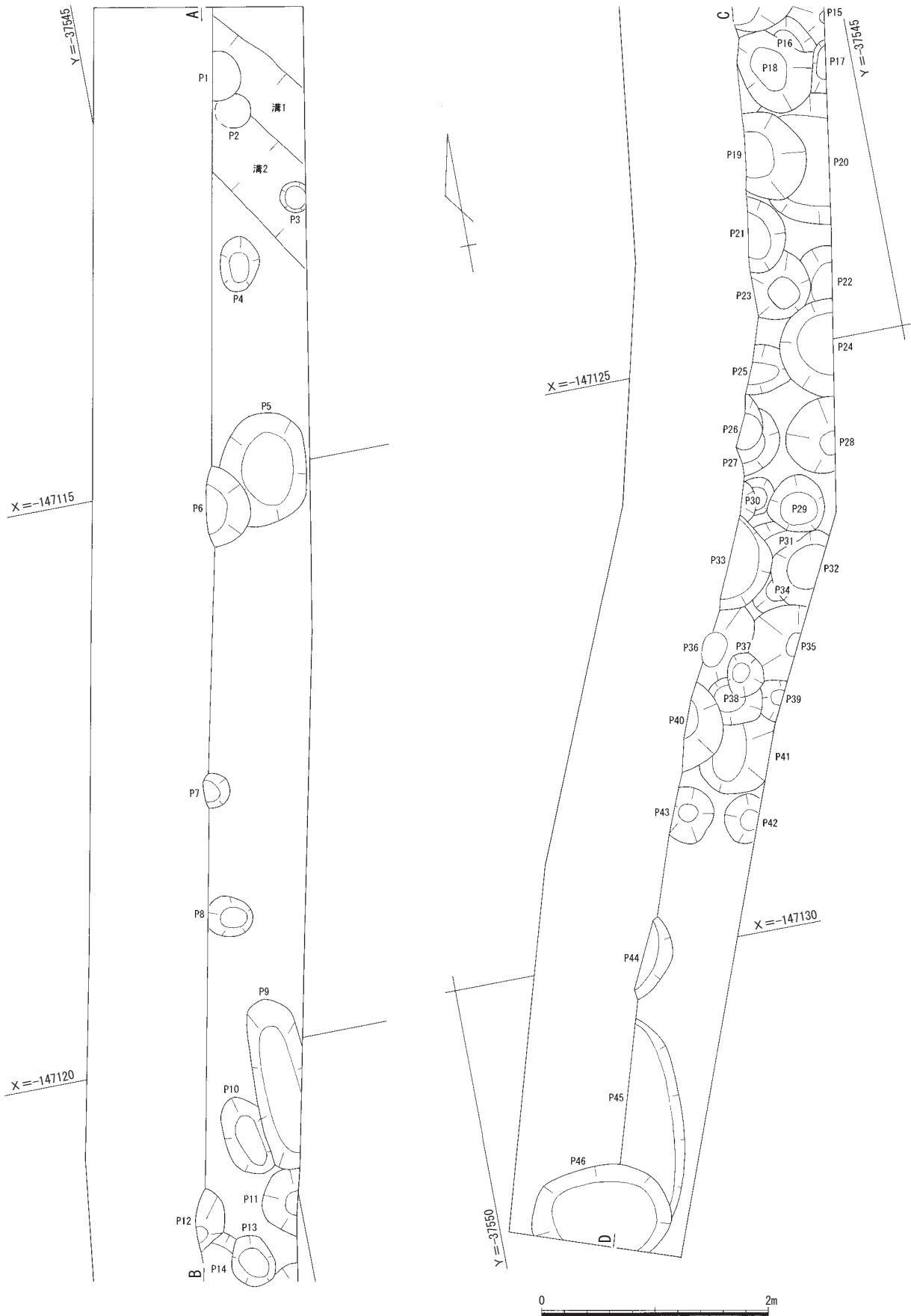
土坑（第7～13図、図版1～4）

立会調査区で検出した43基の土坑の大半は、北端から9～19mの範囲に相互に切り合って密集していた。平面が不整な円形ないし楕円形を呈する土坑は、長さ32cmを測る小形のP30から長さ152cmと大形のP9まで見られるが、長さ70cm前後のものが主体をなす。土坑の深さも10cmから64cmと幅があるが、北側から南側に向かうに従い深さを増す傾向が認められた。いずれも埋土には、基盤層に由来する黄褐色土塊を含み、人為的に埋められた可能性がある。第11図には遺物が比較的多く出土した土坑を中心に図示した。これらは出土した弥生土器から弥生時代中期中葉の遺構と思われる。

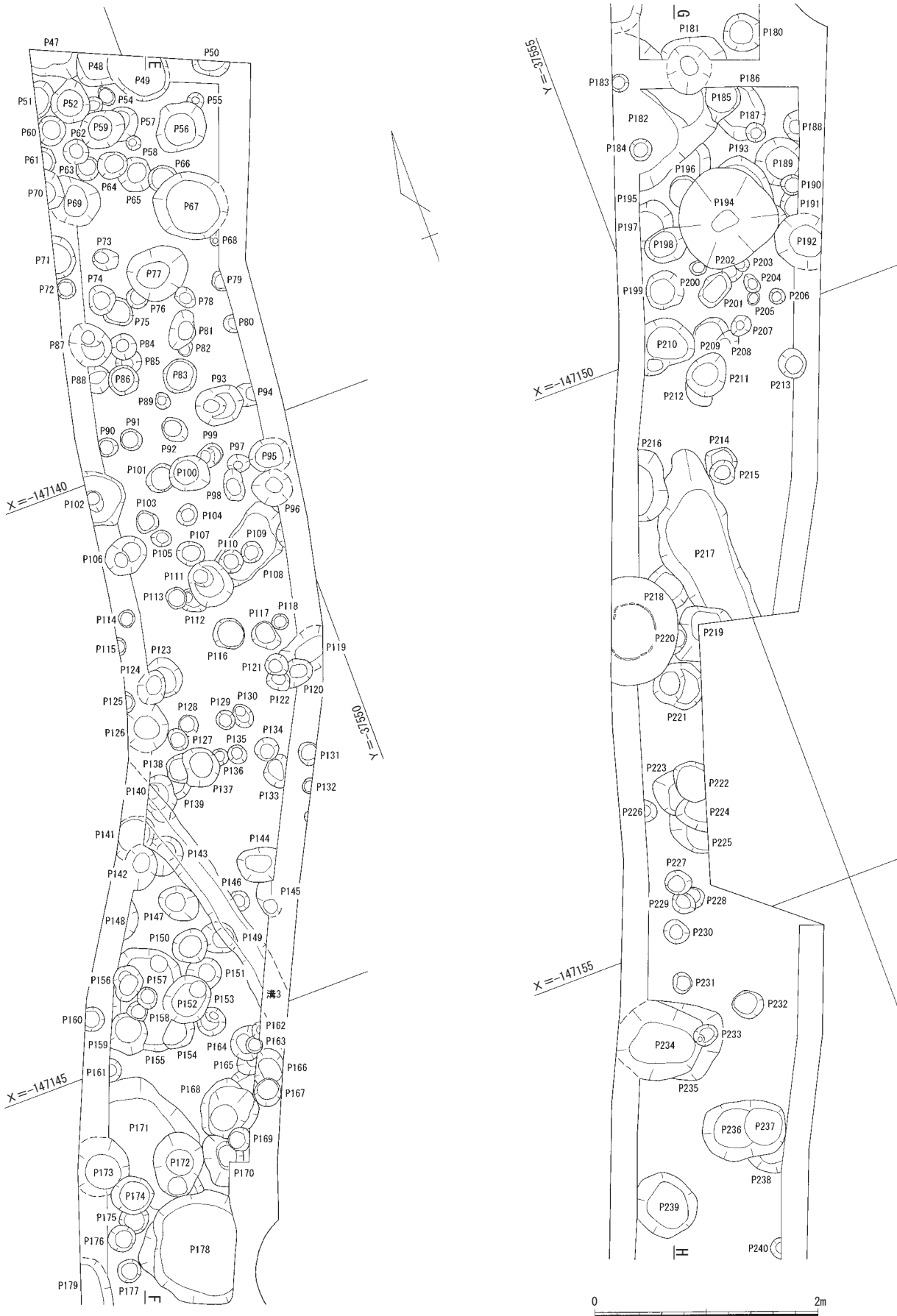
発掘調査区の土坑36基は、1区北端から3区中央にかけて散在していた。柱穴に切られるものも多く見受けられたが、土層から先後関係を確認できたものは少ない。1区の南端に位置するP178は、長さ106cmの不整円形を呈し、深さは49cmを測る。埋土には炭・灰が厚い層をなして堆積しており、何らかの生産に関わる遺構と考えられる。2区の北端で検出したP194は、長さ91cm、幅77cmの不整な円形を呈する。断面は深さ67cmにある底面に向かってすぼまる逆台形をなす。その形状は井戸と類似するが、底面は湧水層に達しておらず水溜めとして機能したものと思われる。埋土の上層では完形の甕2個体を覆うように壺96や甕97～100、高杯101～103、山陰系の器台105などの破片が投じられた状態で出土した。また、下層からは木製四脚盤の残欠W1が出



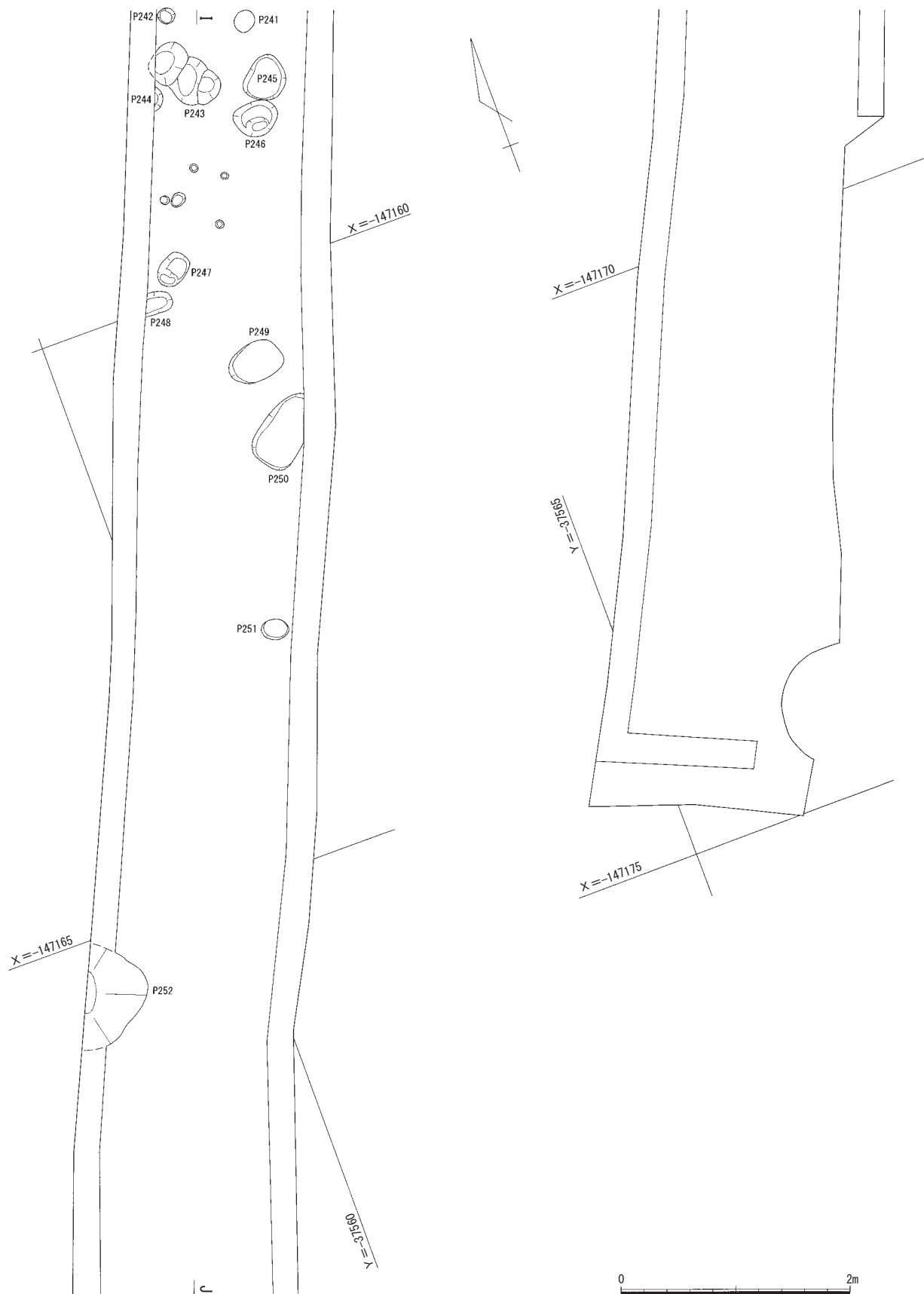
第6図 立会調査区・発掘調査区全体図（1/300）



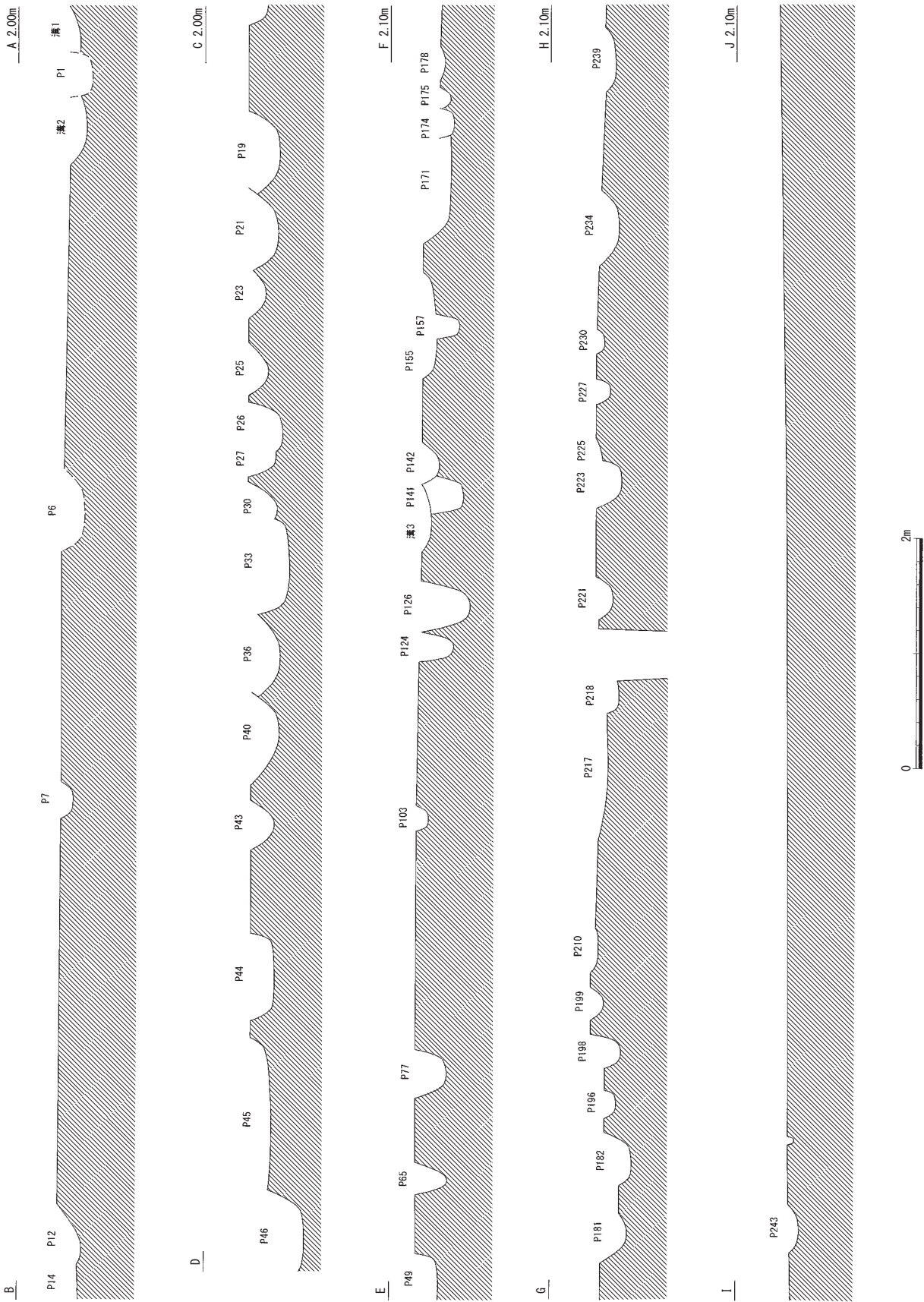
第7図 立会調査区遺構配置図 (1/50)



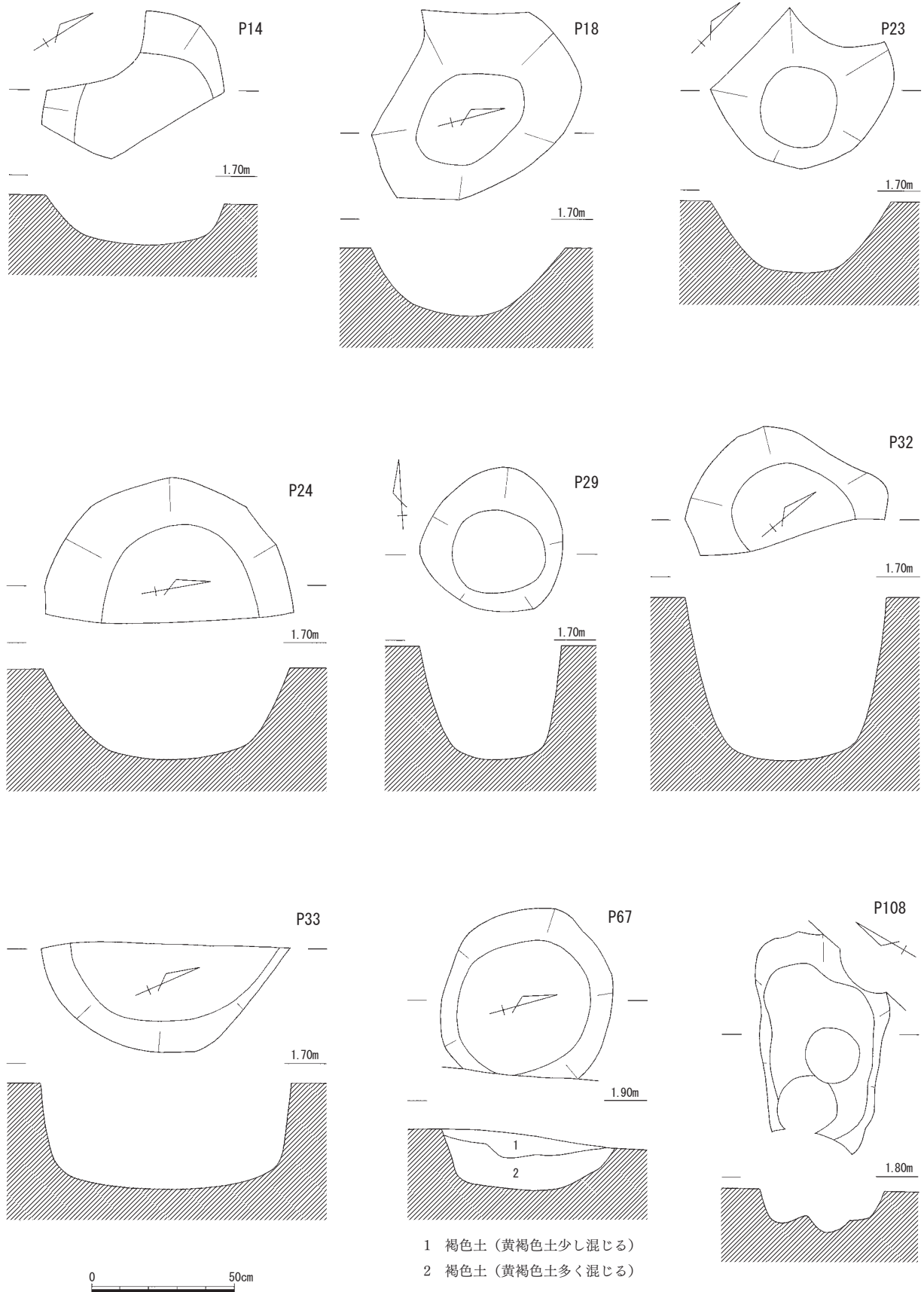
第8図 発掘調査1・2区遺構配置図 (1/50)



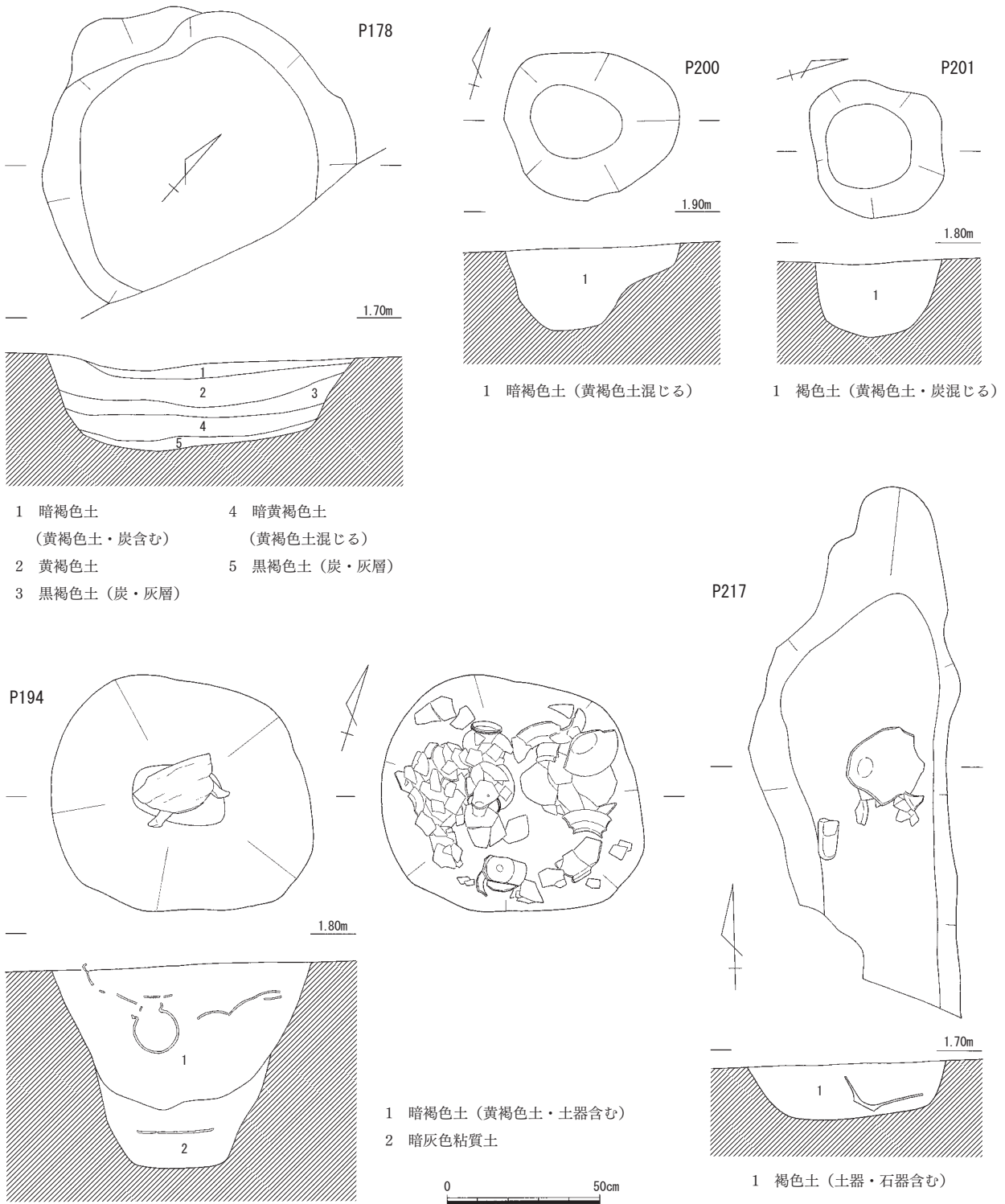
第9図 発掘調査3区遺構配置図 (1/50)



第10図 立会調査区・発掘調査区断面図 (1/50)



第11図 立会調査区の遺構 (1/20)

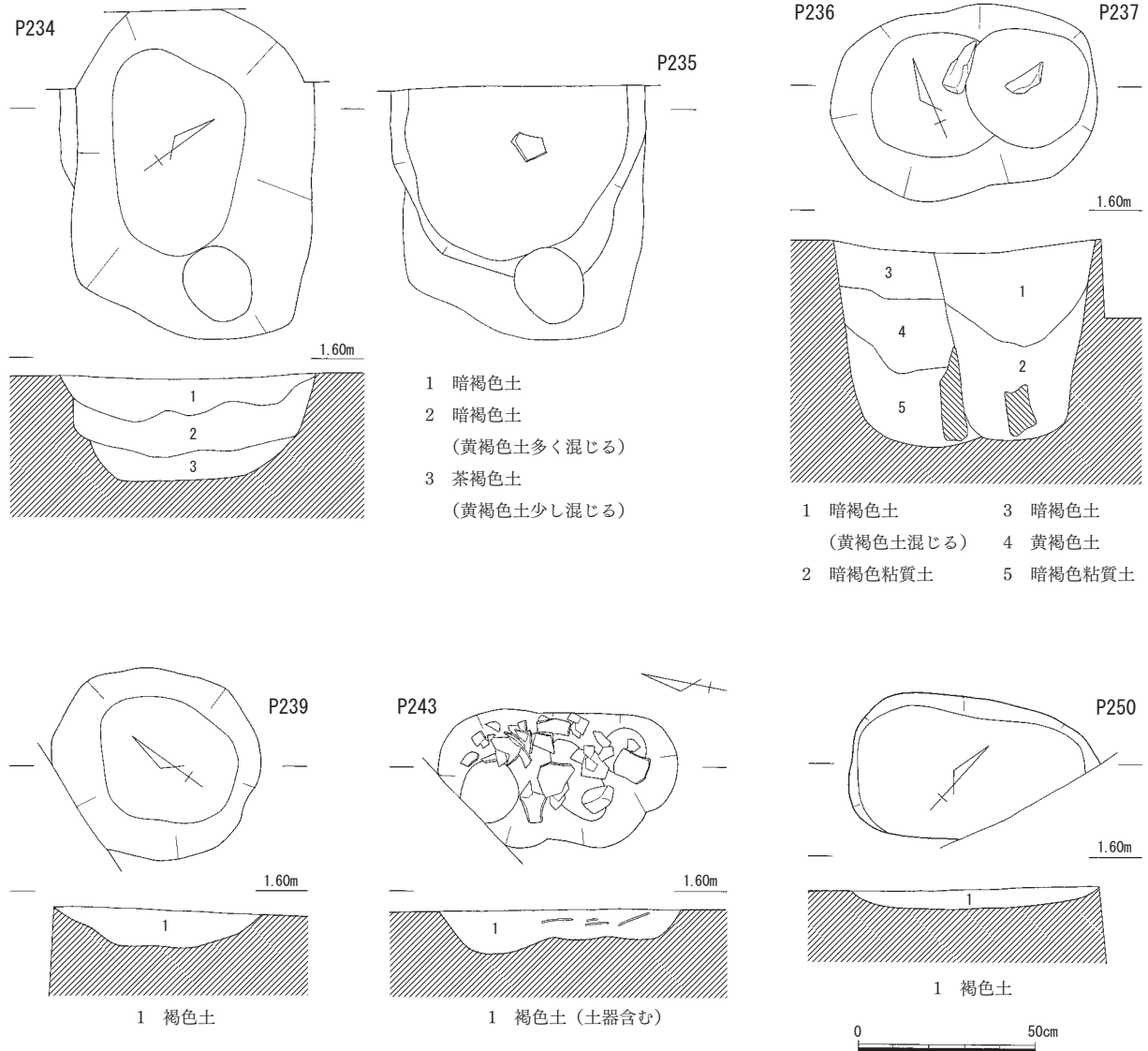


第12図 発掘調査区の遺構1 (1/20)

土した。なお、完形の甕については所在が確認できず図化していない。P 217 は2区の中央で検出した南北に長い土坑で、現存長175cm、幅65cmを測る。埋土から壺ないし甕の底部69とともに磨製石斧を転用した叩き石S16が出土した。

柱穴 (第7・8・10・13図)

立会調査区では、溝1・2の埋土から掘りこまれた柱穴3基を確認した。径は27～45cmを測り、



第13図 発掘調査区の遺構2 (1/20)

掘り下げを行ったP 3は深さ34cmを測る。遺物は出土していないが、他の遺構と同じ弥生時代中期中葉と思われる。

発掘調査区では、1区から2区にかけて170基の柱穴を検出した。径20～30cm、深さ15cmを測るのが主体をなすが、長径が40cmを超える楕円形の掘り方に径20cmの柱痕を残すP 87・93・106・111・140・152もある。このうち、127cmを測るP 87—P 93と160cmを測るP 93—P 106は直角に交わることから建物を構成する可能性もあるが、調査範囲の制約もあって断定しがたい。このほか、2区の南側で検出したP 236・237は径46～53cm、深さ56～58cmを測る大形の柱穴で、いずれも下部に柱根が遺存していた。

溝 (第7・8・10図)

立会調査区で2条、発掘調査区で1条の溝を検出した。

立会調査区の北端で検出した溝1・2は、北西から南東に走る。その走流方向は県営総合グラウンドの体育館建設に伴う発掘調査で検出された河道1・2と一致する。この河道1・2は弥生時代前期に機能し、中期の早い段階で埋没したとされ、この溝はその肩口に当たる可能性がある。埋土から壺

10が出土しており、弥生時代中期中葉と考えられる。

溝3は1区の中央を北北西～南南東に走る溝で、検出長2.3m、幅39cm、深さ9cmを測る。弥生時代中期中葉の壺46が出土している。

4 出土遺物

立会調査区（第14・18図、図版5-1・6-2）

東半部分を調査するにとどまったが、ここだけでも総重量7.06kgの弥生土器と石器が出土した。

1～3は口頸部に突帯を飾る壺で、1は肩部に櫛描き文を施す。4～6は口縁部が大きく開く壺で、6は口縁部上面に突帯を貼り付けて重弧文を表す。11は口縁部が短く直立する壺で、頸部に2個2対の円孔を穿つ。7～10は大きく開いた口縁部の端を下方に拡張する壺である。壺7・10は口縁部に凹線をめぐらせて刻みを施す。13は手捏ねの壺で、底部をつまみ出して脚台状につくる。14・15は体部から屈折して開く口縁部を持つ甕である。14は内外面ともヘラ磨き、15は外面をハケメ、内面をヘラ磨きで調整する。16は短く開く口縁部に凹線文をめぐらせて刻みを施す。17は体部から屈折して開く口縁部の端を上下に拡張し凹線文を施す甕である。18～24は壺ないし甕の底部である。このうち22には底面中央に穿孔が認められる。25は筒状の鉢と見られ、外面に櫛描き文を飾る。26は口縁部に凹線文をめぐらせて刻み目を施す鉢で、内外面をヘラ磨きで調整する。27も筒形の鉢で、底部に2個1対の穿孔を施す。29は椀形の杯部をもつ高杯で、杯底部の30は脚部との間に円盤を充填している。これらの大半は弥生時代中期中葉に属するが、中期前葉まで遡るP9・18・46の壺4～6や、中期後葉に下るP29の甕17もある。

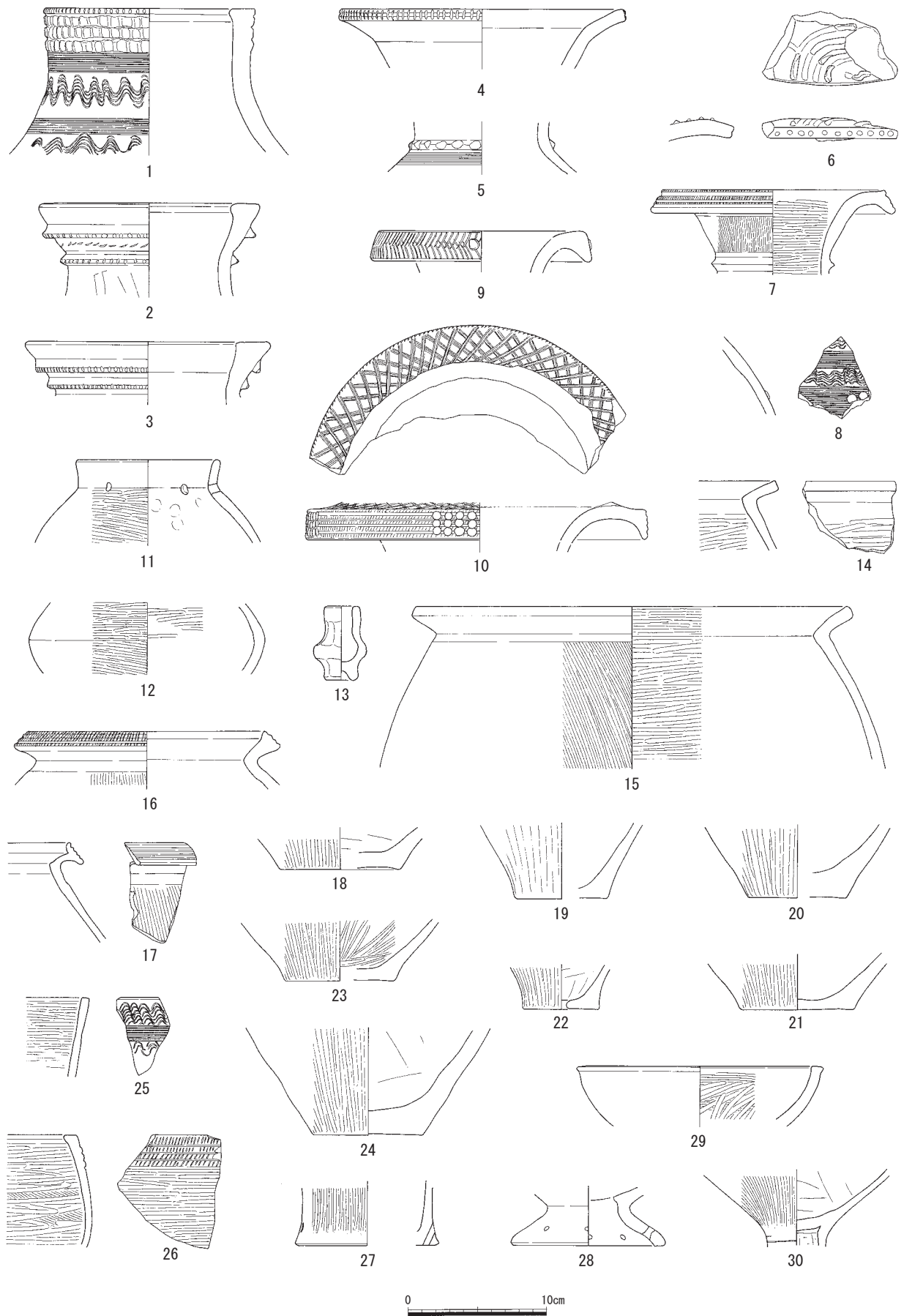
石器はS15のみ図示し得た。長さ10.0cm、厚さ2.1cmの板状をした安山岩の剥片で、磨製石器の製作に関わるものと思われる。

発掘調査区（第15～18図、図版5-2、6）

総重量9.60kgの弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器のほか、木器、石器が出土した。

弥生土器には壺31～47、甕48～62、高杯76～87、鉢88～94などがある。31～35は口縁部の外面に刻み目突帯をめぐらせる壺で、大形の31は円形や棒状の浮文を貼り付ける。36・37・41は筒状の頸部から水平に開く口縁部を持ち、41は口縁部上面に突帯を貼り付ける。38はわずかに肥厚した口縁端部に羽状文を飾る。39・40は斜め下方に引き延ばした口縁端部に凹線文と刻み目を施す壺で、39は頸部に突帯をめぐらせ、40は口縁部内面に櫛描き文を飾る。43・44は上下に拡張した口縁部や筒状の頸部に凹線文をめぐらす。48～56は体部から屈折して開く口縁部を持つ甕で、48は口縁下に櫛描き沈線を飾り、49・52は内面をヘラ磨き、50・51・53・55はハケメで調整する。57～60は拡張した口縁端部に凹線文をめぐらす甕で、59は内面をヘラ削りする。63～75は壺ないし甕の底部で、64・67・72では底面中央に穿孔が見られる。高杯の杯部には、浅い皿形の76～78、深い鉢形の80、口縁部が外反する79がある。81～83は脚部との接合部で、いずれも円盤充填の痕が認められる。脚裾部には長方形ないし三角形の透かしを開ける84～86と、円孔を穿つ87とがある。88～90は筒形の鉢で、口縁部から体部にかけて櫛描き文を飾る。口縁部に凹線文を施す95は壺ないし器台と見られる。これらは中期中葉のものが主体をなすが、包含層から出土した壺43・44、甕57は中期後葉、甕58～62は後期前葉、中・近世水田層から出土した高杯79は後期中葉に下る。

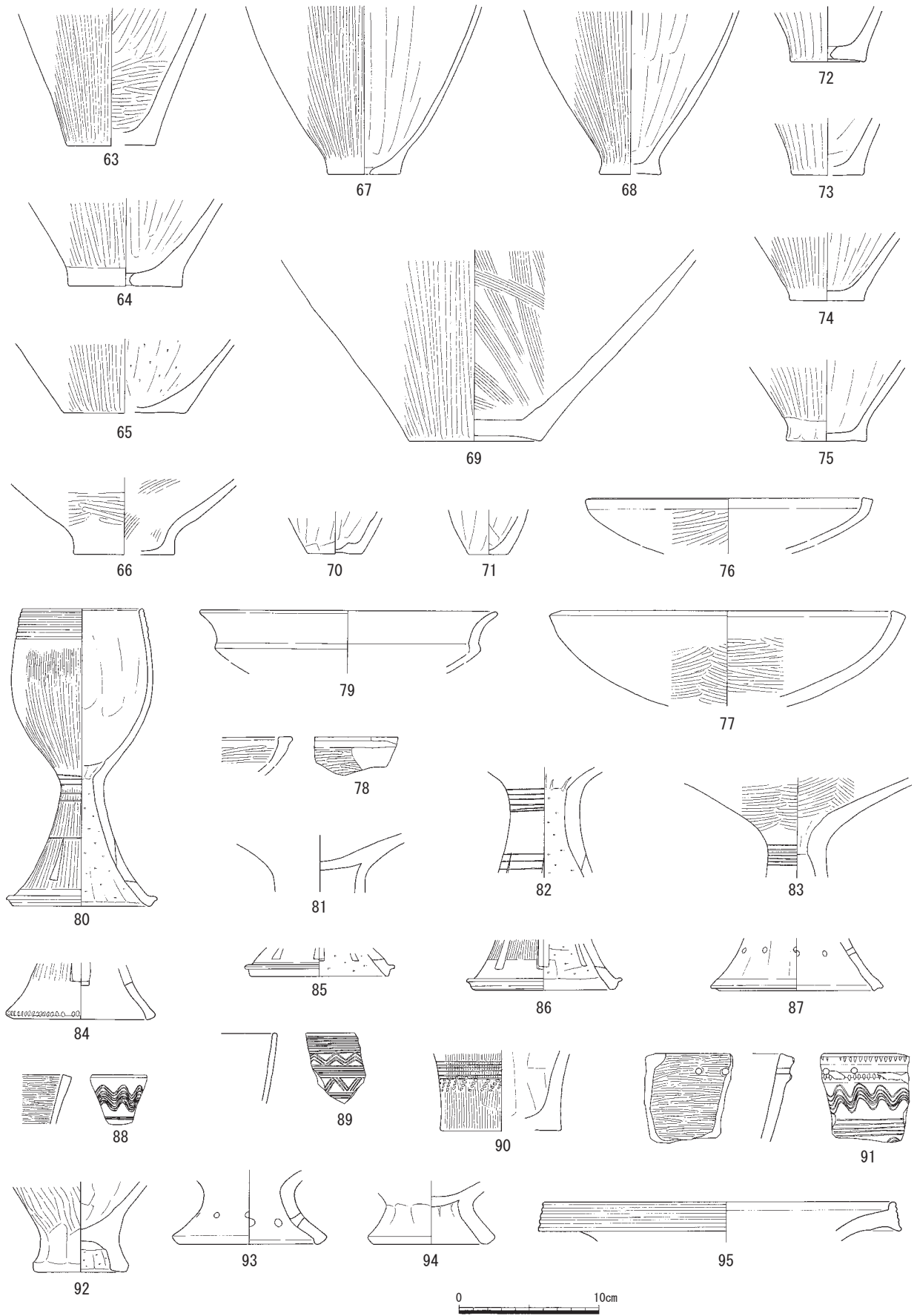
古墳時代の土師器にはP194から出土した96～103・105のほか、包含層出土の104・106・107



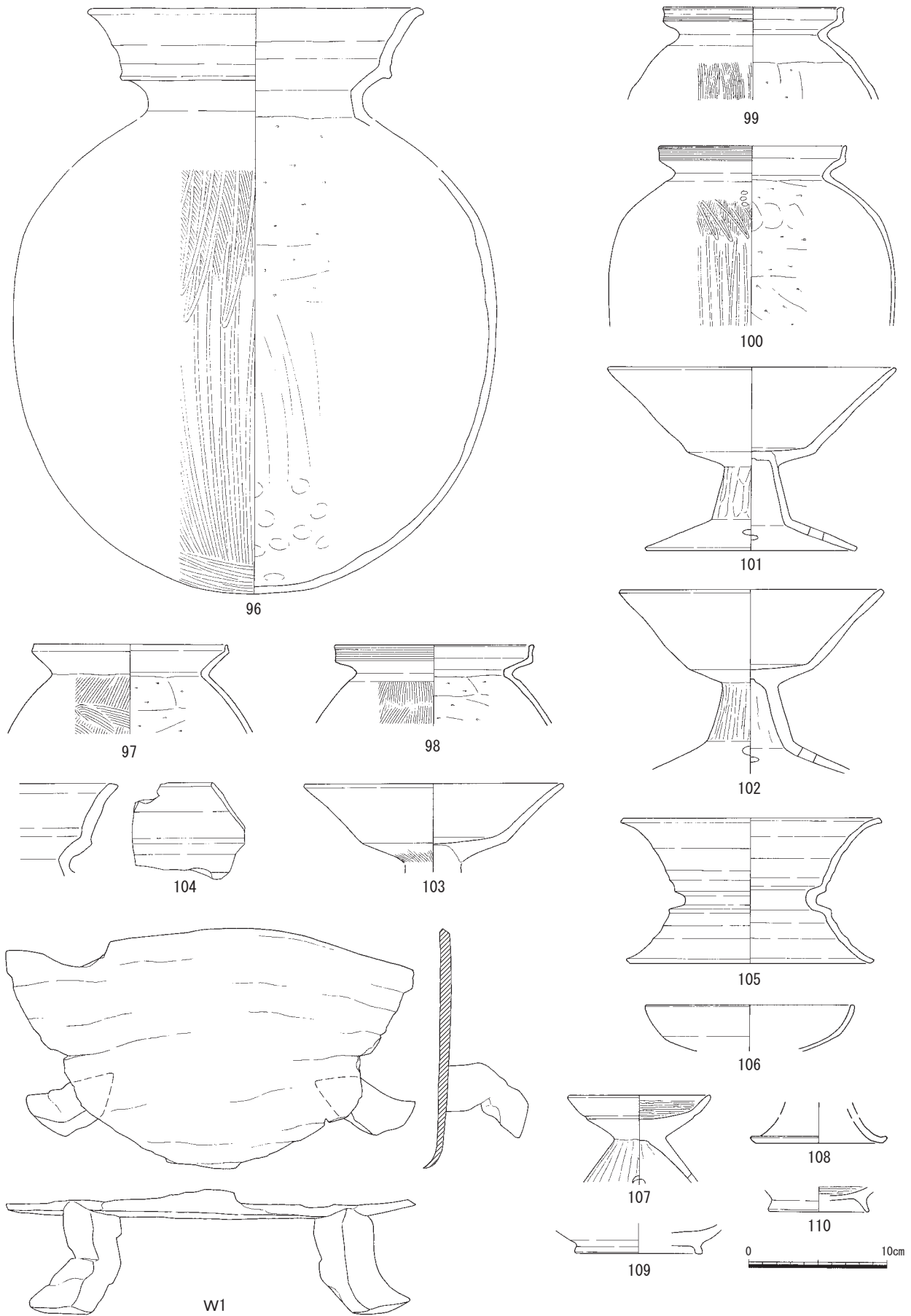
第14図 立会調査区の弥生土器 (1/4)



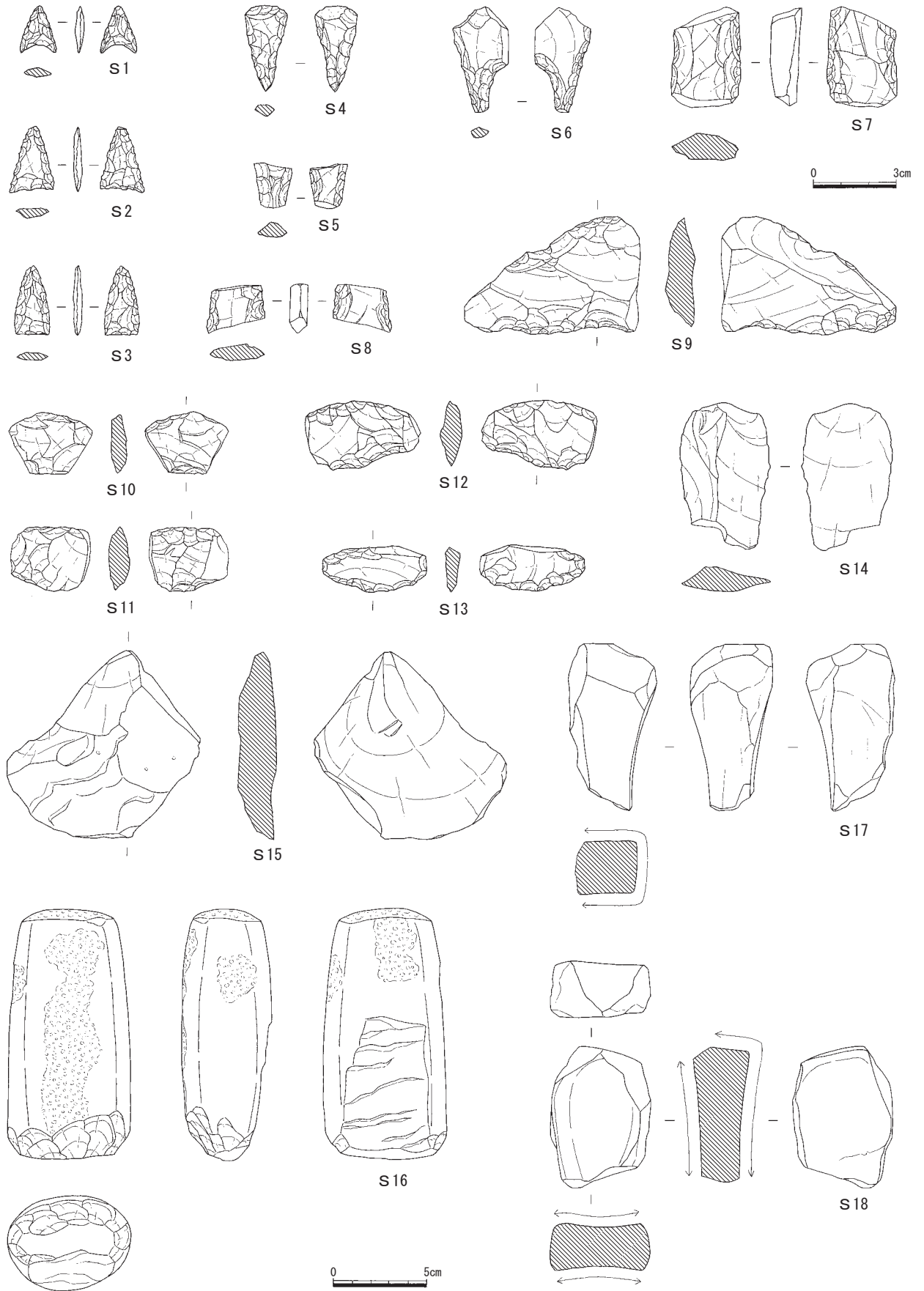
第15図 発掘調査区の弥生土器 1 (1/4)



第16図 発掘調査区の弥生土器2 (1/4)



第17図 発掘調査区の土師器・須恵器・木器 (1/4)



第18図 立会調査区・発掘調査区の石器 (1/2・1/3)

がある。96は二重口縁を持つ壺で、ほぼ全形を知りうる。やや肩の張る体部は外面をハケメとヘラ磨きで調整し、内面にヘラ削りと指押さえの痕を残す。97は外反する口縁端部を僅かに上方へつまみ上げる甕である。体部の外面はハケメ、内面はヘラ削りで調整する。98～100は短い二重口縁に櫛描き沈線を施す甕である。体部の外面はハケメと筋状のヘラ磨き、内面は右方向にヘラ削りする。101～103は上方に大きく開く杯部と中空につくられた脚部を持つ高杯で、粗い胎土を持つ103の内外面には赤色顔料が施されていた。105は鼓形をした器台で、内外面に赤色顔料の塗布が認められる。104は内外面をヨコナデで調整した二重口縁を持つ鉢、106は浅い皿形の鉢である。精良な胎土でつくられた107は浅い受け部と下方に開く脚部を持つ小形の器台である。このほか、茶褐色土層の上に堆積する中・近世水田層から出土した遺物として古代の須恵器や黒色土器がある。須恵器には、脚部の端を斜め上方に折り返す高杯108と、高台を持つ杯109がある。黒色土器110は、ヘラ磨きを施した内面を黒色処理した椀の高台部である。

P 194から出土したW 1は、外方に踏ん張る断面三角形の脚部を持つ木製の盤で、現存長29.5cm、現存高9.0cmを測る。樹種は同定できていない。

石器は93点あるが、そのうちの69点が2区からの出土である。遺構に伴うものは28点と少なく、その多くが中・近世水田層や黒褐色の包含層から出土した。石材はサヌカイトが73点(356.6g)と大半を占めるが、安山岩が19点(1116.4g)、花崗岩が2点(331.3g)ある。サヌカイト製の石器には、凹基鏃S 1、平基鏃S 2・3、石錐S 4～6、石剣S 8のほか、調整のある剥片や使用痕のある剥片が多数ある。安山岩製の石器は、P 217出土の磨製石斧を転用した叩き石S 16を除けば、母岩を縦長に剥離したS 14のような剥片ばかりで、磨製石器の製作に関わるものと思われる。細粒花崗岩製の石器には、P 102・178から出土した砥石S 17・18がある。(亀山)

第4節 総括

1 絵図遺跡の構造

吉備高等学校（現岡山商科大学附属高等学校）の一角に遺跡が所在することは早くから知られていたが、本書に収載した平成5年度の発掘調査によりその範囲は国道53号の西側にも及んでいることが明らかとなった。さらに、ここから南西に約260m離れた住宅地でも、微高地が確認されている⁽¹⁾。また平成6年度の発掘調査では、岡山フェアレーンの南西において大規模な河道を確認しており、これが遺跡の南限に当たるものと考えられる⁽²⁾。一方、北側の県営総合グラウンドでは、南西側の体育館で絵図遺跡と連続する弥生時代中期の集落を検出しており、その北端は陸上競技場辺りまで広がることも十分に考えられる⁽³⁾。以上のことから絵図遺跡の範囲は、東西約200m、南北約300mを超えるものと推測される。

さて、この遺跡範囲の西側に当たる平成5年度の調査区では、土坑79基、柱穴151基、溝3条を検出した。これらを検出した黄褐色土層の上面は、立会調査区で1.6～1.7m、発掘調査区で1.5～1.7mを測り、あまり差は認められない。しかし、土坑底面の標高を比較すると、立会調査区では平均1.39mであるのに対し、発掘調査1区では平均1.51m、同2区では平均1.27mを測る。同様の傾向は柱穴底面においても認められることから、中央の発掘調査1区が高く、北側の立会調査区や南側の発掘調査2区が低い地形が想定される。このことは、地形の高い発掘調査1区に掘立柱建物を構成する柱穴が集中する状況からしても認めてよいであろう。こうした掘立柱建物群の性格を知る手がかりは乏しいが、P178のような「灰穴」を考慮すれば工房が含まれることも考えられる。また立会調査区の土坑群は、掘削と埋め立てを繰り返していること、埋土に魚骨や炭化穀物を含むことから、ゴミ穴として利用したものと考えたい。

ところで県営総合グラウンドでは、体育館の北西から南東に走る河道跡を挟んで、東と西に集落遺構が展開している。限られた範囲の調査ではあるが、それぞれ竪穴住居数軒で構成されており、特に東側では住居廃絶後に墓地が営まれている。これに平成5年度調査の知見を加えると、絵図遺跡では微高地の北側に居住域や墓域が設定され、縁辺は生産や廃棄の場として利用されたことになる。中期前葉の遺物や中期後葉の遺構がわずかに見られるものの、中期中葉という限られた時期に集落の中心があったことは間違いない。

2 旭川西岸における弥生集落の動態

弥生時代前期の集落は、津島岡大遺跡⁽⁴⁾や津島遺跡⁽⁵⁾、南方遺跡⁽⁶⁾などで確認されているが、いずれも規模は小さい。これに対し、津島岡大遺跡や津島遺跡の周辺に開かれた水田は東西約1kmにも及んでおり、その経営実態についてはいまだ不明な点が多い⁽⁷⁾。

弥生時代中期には、南方遺跡（前葉～後葉）をはじめ絵図遺跡（中葉）、上伊福立花遺跡（中葉～後葉）⁽⁸⁾、上伊福九坪遺跡（後葉）⁽⁹⁾が東西1.5km、南北1kmの居住域を形成する。これらの集落では安山岩を使った磨製石器の製作や、灰穴が示すような高温操業を伴う生産⁽¹⁰⁾が行われたようであるが、須玖I式、下城式、入来2式などの九州系土器や南海産のゴホウラ、イモガイ製品、中国燕の双翼式銅鏃といった搬入品の出土は南方遺跡に集中している⁽¹¹⁾。このことは南方遺跡が、それぞ

れの集落で生産された品々を集積し流通させる役割を担っていたことの反映と見られ、これには旭川の河道に近い南方遺跡の立地が深くかかわっていたに違いない。

しかし中期末になると、これらの集落は衰退に向かう。このころ、旭川の沖積作用が活発化したようで、津島遺跡⁽¹²⁾や伊福定国前遺跡⁽¹³⁾では水田が埋没して新たな微高地が形成される。また、旭川の河口近くに天瀬遺跡や鹿田遺跡が営まれるのもこの時期である。こうした沖積化の進行は、ここに集住した人々に食料を供給していた生産基盤を奪ったばかりでなく、南方遺跡が持っていた流通拠点としての機能をも失わせたに違いない。南方遺跡や上伊福九坪遺跡、上伊福立花遺跡に暮らした人々は、津島遺跡や伊福定国前遺跡、あるいは川筋を下って天瀬遺跡や鹿田遺跡へ移り住んだのかもしれない。こうして形成された弥生時代後期の集落は、古墳時代前期まで継続して営まれることになる。(亀山)

註

- (1) 岡山市教育委員会 2016 「南方遺跡 岡山済生会総合病院新病院建設に伴う発掘調査」
- (2) 岡山県教育委員会 1996 「絵図遺跡 南方遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』110
- (3) 岡山県教育委員会 2005 「津島遺跡 6 岡山県総合グラウンド新体育館建設に伴う発掘調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』190
- (4) 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1998 「津島岡大遺跡 10」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』14
岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 2003 「津島岡大遺跡 11」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』16
- (5) 岡山県教育委員会 2000 「津島遺跡 2 武道館建設当初予定地の発掘調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』151
岡山県教育委員会 2001 「津島遺跡 3 北池・南池地点の発掘調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』160
- (6) 岡山市教育委員会 2007 「南方（済生会）遺跡 2 介護老人保健施設たちばな苑建設に伴う発掘調査」
- (7) 亀山行雄 2013 「百間川遺跡群の弥生前期水田 シンポジウム『水稻農耕のはじまりを考える—岡山平野の水田研究—』の発表記録」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2011』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- (8) 岡山市教育委員会 2015 「上伊福（済生会）遺跡 1 岡山済生会総合病院女子寮建設に伴う発掘調査」
岡山市教育委員会 2016 「上伊福（済生会）遺跡 2 岡山済生会総合病院管理棟・立体駐車場建設に伴う発掘調査」
岡山市教育委員会 2017 「上伊福（済生会）遺跡 3 岡山済生会総合病院管理棟・立体駐車場建設に伴う発掘調査」
岡山市教育委員会 2018 「上伊福（済生会）遺跡 4 岡山済生会総合病院Ⅰ期建設工事に伴う発掘調査」
岡山市教育委員会 2021 「上伊福（済生会）遺跡 5 岡山済生会総合病院Ⅱ期建設工事に伴う発掘調査」
- (9) 中野雅美・根木 修 1986 「上伊福九坪遺跡」『岡山県史 考古資料』岡山県
- (10) 津島遺跡や上伊福九坪遺跡の灰穴は、砂礫が高温により熔融したガラス質滓を伴っている。
- (11) 岡山市教育委員会 2016 「南方遺跡 岡山済生会総合病院新病院建設に伴う発掘調査 第1分冊」
岡山市教育委員会 2017 「南方遺跡 岡山済生会総合病院新病院建設に伴う発掘調査 第2分冊」
岡山市教育委員会 2017 「南方遺跡 岡山済生会総合病院新病院建設に伴う発掘調査 第3分冊」
- (12) 岡山県教育委員会 1999 「津島遺跡 岡山家庭裁判所所長宿舎建て替えに伴う発掘調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』110
- (13) 岡山県教育委員会 2010 「伊福定国前遺跡 独立行政法人国立病院機構岡山医療センター宿舎整備工事に伴う発掘調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』224

表2 遺構一覧表

地区	遺構名		平面形	長さ (cm)	底面標高 (cm)	出土遺物			備考
	掲載名	調査名				種類	重量(g)	時期	
立会	P1		円形	45	—				柱穴、溝1・2、P2を切る
立会	P2		円形	31	—				柱穴、溝1・2を切る
立会	P3		円形	27	126				柱穴、溝2を切る
立会	P4		楕円形	48	—				土坑
立会	P5	No40	楕円形	103	149	弥生土器	125	弥中Ⅲ	土坑
立会	P6		—	(72)	—				土坑、P5を切る
立会	P7		—	(31)	151				土坑
立会	P8		楕円形	(33)	157				土坑
立会	P9	No37	長楕円形	152	151	弥生土器	50	弥中Ⅲ	土坑、P10・11を切る
立会	P10	No36	楕円形	72	151				土坑
立会	P11	No35	—	61	150				土坑
立会	P12	No34	—	57	143				土坑、P14を切る
立会	P13	No33	不整円形	47	142	弥生土器	60	弥中Ⅲ	土坑、P14を切る
立会	P14	No31	—	64	146	弥生土器	260	弥中Ⅲ	土坑、P15・16を切る
立会	P15	No30	—	(52)	141				土坑
立会	P16	No29	—	(45)	144				土坑、P15を切る
立会	P17	No28	—	(48)	—				土坑、P15・16を切る
立会	P18	No27	不整楕円形	76	136	弥生土器、石器	105	弥中Ⅲ	土坑、P20を切る
立会	P19	No26	—	75	135	弥生土器	180	弥中Ⅲ	土坑、P20を切る
立会	P20	No25	—	108	159	弥生土器	15	弥中Ⅲ	土坑
立会	P21	No24	—	65	136				土坑、P23を切る
立会	P22	No38・39	—	(73)	—				土坑
立会	P23	No23	—	64	135	弥生土器	195	弥中Ⅲ	土坑、P22を切る
立会	P24	No22	—	88	129	弥生土器、石器	240	弥中Ⅲ	土坑、P22・25を切る
立会	P25	No21	—	(43)	143				土坑、P26を切る
立会	P26	No19	—	(49)	133	弥生土器	30	弥中Ⅲ	土坑、P27を切る
立会	P27	No20	—	61	138				土坑
立会	P28	No18	—	71	119	弥生土器			土坑、P24を切る
立会	P29	No17	不整円形	51	137	弥生土器、石器	210	弥中Ⅲ	土坑、P30・31を切る
立会	P30	No16	—	32	163				土坑
立会	P31		—	(39)	146				土坑
立会	P32	No14	—	70	106	弥生土器	685	弥中Ⅲ	土坑、P31・34を切る
立会	P33	No13	—	(85)	125	弥生土器	360	弥中Ⅲ	土坑、P31・34・36を切る
立会	P34		—	(37)	—				土坑
立会	P35	No12	—	68	121	弥生土器	870	弥中Ⅲ	土坑、P32を切る
立会	P36	No9	—	89	133	弥生土器	85	弥中Ⅲ	土坑、P35を切る
立会	P37	No10	不整円形	38	135				土坑、P35～39を切る
立会	P38	No8	不整円形	48	135				土坑、P36・39～41を切る
立会	P39	No11	—	38	—				土坑、P35・41を切る
立会	P40	No6	—	(80)	135	弥生土器	195	弥中Ⅲ	土坑、P36・38・41を切る
立会	P41	No7	—	(61)	135	弥生土器	20	弥中Ⅲ	土坑
立会	P42	No5	不整円形	44	147	弥生土器	50	弥中Ⅲ	土坑
立会	P43	No4	不整円形	50	136	弥生土器	50	弥中Ⅲ	土坑
立会	P44	No3	—	(75)	—	弥生土器	105	弥中Ⅲ	土坑
立会	P45	No2	—	(181)	141	弥生土器	440	弥中Ⅲ	土坑
立会	P46	No1	楕円形	122	112	弥生土器	115	弥中Ⅲ	土坑、P45を切る
立会	溝1・2	溝	—		140	弥生土器	310	弥中Ⅲ	
1区	P47		—	(44)	—				土坑、P48を切る
1区	P48	P1	—	(49)	155				土坑
1区	P49	P93	楕円形	(50)	158	弥生土器	50	弥中Ⅲ	土坑、P48を切る
1区	P50		—	(34)	153				柱穴

第1章 絵図遺跡

地区	遺構名		平面形	長さ (cm)	底面標高 (cm)	出土遺物			備考
	掲載名	調査名				種類	重量(g)	時期	
1区	P51		—	(34)	—				柱穴
1区	P52	P96	不整形	41	148	弥生土器	95	弥中Ⅲ	柱穴、P51・53を切る
1区	P53		—	(11)	164				柱穴、P54を切る
1区	P54		楕円形	19	153				柱穴
1区	P55	P95	円形	15	172				柱穴
1区	P56	P36	不整形	49	150	弥生土器	110	弥中Ⅲ	土坑、P55を切る
1区	P57	P86	—	(29)	151	弥生土器	65	弥中Ⅲ	柱穴
1区	P58	P2	円形	14	163				柱穴、P57を切る
1区	P59	P33	楕円形	42	150	弥生土器、石器	65	弥中Ⅲ	柱穴、P57を切る
1区	P60		円形	36	153				柱穴
1区	P61		—	(24)	160				柱穴
1区	P62		円形	23	149				柱穴、P63を切る
1区	P63	P97	円形	22	—	弥生土器	70	弥中Ⅲ	柱穴
1区	P64	P3	円形	27	160	弥生土器	30	弥中Ⅲ	柱穴、P63・65を切る
1区	P65	P51	円形	32	144	弥生土器	40	弥中Ⅲ	柱穴
1区	P66	P92	円形	26	174				柱穴、P65を切る
1区	P67	SK01	不整形	59	155				土坑、P66・68を切る
1区	P68	P94	—	15	163	弥生土器			柱穴
1区	P69	P42	楕円形	(46)	152	弥生土器	30	弥中Ⅲ	柱穴
1区	P70	P43	—	37	155	弥生土器	90	弥中Ⅲ	柱穴、P61・69を切る
1区	P71	P67	—	(39)	155				柱穴
1区	P72	P65	円形	19	154				柱穴
1区	P73	P4	楕円形	23	161				柱穴
1区	P74	P5	不整形	27	163	弥生土器	30	弥中Ⅲ	柱穴、P75を切る
1区	P75	P40	不整形楕円形	(26)	174	弥生土器	10	弥中Ⅲ	柱穴
1区	P76	P91	円形	(19)	170	弥生土器			柱穴、P75を切る
1区	P77	P37	楕円形	54	150	弥生土器	120	弥中Ⅲ	土坑、P76を切る
1区	P78	P6	楕円形	21	167				柱穴、P77を切る
1区	P79	P32	—	(18)	168	弥生土器	10	弥中Ⅲ	柱穴
1区	P80	P31	—	(17)	172				柱穴
1区	P81	P7	不整形楕円形	37	163	弥生土器	10	弥中Ⅲ	柱穴、P82を切る
1区	P82	P8	不整形	(14)	175				柱穴
1区	P83	P41	円形	32	173				柱穴
1区	P84	P49	円形	24	148	弥生土器	10	弥中Ⅲ	柱穴、P85を切る
1区	P85	P50	—	24	164	弥生土器	10	弥中Ⅲ	柱穴
1区	P86	P63	円形	28	165				柱穴、P85・88を切る
1区	P87	P38	楕円形	(39)	157	弥生土器	125	弥中Ⅲ	柱穴、P84・88を切る
1区	P88	P64	円形	(25)	170	弥生土器、石器	15	弥中Ⅲ	柱穴
1区	P89	P9	不整形	16	175				柱穴
1区	P90	P27	円形	(16)	166	弥生土器	55	弥中Ⅲ	柱穴
1区	P91	P28	円形	21	154	弥生土器	5	弥中Ⅲ	柱穴
1区	P92	P10	楕円形	26	162	弥生土器	5	弥中Ⅲ	柱穴
1区	P93	P30	不整形	43	150	弥生土器	55	弥中Ⅲ	柱穴、P94を切る
1区	P94	P29	—	(21)	165				柱穴
1区	P95	P69	楕円形	(30)	158				柱穴、P97を切る
1区	P96	P68	楕円形	(33)	148	弥生土器	40	弥中Ⅲ	柱穴、P95・108を切る
1区	P97	P35	楕円形	21	157	弥生土器	10	弥中Ⅲ	柱穴
1区	P98	P34	楕円形	30	151				柱穴、P97を切る
1区	P99	P82	楕円形	(29)	158				柱穴
1区	P100	P11	不整形	35	155	弥生土器	60	弥中Ⅲ	柱穴、P99・101を切る
1区	P101		不整形	28	151				柱穴

地区	遺構名		平面形	長さ (cm)	底面標高 (cm)	出土遺物			備考
	掲載名	調査名				種類	重量(g)	時期	
1区	P102	P62	—	(47)	144	弥生土器	110	弥中Ⅲ	柱穴
1区	P103	P18	不整円形	20	178				柱穴
1区	P104	P12	不整円形	20	169				柱穴
1区	P105	P17	不整円形	19	170				柱穴
1区	P106	P61	楕円形	49	134	弥生土器	85	弥中Ⅲ	柱穴
1区	P107	P13	楕円形	25	169	弥生土器	10	弥中Ⅲ	柱穴
1区	P108	SK02	隅丸方形	(70)	157	弥生土器	30	弥中Ⅲ	土坑
1区	P109		円形	19	152				柱穴、P108を切る
1区	P110		円形	22	151				柱穴、P108・109を切る
1区	P111	P20	楕円形	43	150	弥生土器	190	弥中Ⅲ	柱穴、P107・108・112を切る
1区	P112	P39	楕円形	(22)	154	弥生土器	20	弥中Ⅲ	柱穴
1区	P113	P19	円形	18	158				柱穴、P112を切る
1区	P114	P73	円形	16	155				柱穴
1区	P115		—	(17)	141				柱穴
1区	P116	P14	円形	29	162	弥生土器	25	弥中Ⅲ	柱穴
1区	P117	P15	不整楕円形	27	157				柱穴
1区	P118	P16	円形	15	171				柱穴
1区	P119	P87	楕円形	(49)	143	弥生土器	80	弥中Ⅲ	土坑
1区	P120	P71	不整円形	(29)	142	弥生土器	75	弥中Ⅲ	柱穴、P119を切る
1区	P121	P26	不整円形	22	159				柱穴、P119・120・122を切る
1区	P122	P70	不整円形	(21)	161				柱穴、P120を切る
1区	P123	P45	不整円形	36	151	弥生土器	25	弥中Ⅲ	柱穴
1区	P124	P21	不整円形	(30)	144	弥生土器	80	弥中Ⅲ	柱穴、P123・126を切る
1区	P125		—	(19)	151				柱穴、P126を切る
1区	P126	P72	不整円形	(43)	130	弥生土器	40	弥中Ⅲ	柱穴
1区	P127	P23	不整円形	21	168	弥生土器	5	弥中Ⅲ	柱穴、P128を切る
1区	P128	P22	円形	18	171				柱穴
1区	P129	P25	円形	18	158	弥生土器	10	弥中Ⅲ	柱穴、P130を切る
1区	P130	P44	楕円形	23	152	弥生土器	20	弥中Ⅲ	柱穴
1区	P131	P48	円形	21	160				柱穴
1区	P132		—	(15)	155				柱穴
1区	P133	P46	不整円形	(30)	155	弥生土器	10	弥中Ⅲ	柱穴
1区	P134	P47	円形	22	148				柱穴、P133を切る
1区	P135	P24	円形	18	151	弥生土器	15	弥中Ⅲ	柱穴
1区	P136	P88	円形	15	158				柱穴
1区	P137		不整円形	36	144				柱穴、P136・138を切る
1区	P138		不整円形	(26)	147				柱穴、P139を切る
1区	P139		—	(16)	153				柱穴
1区	P140		不整楕円形	(43)	130				柱穴、P139を切る
1区	P141		不整円形	(43)	135				柱穴、P143を切る
1区	P142	P85	楕円形	40	158	弥生土器	50	弥中Ⅲ	柱穴、P141・143を切る
1区	P143		不整円形	40	133				柱穴
1区	P144	P60	不整楕円形	(35)	163	弥生土器	60	弥中Ⅲ	柱穴、P145を切る
1区	P145	P59	—	(30)	158				柱穴
1区	P146	P74	円形	19	—	弥生土器	15	弥中Ⅲ	柱穴
1区	P147	P52	不整楕円形	37	132	弥生土器	140	弥中Ⅲ	柱穴
1区	P148	P58	—	(37)	160	弥生土器	25	弥中Ⅲ	柱穴
1区	P149	P90	不整楕円形	(34)	131	弥生土器	100	弥中Ⅲ	柱穴
1区	P150	P56	不整円形	(32)	129	弥生土器	135	弥中Ⅲ	柱穴、P149・151を切る
1区	P151	P89	不整円形	(32)	129	弥生土器	55	弥中Ⅲ	柱穴
1区	P152	P55	不整円形	46	146	弥生土器	80	弥中Ⅲ	柱穴、P151・153・154を切る

第1章 絵図遺跡

地区	遺構名		平面形	長さ (cm)	底面標高 (cm)	出土遺物			備考
	掲載名	調査名				種類	重量(g)	時期	
1区	P153	P53	円形	25	161	弥生土器	30	弥中Ⅲ	柱穴
1区	P154		不整楕円形	90	160				土坑
1区	P155	P106	円形	16	149	弥生土器	10	弥中Ⅲ	柱穴、P154を切る
1区	P156	P105	楕円形	32	142	弥生土器	70	弥中Ⅲ	柱穴、P154を切る
1区	P157		不整円形	20	141				柱穴、P154・158を切る
1区	P158		円形	(18)	145				柱穴、P154・159を切る
1区	P159		不整円形	(39)	144				柱穴、P154を切る
1区	P160	P107	円形	22	146	弥生土器	25	弥中Ⅲ	柱穴
1区	P161	P80	—	(21)	166				柱穴
1区	P162	P54	—	(16)	161				柱穴、P163・164を切る
1区	P163		円形	15	147				柱穴、P164・166を切る
1区	P164	P57	円形	(31)	140	弥生土器	105	弥中Ⅲ	柱穴、P165を切る
1区	P165	P81	—	(20)	163				柱穴
1区	P166		楕円形	(31)	135				柱穴
1区	P167		円形	25	116				柱穴、P166を切る
1区	P168	SK05	不整円形	53	138				柱穴、P170を切る
1区	P169	SK05	円形	22	143	弥生土器	685	弥中Ⅲ	柱穴、P168・170を切る
1区	P170	SK05	不整楕円形	(44)	144				柱穴
1区	P171	SK03	—	(118)	159	弥生土器	100	弥中Ⅲ	柱穴
1区	P172	P79	楕円形	57	144	弥生土器	100	弥中Ⅲ	柱穴、P171を切る
1区	P173	P78	不整円形	(51)	148	弥生土器	10	弥中Ⅲ	柱穴
1区	P174	P77	不整円形	39	146	弥生土器	15	弥中Ⅲ	柱穴、P171・173・175を切る
1区	P175		円形	(26)	147				柱穴
1区	P176	P76	円形	25	146	弥生土器	10	弥中Ⅲ	柱穴、P175を切る
1区	P177		不整円形	26	141				柱穴
1区	P178	SK04	不整円形	106	124	弥生土器、石器	175	弥中Ⅲ	土坑、P171を切る
1区	P179		—	(53)	132				土坑
1区	P180	P75	不整円形	(35)	157	弥生土器	30	弥中Ⅲ	柱穴
1区	P181		不整円形	(58)	129				柱穴、P182を切る
1区	P182		—	(136)	128				土坑、P195を切る
1区	溝3	SD01	—		166	弥生土器	300	弥中Ⅲ	P140～143・146・149を切る
2区	P183		円形	16	124				柱穴
2区	P184		円形	20	124				柱穴
2区	P185	SK21	—	(32)	147	弥生土器	10	弥中Ⅲ	柱穴、P185・186を切る
2区	P186	SK12	—	(44)	152	弥生土器、石器	225	弥中Ⅲ	土坑
2区	P187	P26	円形	18	154	弥生土器	70	弥中Ⅲ	柱穴、P186を切る
2区	P188	P25	—	(28)	153	弥生土器	10	弥中Ⅲ	柱穴
2区	P189	SK15	円形	(43)	155	弥生土器	50	弥中Ⅲ	土坑
2区	P190	P24	円形	(18)	164	弥生土器	40	弥中Ⅲ	柱穴、P189・191を切る
2区	P191	P43	—	(23)	168	弥生土器	10	弥中Ⅲ	柱穴
2区	P192	SK16	不整円形	(47)	151	弥生土器	30	弥中Ⅲ	土坑、P191を切る
2区	P193	SK18	—	(61)	151				土坑、P189を切る
2区	P194	SK13	不整円形	91	110	土師器、木器		古前Ⅰ	井戸、P193・196・198を切る
2区	P195	SK19	—	(82)	151				土坑
2区	P196	P41	—	29	144				柱穴、P195を切る
2区	P197	P40	—	(45)	131	弥生土器	30	弥中Ⅲ	柱穴、P195を切る
2区	P198	P39	不整円形	40	138	弥生土器	30	弥中Ⅲ	柱穴、P195・197を切る
2区	P199	P38	不整円形	35	154	弥生土器	90	弥中Ⅲ	柱穴
2区	P200	P37	円形	(14)	161	弥生土器			柱穴
2区	P201	P36	長方形	34	159	弥生土器	5	弥中Ⅲ	柱穴、P202を切る
2区	P202	P35	—	(19)	163				柱穴

地区	遺構名		平面形	長さ (cm)	底面標高 (cm)	出土遺物			備考
	掲載名	調査名				種類	重量(g)	時期	
2区	P203	P34	—	(16)	164				柱穴、P202を切る
2区	P204	P33	楕円形	19	163	弥生土器	10	弥中Ⅲ	柱穴、P205を切る
2区	P205	P32	不整円形	13	147	弥生土器	5	弥中Ⅲ	柱穴
2区	P206	P23	円形	14	167	弥生土器	5	弥中Ⅲ	柱穴
2区	P207	P31	不整円形	29	155				柱穴、P208を切る
2区	P208	P30	—	(20)	159				柱穴、P209を切る
2区	P209	P29	—	(32)	160	弥生土器	10	弥中Ⅲ	柱穴
2区	P210	SK17	不整楕円形	(57)	156	弥生土器	70	弥中Ⅲ	柱穴、P209を切る
2区	P211	SK11	不整円形	40	138	弥生土器	50	弥中Ⅲ	柱穴、P212を切る
2区	P212	P27	—	(26)	—	弥生土器	5	弥中Ⅲ	柱穴
2区	P213	P22	不整円形	27	134	弥生土器	10	弥中Ⅲ	柱穴
2区	P214	P28	—	(23)	—				柱穴
2区	P215	P14	不整円形	23	148	弥生土器	5	弥中Ⅲ	柱穴、P214を切る
2区	P216		—	(64)	135				土坑、P217を切る
2区	P217	SK23	長楕円形	175	136	弥生土器	1,930	弥中Ⅲ	土坑、P218を切る
2区	P218		—	(38)	150				土坑
2区	P219		—	(5)	140				土坑、P217を切る
2区	P220		—	(32)	146				柱穴、P219を切る
2区	P221		不整円形	(43)	147				土坑
2区	P222		—	(39)	112				土坑、P223・224を切る
2区	P223		—	(41)	138				土坑、P225を切る
2区	P224		—	(31)	113				土坑、P223・225を切る
2区	P225		—	(50)	138				土坑
2区	P226	P21	—	(20)	121	弥生土器	30	弥中Ⅲ	柱穴
2区	P227	P20	円形	24	118	弥生土器	5	弥中Ⅲ	柱穴、P228・229を切る
2区	P228		—	(19)	124	弥生土器	30	弥中Ⅲ	柱穴
2区	P229	P19	楕円形	(23)	124				柱穴、P228を切る
2区	P230	P18	不整円形	23	123	弥生土器	10	弥中Ⅲ	柱穴
2区	P231	P17	不整円形	20	123				柱穴
2区	P232	P16	不整円形	28	118	弥生土器	50	弥中Ⅲ	柱穴
2区	P233	P15	不整円形	23	120				柱穴、P234・235を切る
2区	P234	SK09	—	(75)	132	弥生土器、石器	380	弥中Ⅲ	土坑、P235と重複
2区	P235	SK10	—	(94)	127	弥生土器、石器	80	弥中Ⅲ	土坑
2区	P236	P12	不整円形	105	93				柱穴、P238を切る
2区	P237	P13	不整円形	99	95	弥生土器	80	弥中Ⅲ	柱穴、P236・238を切る
2区	P238		—	(36)	146				柱穴
2区	P239	SK08	不整円形	(59)	114	弥生土器	200	弥中Ⅲ	柱穴
2区	P240	P11	—	(18)	118	弥生土器	5	弥中Ⅲ	柱穴
2区	P241	P9	不整円形	21	121				柱穴
2区	P242	P8	円形	16	118				柱穴
2区	P243	SK07	不整楕円形	(68)	138	弥生土器	1,350	弥中Ⅲ	土坑
2区	P244	P7	—	(21)	121	弥生土器	10	弥中Ⅲ	柱穴
2区	P245	SK06	不整楕円形	39	119				土坑
2区	P246	SK05	不整楕円形	39	113				土坑
2区	P247	SK04	楕円形	33	113	弥生土器	25	弥中Ⅲ	土坑
2区	P248	SK03	楕円形	(31)	121	弥生土器	240	弥中Ⅲ	土坑
2区	P249	SK02	不整楕円形	47	116				土坑
2区	P250	SK01	不整楕円形	(71)	115				土坑
2区	P251	P1	楕円形	24	120	弥生土器	40	弥中Ⅲ	柱穴
2区	P252		—	(94)	105				土坑

表3 遺物観察表

土器

掲載 番号	地区	遺構名		種別	器種	計測値 (cm)			色調	胎土	保存	備考
		掲載名	調査名			口径	底径	器高				
1	立会	—	—	弥生土器	壺	15.2		(10.6)	橙色(5YR6/6)	2mm以下の砂礫	口縁部1/5	貼付突帯文、櫛描文
2	立会	P23	No,23	弥生土器	壺	16.0		(6.7)	橙色(5YR6/6)	2mm以下の砂礫	口縁部1/5	貼付突帯文
3	立会	P36	No,9	弥生土器	壺	17.6		(4.6)	にぶい橙色(7.5YR7/4)	3mm以下の砂礫	口縁部1/7	貼付突帯文
4	立会	P9	No,37	弥生土器	壺	20.2		(4.3)	橙色(5YR6/6)	3mm以下の砂礫	口縁部1/8	
5	立会	P18	No,27	弥生土器	壺			(3.7)	赤褐色(10YR6/8)	2mm以下の砂礫	頸部1/4	貼付突帯文
6	立会	P46	No,1	弥生土器	壺			(4.3)	浅黄褐色(7.5YR8/4)	2mm以下の砂礫	口縁部片	貼付突帯文
7	立会	P32	No,14	弥生土器	壺	16.0		(6.1)	橙色(7.5YR7/6)	1mm以下の砂粒	口縁部1/4	貼付突帯文
8	立会	P33	No,13	弥生土器	壺			(5.7)	灰黄褐色(10YR5/2)	2mm以下の砂礫	体部片	櫛描文、浮文
9	立会	P14	No,31	弥生土器	壺	14.6		(2.2)	にぶい黄褐(10YR5/3)	1mm以下の砂粒	口縁部1/6	浮文
10	立会	溝3	SD01	弥生土器	壺	24.8		(2.9)	にぶい黄褐色(10YR7/2)	1mm以下の砂粒	口縁部1/3	櫛描文、浮文
11	立会	P32	No,14	弥生土器	壺	10.0		(6.1)	浅黄褐色(10YR8/3)	1mm以下の砂粒	口縁部1/5	頸部穿孔
12	立会	P35	No,12	弥生土器	壺			(4.8)	にぶい黄褐色(10YR7/3)	1mm以下の砂粒	体部1/5	黒斑
13	立会	P35	No,12	弥生土器	壺	2.1	1.9	5.4	褐灰色(10YR5/1)	1mm以下の砂粒	3/4	
14	立会	P43	No,4	弥生土器	甕			(5.0)	にぶい橙色(7.5YR7/4)	2mm以下の砂礫	口縁部片	
15	立会	P35	No,12	弥生土器	甕			(11.7)	灰黄褐色(10YR6/2)	1mm以下の砂粒	口縁部1/3	黒斑
16	立会	P35	No,12	弥生土器	甕	17.0		(4.1)	灰黄褐色(10YR5/2)	1mm以下の砂粒	口縁部1/4	
17	立会	P29	No,17	弥生土器	甕			(7.1)	にぶい黄褐色(10YR7/3)	1mm以下の砂粒	口縁部片	凹線文
18	立会	P42	No,5	弥生土器	壺・甕		8.6	(3.0)	浅黄褐色(10YR8/3)	3mm以下の砂礫	底部1/5	
19	立会	P24	No,22	弥生土器	壺・甕		6.8	(5.4)	にぶい黄褐色(10YR7/2)	2mm以下の砂礫	底部1/4	
20	立会	P40	No,6	弥生土器	壺・甕		7.0	(5.3)	にぶい黄褐色(10YR7/3)	2mm以下の砂礫	底部1/4	
21	立会	—	—	弥生土器	壺・甕		8.0	(4.1)	灰白色(10YR7/1)	2mm以下の砂礫	底部1/2	
22	立会	—	—	弥生土器	甕		5.6	(3.2)	にぶい橙色(7.5YR6/4)	3mm以下の砂礫	底部1/1	底面穿孔
23	立会	P35	No,12	弥生土器	壺・甕		8.0	(4.4)	にぶい橙色(7.5YR6/4)	1mm以下の砂粒	底部1/3	黒斑
24	立会	P45	No,2	弥生土器	壺・甕		8.0	(7.7)	灰黄褐色(10YR6/2)	3mm以下の砂礫	底部1/2	
25	立会	—	—	弥生土器	鉢			(5.4)	にぶい黄褐色(10YR7/2)	1mm以下の砂粒	口縁部片	櫛描文
26	立会	P32	No,14	弥生土器	鉢			(8.1)	にぶい黄褐色(10YR6/3)	1mm以下の砂粒	口縁部片	
27	立会	P40	No,6	弥生土器	鉢		10.4	(4.7)	灰黄褐色(10YR5/2)	3mm以下の砂礫	底部1/6	
28	立会	P9	No,37	弥生土器	鉢		11.2	(4.1)	灰白色(10YR8/2)	2mm以下の砂礫	脚台部1/2	透かし孔
29	立会	P35	No,12	弥生土器	高杯	17.8		(4.3)	灰黄褐色(10YR5/2)	1mm以下の砂粒	口縁部1/10	
30	立会	P29	No,17	弥生土器	高杯			(5.6)	橙色(7.5YR7/6)	2mm以下の砂礫	杯部1/4	沈線文
31	2区	包含層	微高地下層	弥生土器	壺	22.8		(7.8)	灰白色(10YR8/2)	2mm以下の砂礫	口縁部1/7	貼付突帯文、浮文
32	2区	包含層	微高地上層	弥生土器	壺	15.6		(5.5)	にぶい黄褐色(10YR7/3)	2mm以下の砂礫	口縁部1/8	貼付突帯文
33	2区	P248	SK03	弥生土器	壺	18.0		(3.5)	にぶい橙色(5YR7/4)	2mm以下の砂礫	口縁部1/8	貼付突帯文
34	2区	包含層	微高地上層	弥生土器	壺	12.2		(3.9)	にぶい黄褐色(10YR7/3)	0.5mm以下の砂粒	口縁部1/8	貼付突帯文
35	2区	包含層	微高地上層	弥生土器	壺	12.6		(3.6)	灰白色(10YR8/2)	2mm以下の砂礫	口縁部1/5	貼付突帯文
36	—	—	—	弥生土器	壺	12.0		(4.1)	灰黄褐色(10YR6/2)	5mm以下の砂礫	口縁部1/4	
37	2区	P248	SK03	弥生土器	壺			(5.9)	灰黄褐色(10YR6/2)	1.5mm以下の砂粒	頸部1/8	
38	2区	P217	SK23	弥生土器	壺			1.9	浅黄褐色(7.5YR8/3)	5mm以下の砂礫	口縁部片	
39	2区	包含層	微高地下層	弥生土器	壺	14.0		(4.4)	浅黄褐色(10YR8/4)	2mm以下の砂礫	口縁部1/4	貼付突帯文
40	1区	P164	P57	弥生土器	壺			(1.4)	にぶい黄褐色(10YR7/3)	1mm以下の砂粒	口縁部片	櫛描文
41	1区	P90	P27	弥生土器	壺	23.0		(2.1)	にぶい黄褐色(10YR6/3)	1.5mm以下の砂粒	口縁部1/6	貼付突帯文
42	2区	包含層	微高地上層	弥生土器	壺	14.8		(1.5)	にぶい黄褐色(10YR7/2)	2mm以下の砂礫	口縁部1/4	凹線文
43	2区	包含層	微高地上層	弥生土器	壺	16.0		(5.8)	浅黄褐色(10YR8/3)	2mm以下の砂礫	口縁部1/5	凹線文
44	2区	包含層	微高地下層	弥生土器	壺	14.0		(4.7)	にぶい橙色(7.5YR7/4)	2mm以下の砂礫	口縁部1/8	凹線文
45	1区	—	P102	弥生土器	壺	7.0		(3.6)	にぶい黄褐色(10YR7/4)	1mm以下の砂粒	口縁部1/4	
46	1区	溝3	SD01	弥生土器	壺			(3.6)	橙色(5YR7/6)	1mm以下の砂粒	口縁部片	
47	2区	P243	SK07	弥生土器	壺			(6.6)	にぶい橙色(5YR6/4)	2mm以下の砂礫	体部片	刺突文
48	2区	P211	SK11	弥生土器	甕			(6.5)	浅黄褐色(7.5YR8/4)	5mm以下の砂礫	口縁部片	櫛描文
49	1区	P70	P43	弥生土器	甕			(6.9)	にぶい黄褐色(10YR7/3)	4.5mm以下の砂礫	口縁部片	煤
50	2区	—	側溝	弥生土器	甕	20.0		(5.2)	にぶい橙色(7.5YR7/4)	2mm以下の砂礫	口縁部1/9	
51	2区	包含層	微高地下層	弥生土器	甕	17.0		(5.3)	橙色(5YR6/6)	2mm以下の砂礫	口縁部1/8	
52	2区	P217	SK23	弥生土器	甕	17.0		(5.7)	にぶい黄褐色(10YR7/2)	4mm以下の砂礫	口縁部1/4	
53	2区	包含層	微高地下層	弥生土器	甕	14.4		(5.2)	にぶい黄褐色(10YR7/4)	2mm以下の砂礫	口縁部1/7	
54	1区	P168~170	SK05	弥生土器	甕	17.4		(3.7)	にぶい橙色(7.5YR7/4)	1mm以下の砂粒	口縁部1/10	
55	1区	—	P102	弥生土器	甕	15.4		(3.7)	にぶい黄褐色(10YR6/3)	1mm以下の砂粒	口縁部1/8	
56	2区	包含層	微高地上層	弥生土器	甕	13.6		(4.0)	にぶい黄褐色(10YR7/2)	2mm以下の砂礫	口縁部1/5	

掲載 番号	地区	遺構名		種別	器種	計測値 (cm)			色調	胎土	保存	備考
		掲載名	調査名			口径	底径	器高				
57	2区	水田層	近世水田層	弥生土器	甕	17.4		(4.2)	にぶい黄橙色(10YR7/2)	2mm以下の砂礫	口縁部1/8	凹線文
58	2区	包含層	微高地下層	弥生土器	甕	14.8		(5.9)	浅黄橙色(10YR8/4)	1mm以下の砂粒	口縁部1/4	凹線文
59	2区	包含層	微高地層	弥生土器	甕	13.0		(3.4)	浅黄橙色(10YR8/3)	1mm以下の砂粒	口縁部1/8	凹線文
60	2区	包含層	微高地層	弥生土器	甕	10.6		(13.0)	にぶい黄橙色(10YR7/3)	2mm以下の砂礫	口縁部1/4	黒斑、凹線文
61	2区	包含層	北包含層	弥生土器	甕	12.0		(5.2)	浅黄橙色(10YR8/3)	1mm以下の砂粒	口縁部1/6	凹線文
62	2区	水田層	近世水田層	弥生土器	鉢	16.6		(2.7)	浅黄橙色(10YR8/4)	1.5mm以下の砂粒	口縁部1/8	凹線文
63	2区	P234	SK09	弥生土器	甕		6.2	(9.8)	浅黄橙色(10YR8/3)	2mm以下の砂礫	底部1/4	
64	2区	P243	SK07	弥生土器	壺・甕		8.1	(6.3)	橙色(5YR7/6)	1mm以下の砂粒	底部1/2	
65	2区	包含層	微高地層	弥生土器	壺・甕		10.8	(5.2)	にぶい黄橙色(10YR7/2)	1mm以下の砂粒	底部1/3	
66	2区	包含層	微高地下層	弥生土器	壺		7.2	(5.4)	褐灰色(10YR4/1)	2mm以下の砂礫	底部1/3	
67	2区	包含層	微高地下層	弥生土器	甕		5.2	(12.0)	にぶい黄褐色(10YR5/3)	4.5mm以下の砂礫	底部1/2	底面穿孔
68	1区	—	P113	弥生土器	甕		4.4	(11.7)	灰黄褐色(10YR4/2)	1mm以下の砂粒	底部1/4	煤
69	2区	P217	SK23	弥生土器	壺		9.4	(13.5)	にぶい黄橙色(10YR7/3)	4mm以下の砂礫	底部完存	黒斑
70	2区	—	側溝	弥生土器	甕		4.0	(3.0)	にぶい黄褐色(10YR7/2)	1mm以下の砂粒	底部1/2	
71	1区	包含層	包含層下層	弥生土器	壺		2.8	(3.2)	灰黄褐色(10YR6/2)	1mm以下の砂粒	底部1/4	
72	2区	—	北側溝	弥生土器	甕		5.3	(2.9)	にぶい黄褐色(10YR7/2)	2mm以下の砂礫	底部4/5	底面穿孔
73	2区	包含層	北包含層	弥生土器	甕		5.2	(4.1)	にぶい橙色(7.5YR7/3)	1mm以下の砂粒	底部1/3	
74	2区	包含層	北包含層	弥生土器	甕		5.4	(4.9)	にぶい黄褐色(10YR7/3)	1mm以下の砂粒	底部2/3	
75	2区	包含層	微高地層	弥生土器	甕		5.6	(5.8)	にぶい黄褐色(10YR7/2)	2mm以下の砂礫	底部1/1	
76	2区	水田層	近世水田層	弥生土器	高杯	20.4		(3.3)	にぶい黄褐色(10YR7/3)	2mm以下の砂礫	口縁部1/8	
77	2区	包含層	微高地下層	弥生土器	高杯	25.4		(6.7)	灰黄褐色(10YR6/2)	4mm以下の砂礫	口縁部1/8	
78	1区	包含層	包含層下層	弥生土器	高杯			(2.7)	にぶい黄褐色(10YR5/3)	1mm以下の砂粒	口縁部片	
79	2区	水田層	近世水田層	弥生土器	高杯	21.2		(3.6)	橙色(5YR6/6)	1mm以下の砂粒	口縁部1/8	
80	2区	包含層	包含層	弥生土器	高杯	8.4	10.6	21.1	灰黄褐色(10YR5/2)	1mm以下の砂粒	ほぼ完存	凹線文、透かし孔
81	2区	水田層	近世水田層	弥生土器	高杯			(4.2)	浅黄色(2.5Y7/3)	2mm以下の砂礫	杯部片	
82	2区	水田層	近世水田層	弥生土器	高杯			(7.8)	浅黄褐色(10YR8/3)	2mm以下の砂礫	脚部1/4	
83	2区	包含層	微高地層	弥生土器	高杯			(7.2)	にぶい橙色(7.5YR7/4)	2mm以下の砂礫	杯部1/8	
84	1区	P168~170	SK05	弥生土器	高杯		10.6	(3.9)	灰白色(10YR8/2)	1.5mm以下の砂粒	脚部1/8	透かし孔
85	—	—	—	弥生土器	高杯		10.6	(2.0)	にぶい黄褐色(10YR7/2)	1mm以下の砂粒	脚部1/8	透かし孔
86	2区	包含層	微高地下層	弥生土器	高杯		11.0	(3.6)	にぶい黄褐色(10YR7/3)	2mm以下の砂礫	脚部1/6	透かし孔
87	1区	P147	P52	弥生土器	高杯		12.2	(3.7)	にぶい黄褐色(10YR7/2)	1mm以下の砂粒	脚部1/4	透かし孔
88	1区	包含層	南包含層	弥生土器	鉢			(3.5)	灰黄褐色(10YR5/2)	2mm以下の砂礫	口縁部片	櫛描文
89	2区	P235	SK10	弥生土器	鉢			(5.0)	灰黄褐色(10YR6/2)	4mm以下の砂礫	口縁部片	櫛描文
90	2区	P234	SK09	弥生土器	鉢		8.6	(5.7)	浅黄褐色(10YR8/3)	4mm以下の砂礫	底部1/3	櫛描文、刺突文
91	2区	包含層	微高地下層	弥生土器	鉢			(6.3)	浅黄褐色(10YR8/3)	2mm以下の砂礫	口縁部片	櫛描文
92	—	—	—	弥生土器	鉢		6.8	(6.4)	橙色(2.5YR7/6)	2mm以下の砂礫	脚台部1	
93	2区	包含層	微高地下層	弥生土器	鉢		9.0	(4.4)	灰黄褐色(10YR6/2)	4mm以下の砂礫	脚台部1	
94	2区	包含層	微高地下層	弥生土器	鉢		11.0	(5.2)	にぶい黄褐色(10YR7/3)	2mm以下の砂礫	脚台部1/6	透かし孔
95	2区	包含層	微高地下層	弥生土器	器台	24.0		(2.8)	浅黄褐色(10YR8/4)	2mm以下の砂礫	口縁部1/6	凹線文
96	2区	P194	SK13	土師器	壺	17.4		31.6	浅黄褐色(7.5YR8/3)	2mm以下の砂礫	体部1/2	
97	2区	P194	SK13	土師器	甕	13.8		(6.5)	浅黄褐色(7.5YR8/3)	3mm以下の砂礫	口縁部1/5	
98	2区	P194	SK13	土師器	甕	14.2		(2.9)	にぶい橙色(5YR7/4)	1mm前後の砂粒	口縁部完存	櫛描沈線
99	2区	P194	SK13	土師器	甕	12.8		(6.7)	にぶい黄褐色(10YR7/2)	2mm以下の砂礫	口縁部1/4	櫛描沈線
100	2区	P194	SK13	土師器	甕	13.4		(13.2)	浅黄褐色(7.5YR8/3)	2mm前後の砂礫	口縁部1/3	櫛描沈線、刺突記号
101	2区	P194	SK13	土師器	高杯	20.4	13.3	15.0	橙色(5YR7/8)	精良	2/3	軸孔、透かし孔
102	2区	P194	SK13	土師器	高杯	18.6		(13.3)	橙色(5YR7/8)	3mm以下の砂礫	1/2	透かし孔
103	2区	P194	SK13	土師器	高杯	18.4		(5.7)	明赤褐色(2.5YR5/8)	4mm以下の砂礫	口縁部3/4	赤色顔料
104	2区	包含層	微高地下層	土師器	鉢			(7.0)	浅黄褐色(10YR8/4)	2mm以下の砂礫	口縁部片	
105	2区	P194	SK13	土師器	器台	18.6	17.6	10.5	淡褐色(5YR8/4)	1mm前後の砂粒	1/3	赤色顔料
106	2区	包含層	微高地層	土師器	鉢	15.0		(3.3)	橙色(7.5YR7/6)	1.5mm以下の砂粒	口縁部1/5	
107	2区	包含層	微高地下層	土師器	器台	10.0		(6.4)	浅黄褐色(10YR8/4)	1mm以下の砂粒	受け部1/1	透かし孔
108	2区	水田層	近世水田層	須恵器	壺	9.8		(1.9)	灰色(2.5YR6/2)	1mm以下の砂粒	口縁部1/8	
109	2区	水田層	近世水田層	須恵器	杯		9.2	(2.1)	灰色(7.5Y4/1)	1mm以下の砂粒	高台部1/4	
110	2区	水田層	近世水田層	土師器	椀		7.2	(1.8)	浅黄褐色(10YR8/3)	1mm以下の砂粒	高台部1/5	内面黒色

石製品

掲載 番号	地区	遺構		器種	法量 (cm)			重量 (g)	材質	時期	備考
		掲載名	調査名		長さ	幅	厚さ				
S1	2区	包含層	微高地上層	石鏃	1.6	1.3	0.3	0.4	サヌカイト	弥生中期	完形
S2	2区	ピット	P4	石鏃	2.3	1.6	0.3	0.9	サヌカイト	弥生中期	完形
S3	2区	水田層	近世水田	石鏃	2.4	1.2	0.3	1.0	サヌカイト	弥生中期	完形
S4	2区	包含層	微高地上層	石錐	3.0	1.5	0.4	8.0	サヌカイト	弥生中期	完形
S5	2区	包含層	微高地上層	石錐	(1.6)	1.3	0.5	1.5	サヌカイト	弥生中期	欠損
S6	2区	包含層	微高地上層	石錐	3.7	2.0	0.5	3.8	サヌカイト	弥生中期	欠損
S7	2区	水田層	近世水田	石剣?	2.5	3.6	1.1	12.4	サヌカイト	弥生中期	欠損
S8	2区	包含層	包含層	石剣?	(2.1)	1.5	0.5	2.7	サヌカイト	弥生中期	欠損
S9	2区	包含層	微高地上層	RF	(6.3)	4.2	1.0	30.5	サヌカイト	弥生中期	欠損
S10	2区	水田層	近世水田	RF	(2.2)	2.9	0.5	4.1	サヌカイト	弥生中期	欠損
S11	1区	包含層	包含層	RF	(2.3)	2.9	0.7	5.9	サヌカイト	弥生中期	欠損
S12	2区	包含層	微高地上層	RF	(4.1)	2.5	0.7	8.0	サヌカイト	弥生中期	欠損
S13	2区	水田層	近世水田	RF	3.7	1.6	0.4	3.7	サヌカイト	弥生中期	
S14	2区	包含層	微高地上層	剥片	(5.3)	3.2	0.8	15.7	安山岩	弥生中期	欠損
S15	立会			剥片	10.0	10.2	2.1	180.2	安山岩	弥生中期	
S16	2区	P217	SK23	石斧	13.4	6.6	4.9	760.5	安山岩	弥生中期	
S17	1区	P178	SK04	砥石	(8.8)	4.7	4.6	170.5	花崗岩	弥生中期	欠損
S18	1区	P102	P62	砥石	(7.6)	5.5	3.1	160.8	花崗岩	弥生中期	欠損

第2章 原尾島遺跡

第1節 遺跡を取り巻く環境

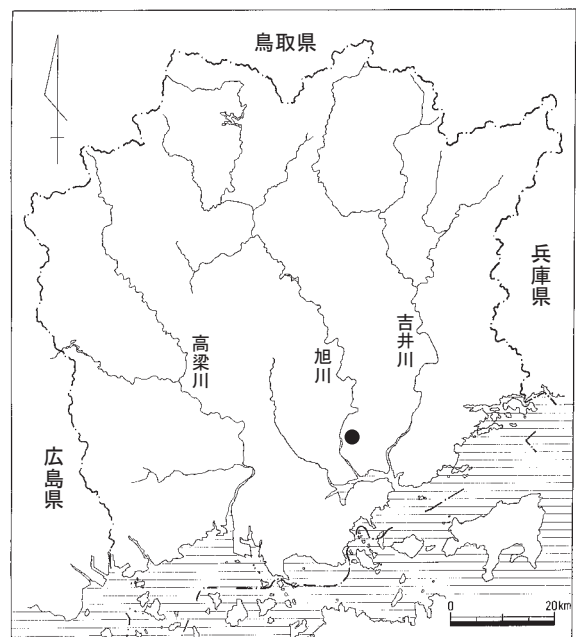
原尾島遺跡は、岡山市中区藤原西町2丁目あたりにひろがると考えられる集落遺跡で、百間川原尾島遺跡の北に隣接する。当地は、律令制下では備前国上道郡幡多郷の域内とみられ、江戸時代には上道郡藤原村であった。さらに明治22(1889)年には周辺7か村と合併して上道郡幡多村となり、当村は昭和29(1954)年に岡山市に編入合併された。戦後、一帯は宅地化等の開発が進んでいるが、今も真方位を指向する条里地割の名残が認められる。

当遺跡は、現在では岡山平野を貫流する旭川の東岸域にひろがる沖積平野に位置する。旭川は中国山地に源泉をもち、吉備高原の間を縫うように南流して瀬戸内海へと注いでいる。その間に流域から集まった豊富な水と土砂は、旭川が半田山山塊と龍ノ口山山塊の間を抜けると一気に拡散し、枝分かれた河川によって肥沃な岡山平野を形成した。当地域では、このような地理的条件を生かすことで、さまざまな生産を発展させ、また水上や陸上の東西・南北交通の結節点として物資や情報の収集に有利な位置を占めることができたため、ここに広がる微高地と周囲の低位部、またそれらを取り巻く丘陵上には数多くの遺跡が展開している。以下では当遺跡が所在する旭川東岸域について概観する。

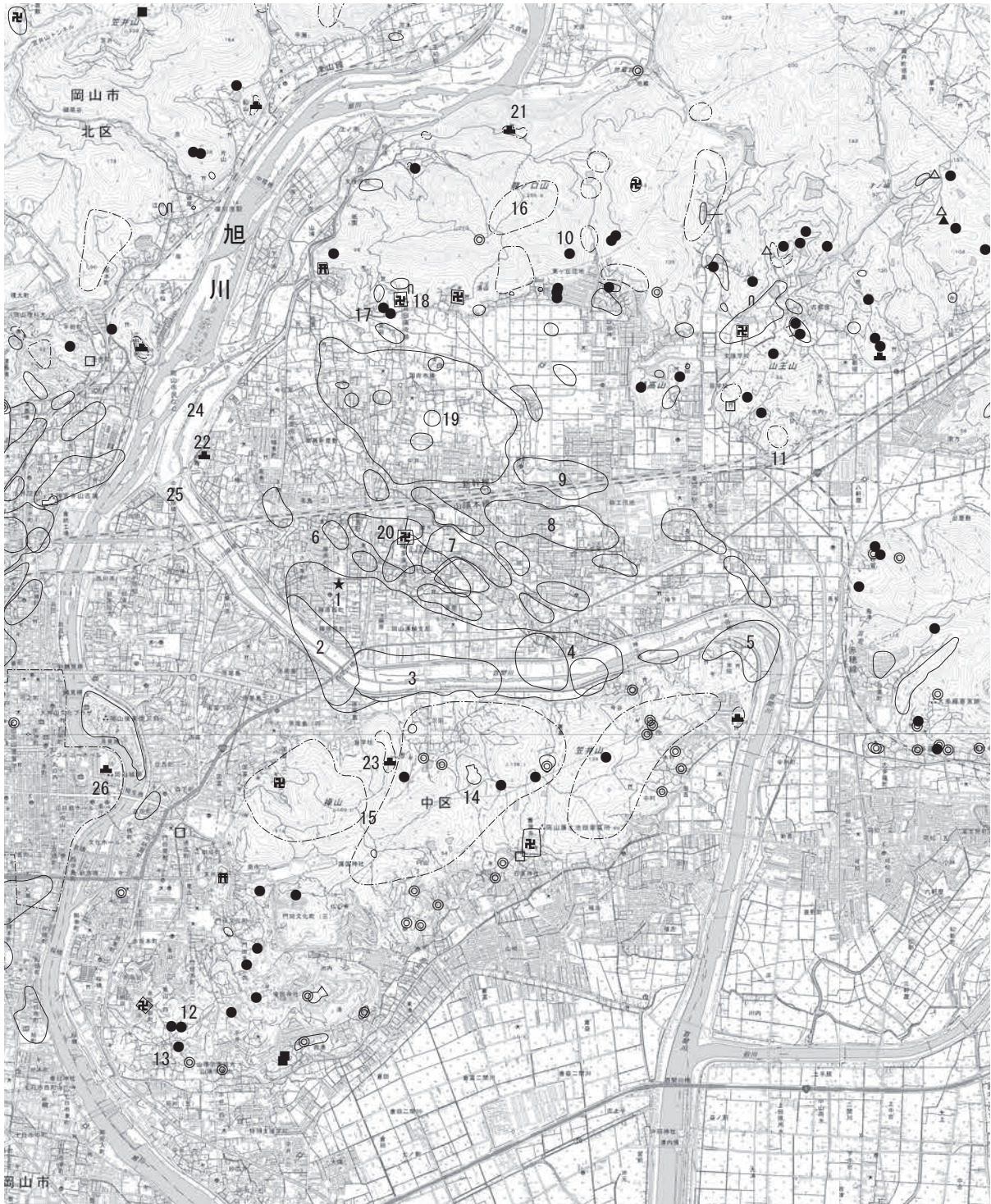
当地域における人々の最古の生活痕跡は、操山で採集された後期旧石器時代のナイフ形石器があるが、その後の縄文時代中期までは特筆するものは少ない。縄文時代後期以降になると遺跡数は増え、微高地で明確な遺構も検出されるようになり、人々が平野部へ進出した様子が分かる。百間川沢田遺跡では、後期とみられる火処や貯蔵穴、多くの土器や石器が出土し、晩期には大型蛤刃石斧や石包丁形石器などの水稻農耕を思わせる遺物も現れる。

弥生時代前期では、百間川原尾島遺跡などで竪穴住居等の遺構とともに水田も検出され、特に百間川沢田遺跡の環濠集落は注目される。以後、遺跡は各地に展開し、弥生時代を通してさまざまな遺構・遺物が確認でき、それらは良好な研究資料となっている。百間川原尾島遺跡などで明らかにされた後期の水田や溝などは、この平野部で行われた大規模な水田経営を示す好例である。

古墳時代になっても、集落遺跡の多くは弥生時代後期から引き続き平野部に展開する。弥生時代後期末に起きた洪水によって、多くの水田や水路は埋め尽くされて景観も一変したと考えられるが、古墳時代前期には再び集落を営んでいる。中期以降では、原尾島遺跡(藤原光町3丁目地区)で、



第19図 遺跡位置図 (1/1,500,000)



- | | | | | | |
|--------------------|------------|------------|-------------------|---------------|---------|
| 1 原尾島遺跡 | 2 百間川原尾島遺跡 | 3 百間川沢田遺跡 | 4 百間川兼基遺跡・百間川今谷遺跡 | 5 百間川米田遺跡 | |
| 6 原尾島遺跡(藤原光町3丁目地区) | 7 赤田東遺跡 | 8 乙多見遺跡 | 9 雄町遺跡 | 10 備前車塚古墳 | |
| 11 宍甘山王山古墳群 | 12 網浜茶白山古墳 | 13 操山109号墳 | 14 金蔵山古墳 | 15 操山古墳群 | |
| 16 竜ノ口山頂古墳群 | 17 唐人塚古墳 | 18 賞田廃寺 | 19 ハガ遺跡 | 20 赤田西遺跡・幡多廃寺 | |
| 21 龍ノ口山城跡 | 22 中島城跡 | 23 明禅寺城跡 | 24 百間川一の荒手及び背割堤 | 25 百間川二の荒手 | 26 岡山城跡 |

第20図 周辺遺跡分布図(1/50,000)

中期末～後期の白玉生産を示す遺物が注目され、7世紀前半には製鉄に関する遺物も出土している。周辺には赤田東遺跡などもあり、古墳時代後期～飛鳥時代には、この地域で製鉄・鉄器生産関連作業が行われていたことが分かる。

一方、周囲の丘陵上では、前期から中期にかけて、北の龍ノ口山山塊に備前車塚古墳、南の操山山塊に操山109号墳や金蔵山古墳などが築造され、吉備南部の中核となる地域であったことを示す。後期以降になると両山塊に横穴式石室を有する古墳群が形成され、特に飛鳥時代に龍ノ口山南麓に築造された、竜山石製の家形石棺を持つ唐人塚古墳は、近くに所在する賞田廃寺との関係が注目される。なお、奈良時代にかけて寺院跡が確認されていない旭川西岸域に対して、当地域では調査地の北東にも幡多廃寺が確認されるなど、5つの寺院跡が所在していることは特筆される。

奈良時代には当地域に備前国府が置かれたと推測されるものの、現在までに遺跡としては確認できていないが、域内に想定されるハガ遺跡では国衙との関連性が高い遺物が出土している。一方、想定域外にあたる百間川米田遺跡では国府関連の港湾施設と推測される掘立柱建物群が検出され、赤田東遺跡でも多くの掘立柱建物が認められており、徐々に当時の様子が明らかになりつつある。また、百間川原尾島遺跡の溝では平安時代の大祓関連の遺物も出土している。

鎌倉時代では、百間川原尾島遺跡において輸入陶磁器や鏡を副葬した土坑墓が検出され、室町時代では、同遺跡で条里地割に則った溝や道路で区画された集落跡を確認している。現在でも、その周囲には同様の地割が認められ、当調査地もその北西隅に位置している。また、別の地割の存在もうかがえ、丘陵上の明禅寺城跡などに対して平野部では中島城跡が確認されているように、他にも新たな土地開発による有力者の平地城館が存在する可能性がある。また、百間川米田遺跡では基礎を固めた橋脚跡が検出されており、交通路の整備状況を知ることができる土木遺構として注目される。

江戸時代では、津田永忠が上道郡の沖新田開発の一環として当地域に百間川を整備したことが特筆され、それに関連する遺跡として百間川一の荒手及び背割堤・百間川二の荒手が挙げられる。この築堤を伴う百間川築造は、貞享2（1685）年から翌年にかけて実施され、沖新田の排水を担うとともに岡山城下の治水対策にも重要な役割を果たし、現在も旭川放水路として機能している。（柴田）

参考文献

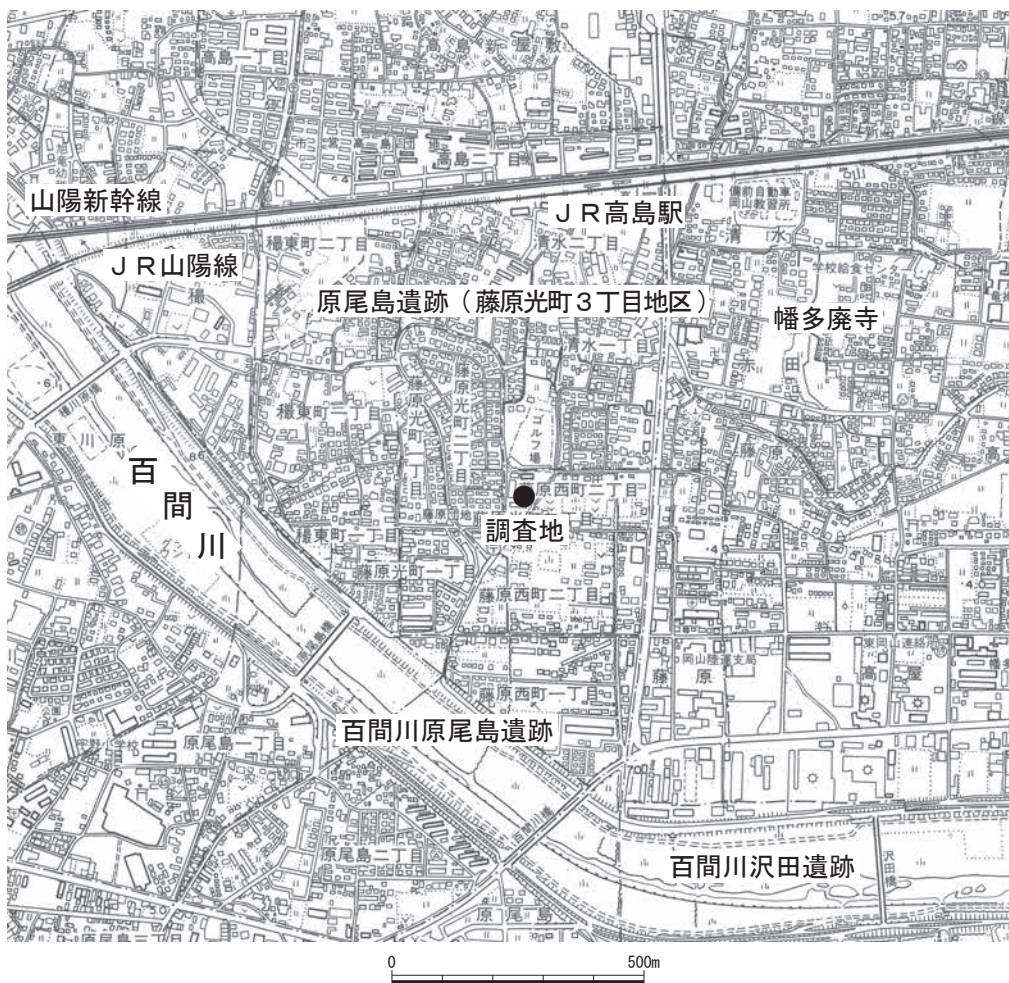
- ・岡山県教育委員会 1999「原尾島遺跡（藤原光町3丁目地区）」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』139
- ・岡山市教育委員会 2004『ハガ遺跡―備前国府関連遺跡の発掘調査報告―』
- ・岡山市教育委員会 2005『赤田東遺跡―吉備中枢地における集落遺跡の発掘調査報告―』
- ・岡山県教育委員会 2009「中島遺跡 宮南遺跡 国長遺跡 天神河原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』221
- ・岡山県教育委員会 2014「百間川原尾島遺跡8 百間川沢田遺跡8」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』239
- ・岡山県教育委員会 2019「百間川一の荒手及び背割堤 百間川二の荒手2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』246

第2節 調査の経過

1 調査の経緯と経過

平成11年、建設省（現国土交通省）は、岡山市（現中区）藤原西町に所在する建設省岡山維持出張所・旭川出張所構内に、平成11年10月から平成13年3月までの工期で藤原宿舎3号棟を建設する計画を打ち出した。これを受けて岡山県教育庁文化課（現文化財課）は、岡山河川工事事務所（現岡山河川事務所）と協議を行い、建設予定地は原尾島遺跡範囲内ではあるが、詳細な遺跡の情報が把握できていないため、急遽確認調査を実施することとした。

確認調査は、平成11年6月14日から18日にかけて、建設予定地内に2本のトレンチを設定して実施した。その結果、中世の土坑と水田層を確認したことから、予定地内全面の発掘調査が必要となった。年度途中のため調査体制を整えることは困難であったが、協議の結果、旭川放水路（百間川）改修工事に伴い百間川原尾島遺跡の発掘調査に従事していた職員が、それと並行しながら当該地点の発掘調査を実施することで合意した。

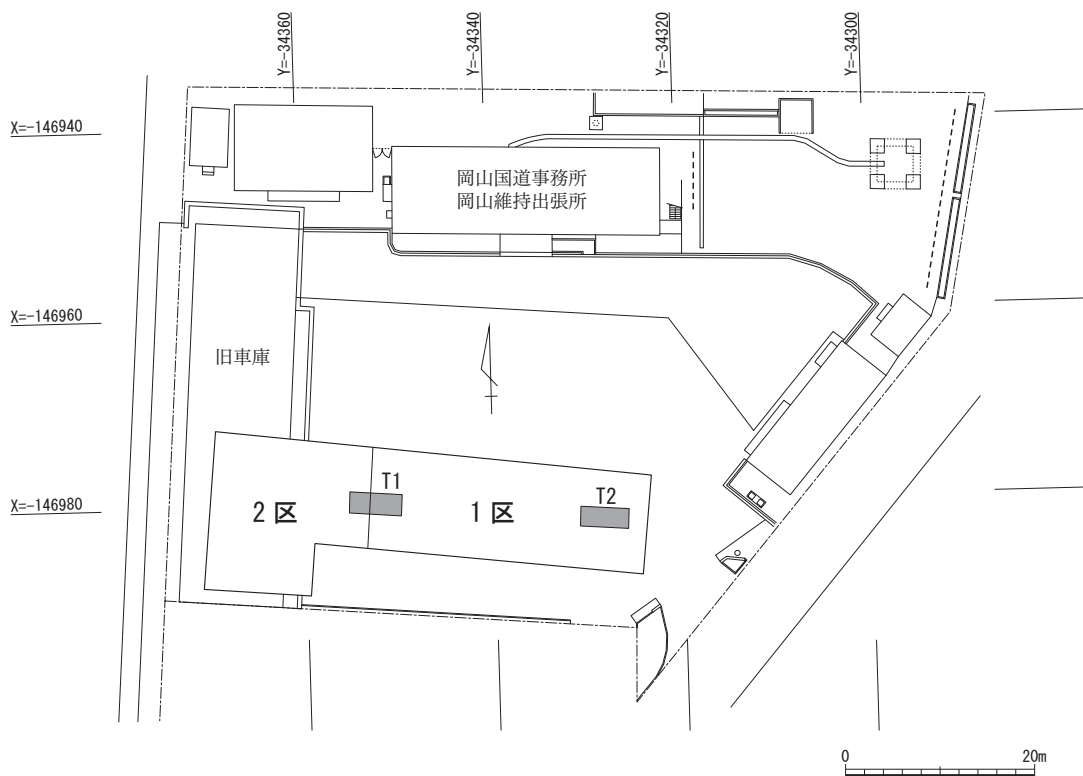


第21図 調査位置図 (1/15,000)

調査地点に目立った既存構造物はなかったが、西端では南北方向に建てられていた車庫が一部調査区域と重なった。この車庫の解体撤去が調査開始以後に行われるため、発掘調査は、区域を東西（1・2区）に分け、2区については車庫撤去後に行うこととした。なお、地表下約0.8～1.1mのアスファルト舗装と造成土、その直前の水田耕作土等については、1・2区の調査着手前に重機を使用して掘削し、運搬車で調査区域外へ搬出した。また、調査地が駐車場の一角であることから、施設利用者の安全を考慮して周囲にはフェンスを設置した。いずれの作業も岡山河川工事事務所で対応した。

休憩及び資機材管理のためのテント設置場所と調査による掘削土の排出場所は、調査区と南側用地境までのわずか幅6mしか確保できなかつたため、1区はさらに3分割（西・中央・東）して調査せざるを得なかつた。1区は調査終了後に埋め戻しを行い、車庫解体撤去後に2区の調査を実施した。2区も掘削土の排出先等の範囲が狭いため、南北に2分割して調査を進めた。調査地の土質は砂質土が卓越し地盤が軟弱であったので、深く掘削するには段切りが必要であり、深い部分では最終的にトレンチ状の狭い範囲の調査となった。

発掘調査は平成11年11月から平成12年3月にかけて実施した。重機による掘削後、1区東側の標高約450cmで中世以降の遺構を検出し、以下古代～中世の水田層の掘り下げを行い、標高約310cmでは古墳時代と考える溝と河道を確認した。百間川原尾島遺跡では標高270cm程度、原尾島遺跡（藤原光町3丁目地区）では標高360cm前後が田面となる弥生時代後期の水田については、ここでは確認できなかつた。標高約220cmまで掘り下げたが、ほぼ全域が上記の河道内であり、東側も低位部と推測する堆積が認められただけで、遺物は出土しなかつた。これらの点や調査環境を考慮して、ここで調査を終了した。



第22図 確認調査及び発掘調査区配置図（1/800）

日誌抄

平成11年（発掘調査）

- 11月18日(木) 発掘調査着手
- 11月19日(金) 1区掘り下げ開始
- 12月3日(金) 1区西調査終了
- 12月14日(火) 1区中央調査終了
- 12月22日(水) 1区東調査終了(調査中断)

平成12年（発掘調査）

- 2月7日(月) 2区掘り下げ開始(調査再開)
- 2月18日(金) 2区北調査終了
- 2月22日(火) 2区南調査終了
- 3月17日(金) 発掘調査完了

2 報告書作成の経過

発掘調査後、当該報告書の作成は事業化されなかったが、令和3年度に報告書作成を行うこととなり、岡山県古代吉備文化財センターで遺物復元作業を行った。引き続き令和4年度には、遺物の実測作業・トレース作業及び写真撮影、遺構については実測図を再点検しながら個別遺構図と全体図の下図作成とトレース作業を行い、さらに原稿執筆、編集作業を行った。

日誌抄

令和3年（報告書作成）

- 12月6日(月) 遺物復元作業開始
- 12月24日(金) 遺物復元作業終了

令和4年（報告書作成）

- 4月20日(水) 遺構図面整理・遺物実測着手

- 6月27日(月) 遺構図トレース着手
- 7月14日(木) 遺物図トレース着手
- 7月29日(金) トレース終了・原稿執筆着手
- 9月28日(水) 原稿執筆終了・整理終了

3 発掘調査及び報告書作成の体制

平成11年度（発掘調査）

- 岡山県教育委員会
 - 教育長 黒瀬 定生
- 岡山県教育庁
 - 教育次長 宮野 正司
- 文化課
 - 課長 松井 英治
 - 課長代理 佐々部和生
 - 参事 正岡 睦夫
 - 課長補佐（埋蔵文化財係長） 松本 和男
 - 文化財保護主任 大橋 雅也
 - 主任 奥山 修司
- 岡山県古代吉備文化財センター
 - 所長 葛原 克人
 - 次長 大村 俊臣

〈総務課〉

- 課長 小倉 昇
- 課長補佐（総務係長） 安西 正則
- 主査 山本 恭輔

〈調査第一課〉

- 課長 高畑 知功
- 課長補佐（第一係長） 中野 雅美
- 文化財保護主事 金田 善敬（確認調査担当）

〈調査第三課〉

- 課長 柳瀬 昭彦
- 課長補佐（第一係長） 山磨 康平
- 文化財保護主査 土師 忠満（調査担当）
- 文化財保護主任 高田恭一郎（調査担当）
- 文化財保護主任 柴田 英樹（調査担当）

令和3年度（報告書作成）

岡山県教育委員会

教育長 鍵本 芳明

岡山県教育庁

教育次長 池永 亘

文化財課

課長 小林 伸明

副参事（文化財保存・活用担当） 尾上 元規

総括主幹（埋蔵文化財班長） 河合 忍

主幹 松尾 佳子

主事 九富 一

岡山県古代吉備文化財センター

所長 大橋 雅也

次長 浅野 勝弘

参事（文化財保護担当） 亀山 行雄

総括参事 高田恭一郎（整理担当）

〈総務課〉

課長事務取扱 浅野 勝弘

総括主幹（総務班長） 多賀 克仁

主任 井上 裕子

令和4年度（報告書作成）

岡山県教育委員会

教育長 鍵本 芳明

岡山県教育庁

教育次長 浮田信太郎

文化財課

課長 江草 大作

副課長 尾上 元規

総括副参事（埋蔵文化財班長） 河合 忍

副参事 松尾 佳子

主事 金田 涼

岡山県古代吉備文化財センター

所長 大橋 雅也

次長 浅野 勝弘

参事（文化財保護担当） 柴田 英樹（整理担当）

総括参事 高田恭一郎（整理担当）

〈総務課〉

課長事務取扱 浅野 勝弘

総括副参事（総務班長） 福池 光修

主幹 井上 裕子

表4 文化財保護法に基づく提出書類一覧

埋蔵文化財試掘・確認調査の報告

文書日付	周知・周知外	種類及び名称	所在地	面積（㎡）	原因	包蔵地の有無	報告者	担当者	期間
H11.6.23	周知	集落跡 生産遺跡 原尾島遺跡	岡山市藤原西町2丁目 3-34	20	建設省藤原宿 舎3号棟新設	有	岡山県古代吉備文化 財センター所長	金田善敬	H11.6.14～6.18

埋蔵文化財発掘の通知（法第57条の3）

文書番号日付	種類及び名称	所在地	面積（㎡）	目的	通知者	期間	主な勧告事項
教文埋 第1238号 H11.10.1	集落跡 生産遺跡 原尾島遺跡	岡山市藤原西町2丁目 3-34、3-35	1,892	5階建住宅建設	岡山河川工事事務所長	H12.4.未定～H13.3.未定	発掘調査

埋蔵文化財発掘調査の報告（法第98条の2）

文書番号日付	種類及び名称	所在地	面積（㎡）	原因	報告者	担当者	期間
教文埋 第1249号 H11.12.9	集落跡 生産遺跡 原尾島遺跡	岡山市藤原西町2丁目 3-34	510	建設省藤原宿 舎3号棟新設	岡山県教育委員会 教育長	土師忠満・高田恭一郎・ 柴田英樹	H11.11.18～H12.3.31

埋蔵文化財発見の通知（法第98条の3）

番号	文書番号日付	物件名	出土地	出土年月日	発見者	土地所有者	現保管場所
1	教文埋 第449号 H11.6.21	弥生土器・土師器・須恵器・ 陶器・土製品（瓦・土鐘） 計1袋	岡山市藤原西町 2丁目3-34 原尾島遺跡	H11.6.14～H11.6.18	岡山県教育委員会 教育長	建設省	岡山県古代吉備文化財センター
2	教文埋 第1652号 H12.3.6	土器（土師器・須恵器・白磁・ 青磁）9箱、金属製品2点、 土製品10点、木製品1点	岡山市藤原西町 2丁目3-34 原尾島遺跡	H11.11.18～H12.3.2	岡山県教育委員会 教育長	建設省	岡山県古代吉備文化財センター

※文化財保護法の条項は当時のもの

第3節 調査の概要

1 概要と基本層序

当調査地は、古墳時代までは低位部にあるとみられ、溝1条と河道の検出にとどまった。その後に堆積と耕地化が進み、古代～中世にかけての水田層が認められるが、中世前期には調査地の東側に中心をもつ集落が展開することが判明し、掘立柱建物1棟・柱穴列1列・土坑9基・その他柱穴多数を検出した。また、近世以降は再び耕地として利用されていると思われ、溝1条を検出した。

調査地点は、百間川原尾島遺跡の北400m、平成8年度に発掘調査が行われた原尾島遺跡（藤原光町3丁目地区）の南400mに位置しており、それら周辺遺跡との関係も考慮しながら基本層序を述べることとする。第24図の第1層は造成土、第2層が造成直前の水田耕作土であり、西に向かって低くなる。第3層はグライ化が著しくて細分できなかったが水田層と考える。

調査区の東側では標高450cm程度で中世の遺構を確認し、ここから東側に集落の中心が存在する可能性が高い。標高360～400cmの第5・7～9層は、各層の境界や層中に鉄分沈着が認められ、中世

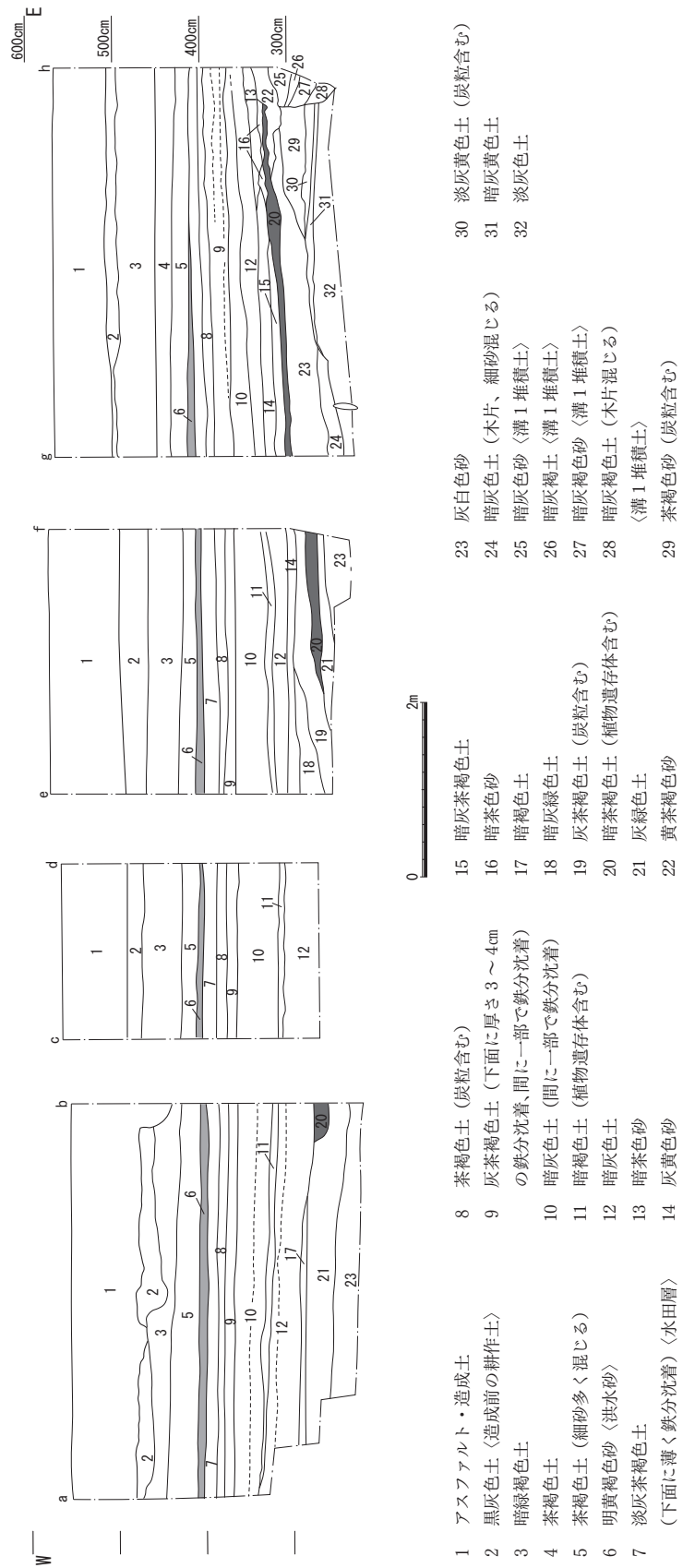


第23図 調査区平面図 (1/400)

の遺構との重複関係から古代を中心とした時期の水田層と推測する。第8層からは黒色土器片が出土した。第6層は洪水由来の砂層と考えられ、第7層の水田層を覆っているが、畦畔は確認できなかった。この水田層を検出した際の平面での砂層との境界線は、北東から南西にかけてのび（第23図上）、この形状で東側の土地の標高が高くなることが推測される。これは、河道の流走方向や堆積状態の影響と考えられ、造成前の水田や現在東側を通る道路の線形にも影響がうかがえる。

第10～24層は、河道を中心とした低位部の堆積土で、調査区の東西に向かって標高が高くなる様子が分かる。これらの中には、砂層や微細な植物遺存体を含む層もあり、第10・12層からは7世紀以降の須恵器片が出土している。第10層上面の標高は約360cmであることから、幡多廃寺や原尾島遺跡（藤原光町3丁目地区）の古代～中世の遺構面である標高400～420cmに比べると低い土地であることが分かる。第25～28層は溝1の堆積土で、溝を検出できる標高310cmは、赤田西遺跡や赤田東遺跡で確認されている基盤の標高330～350cmと大きな差はない。

第29～32層は、上記の河道や溝の基盤となっている土層である。第30・31層を見る限りでは、東へ向かって低くなる堆積状態を見ることができ、より古い時期の流路が東に存在する可能性がある。



第24図 土層断面図 (1/80)

2 中世以前の遺構・遺物

溝1 (第23・24図、図版7-3)

調査区東端において西側の肩口のみを検出した溝で、流走方向は北東から南西と考えられる。標高310cmで掘り方を確認したが、最深部の確認はできなかった。立ち上がりは垂直に近く、確認できた深さは55cmを測る。出土遺物は確認できないが、遺構の時期は古墳時代の可能性がある。

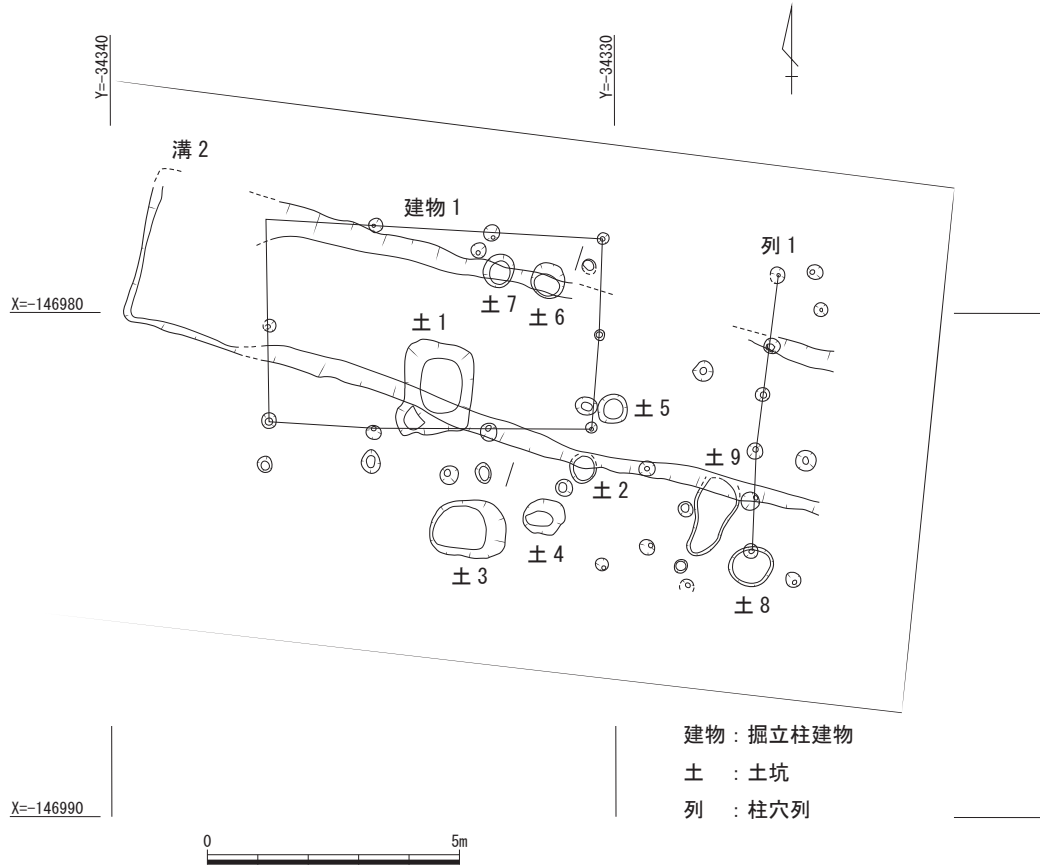
河道1 (第23・24図)

溝1に平行するように東側の肩口があり、西に向かって緩やかに深くなる河道である。西側肩口は調査区外であるが第20層の範囲を確認でき、この堆積から判断すると、北東から南西方向に流走する可能性が高い。標高250cmで、径7cm、残存長30cmの丸杭1本の上端を検出した。第20・21層からは、古墳時代中期頃とみられる須恵器片が出土し、第24層からは古墳時代初頭の可能性がある土師器片が出土した。これらから、河道の中心時期はおおむね古墳時代までで、その後の堆積状態をみると7世紀代には埋没を完了していると考えられる。

3 中世以降の遺構・遺物

掘立柱建物1 (第25・26図)

調査区東部に位置する3×2間の掘立柱建物である。北西隅の柱穴は、調査区を細分した際に側溝を設定した位置にあたり確認できなかった。柱穴の埋土は暗灰褐色土で、P1・4・5・6・9と溝

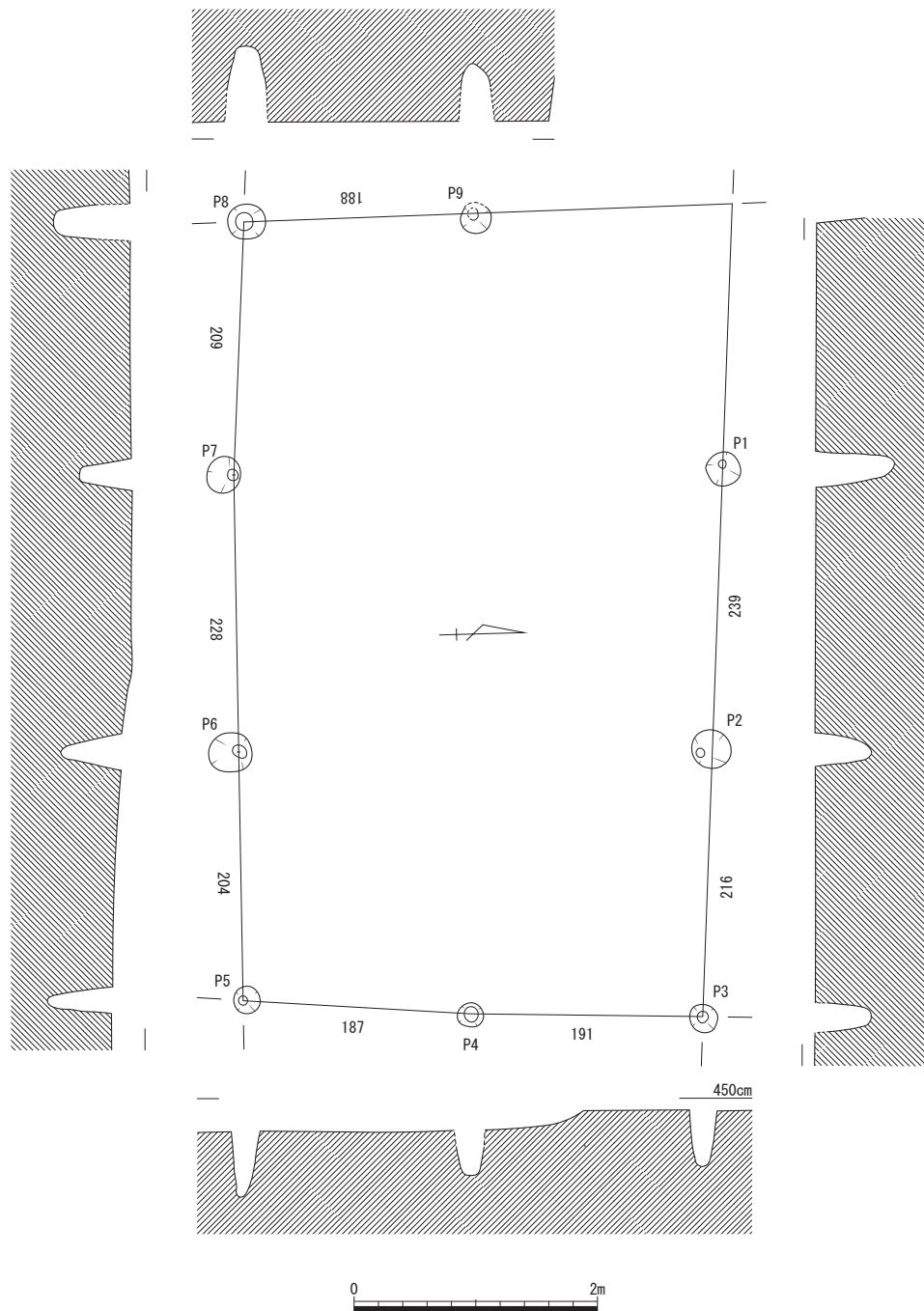


第25図 中世以降遺構配置図 (1/150)

2との重複関係から、それよりも古いことが分かる。

桁行は640cm、梁行は378cmを測り、棟方向はほぼ東西で、N-89°-Wである。柱穴の平面形は円形を呈し、径20～35cmを測り、検出面からの深さは45～65cm、底面の標高は370～390cmにおさまる。柱間は、桁行で204～239cm、梁間で187～191cmである。なお、P5～8からそれぞれ50cm程度離れた南側で検出した柱穴と土坑2も、この建物を構成する可能性がある。また、位置関係などから、土坑1も建物と関連する可能性も考えられる。

P2の埋土から土師器の高台付椀や皿の小片が少量出土しているが、その他の柱穴から遺物は出土していない。これらの遺物や周辺遺構の在り方から、当建物の時期は鎌倉時代後期と考える。

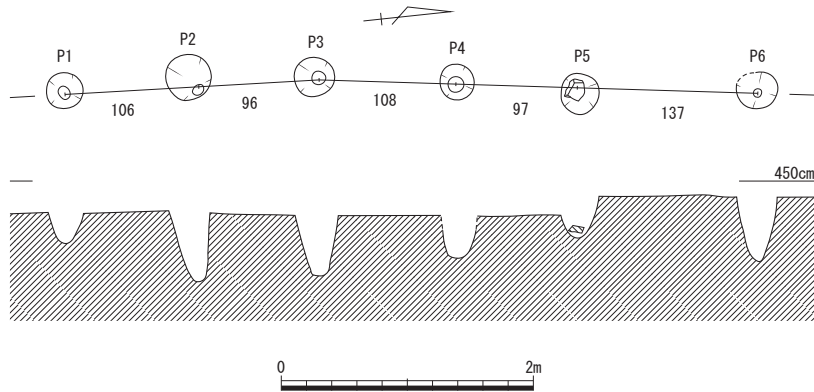


第26図 掘立柱建物1 (1/60)

柱穴列1 (第25・27図)

調査区東端で検出した南北方向 (N-6°-E) に延びる柱穴列で、掘立柱建物1の東に約3m離れて位置し、確認できた延長は5.5mを測る。遺構の重複関係から、P1は土坑8よりも、P2～5は溝2よりも古いことが分かる。柱穴の平面形は円形を呈し、径27～36cmを測り、検出面からの深さにはばらつきがあり、底面の標高も370～405cmとやや差がある。柱の間隔は96～137cmである。P5の底面には石が置かれている。柱穴の埋土は暗灰褐色土である。

柱穴から遺物は出土していないが、周辺遺構の在り方から、遺構の時期は鎌倉時代後期と考える。



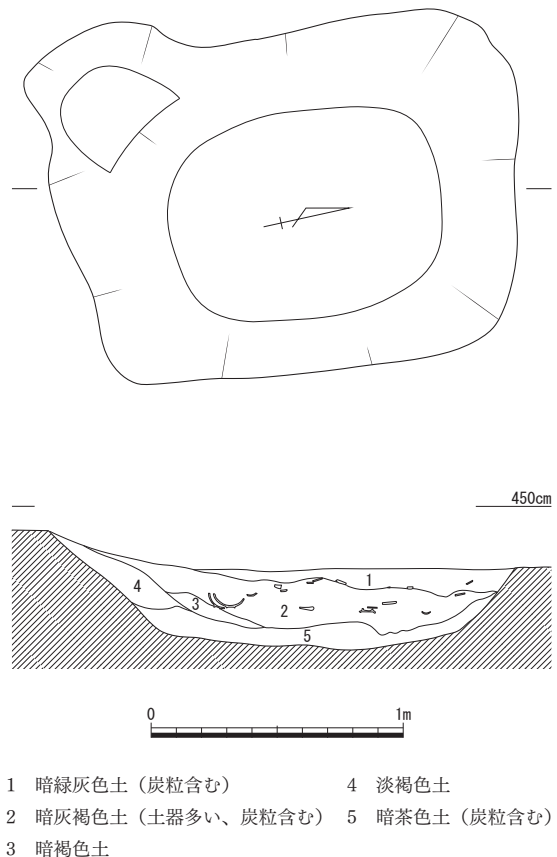
第27図 柱穴列1 (1/60)

土坑1 (第25・28～30図、図版8-1・2、9-1、10-1)

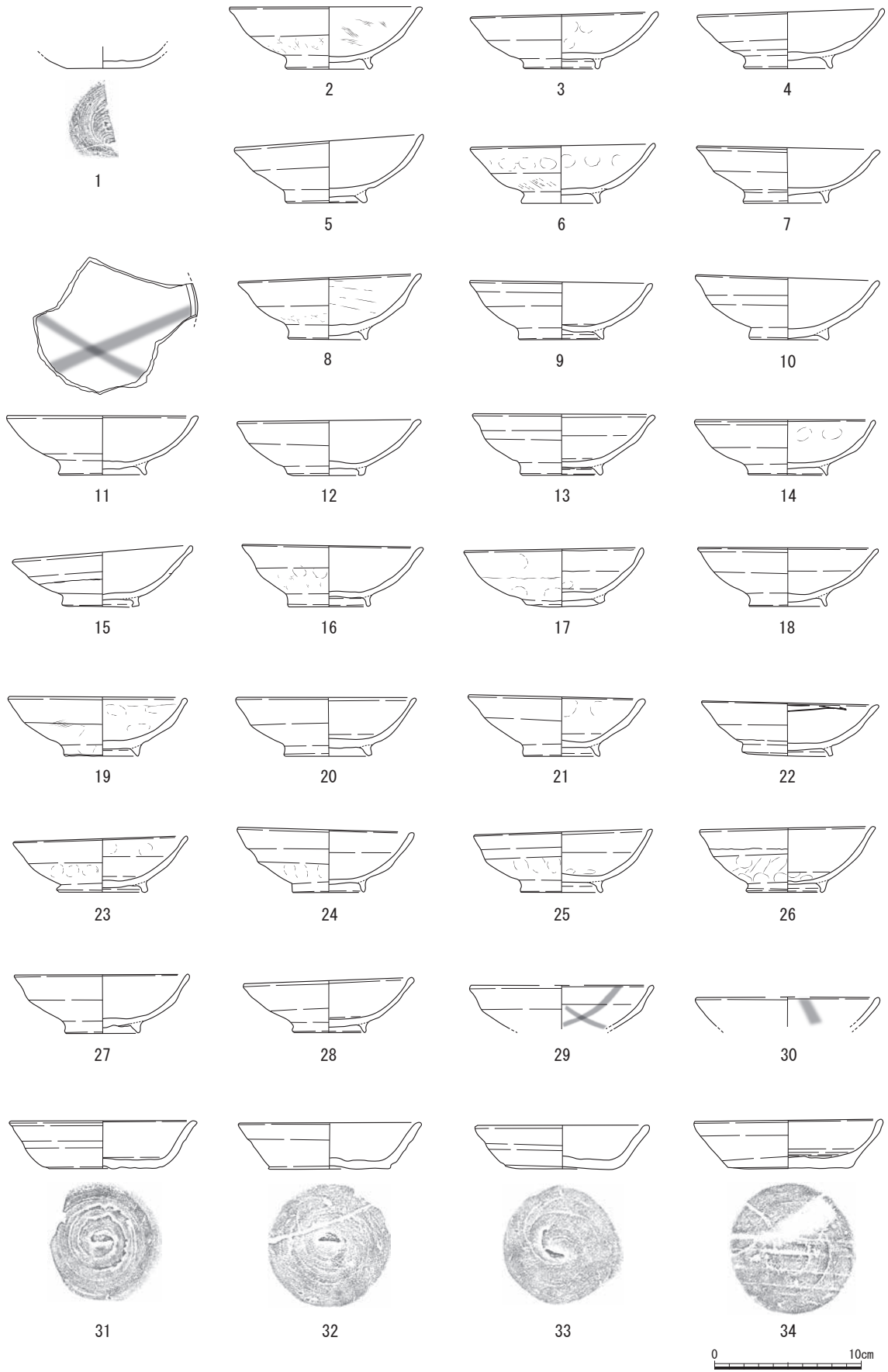
調査区の東側、掘立柱建物1の中央南寄りに位置する土坑で、位置関係や方向などから掘立柱建物1との関連も考えられる遺構である。北側の掘り方は溝2と重複関係があり、それよりも古いことが分かる。

平面形は南北に長い長方形を呈するが、南西隅がわずかに突出する。長さは185cm、幅は138cm、検出面からの深さは47cmを測る。底面はほぼ平坦であるが、南側がわずかに低い。壁面の立ち上がりは比較的緩やかで、断面形は椀形を呈する。第2層を中心として、多くの遺物が出土した。

図示した遺物は、須恵器碗1、土師器の高台付碗2～30・皿31～44・小皿45～58、青磁碗59である。碗1は底部のみで、外面糸切りである。高台付碗は口径11.4～12.9cm・器高3.7～4.5cmを測り、高台の断面はおおむね三角形を呈し、底部内面に重ね焼きの痕跡が認められる

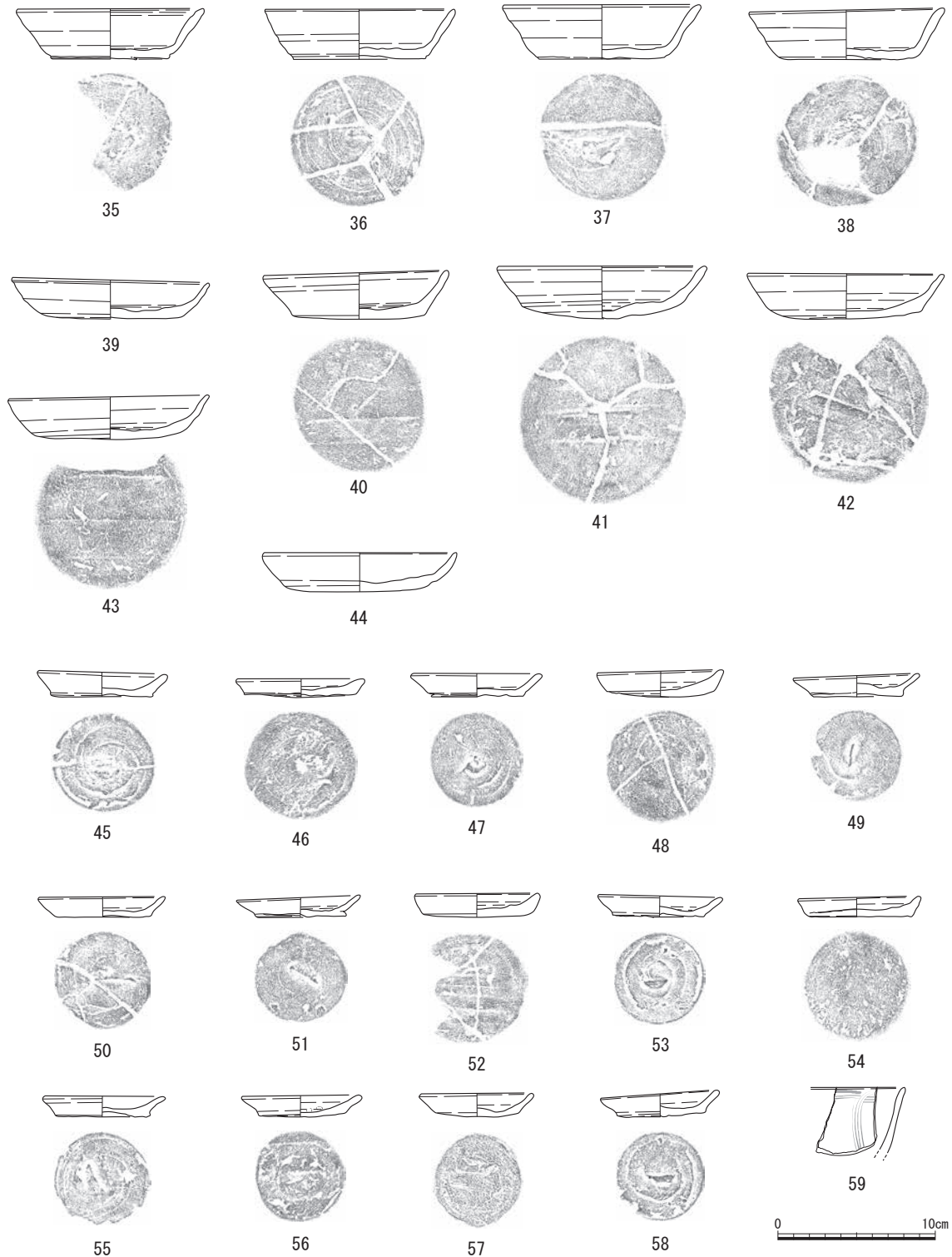


第28図 土坑1 (1/30)



第29図 土坑1出土遺物① (1/4)

ものもある。11・29・30の内面には墨書が認められ、8の内面にはススが付着している。皿は口径11.5～13.2cm・器高2.5～3.5cmを測り、口縁部は、緩やかに外反する31～33・35～38、まっすぐ伸びる34・39～44がある。底部外面はヘラ切りが認められるものが多いが、板目が残るものもある。小皿は、口径7.0～8.1cm・器高1.2～2.3cmを測り、底部外面はヘラ切りが認められるものが多いが、



第30図 土坑1出土遺物② (1/4)

板目が残るものもある。

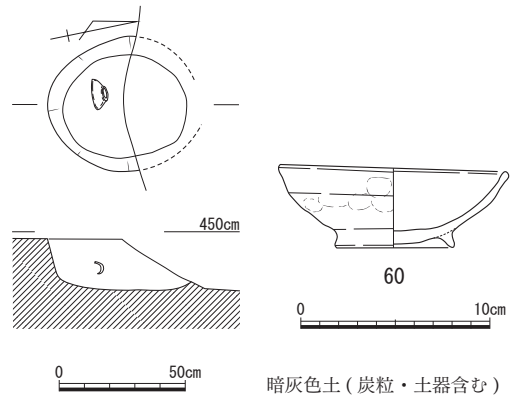
出土遺物から、遺構の時期は鎌倉時代後期と考える。

土坑2 (第25・31図)

調査区の東側、掘立柱建物1の南東隅P5から0.5m南に離れて位置する土坑で、位置関係などから掘立柱建物1との関連も考えられる。北側の掘り方は溝2と重複関係があり、それよりも古いことが分かる。平面形は円形を呈し、径56cm(残存)を測る。底面はほぼ平坦で、断面形は逆台形を呈する。検出面からの深さは21cmで、埋土から土師器の高台付椀60が出土した。

60は口径11.9cm・器高4.5cmを測り、高台の断面は三角形を呈する。口縁部の2か所にススが附着している。

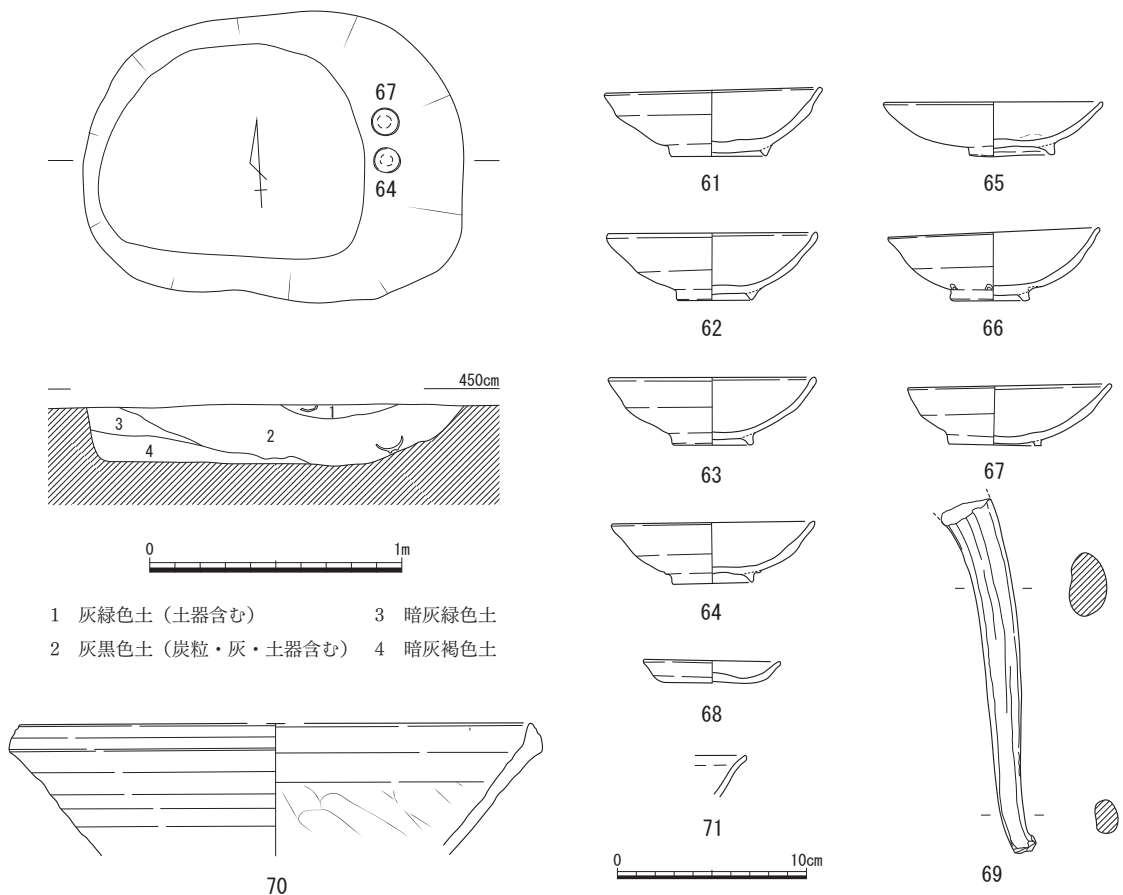
出土遺物から、遺構の時期は鎌倉時代後期と考える。



第31図 土坑2 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土坑3 (第25・32図、図版8-3、10-2)

調査区の東側、掘立柱建物1から1.5m南に離れて位置する土坑で、平面形は東西に長い楕円形を呈する。長さは151cm、幅は116cm、検出面からの深さは24cmを測る。底面はほぼ平坦で、西側壁面



第32図 土坑3 (1/30)・出土遺物 (1/4)

の立ち上がりは垂直に近いが、東側は緩やかである。

第1・2層から遺物が出土し、東側には高台付椀 64・67 が並べて置かれた状態で出土している。

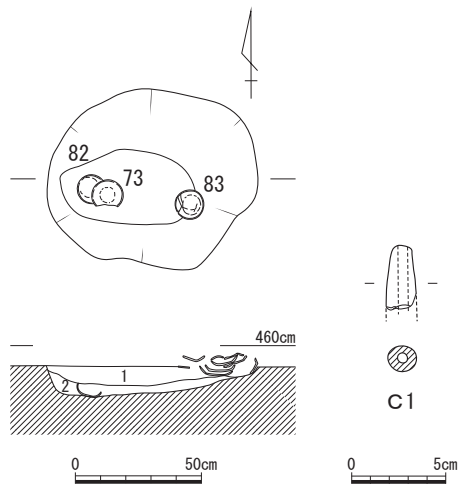
図示した遺物は、土師器の高台付椀 61～67・小皿 68・鍋 69、須恵器こね鉢 70、白磁碗 71 である。高台付椀は口径 10.6～11.4cm・器高 2.9～3.9cmを測り、高台の断面はつぶれて台形を呈するものもある。小皿は、口径 7.1cm・器高 1.3cmを測る。

出土遺物から、遺構の時期は鎌倉時代末期と考える。

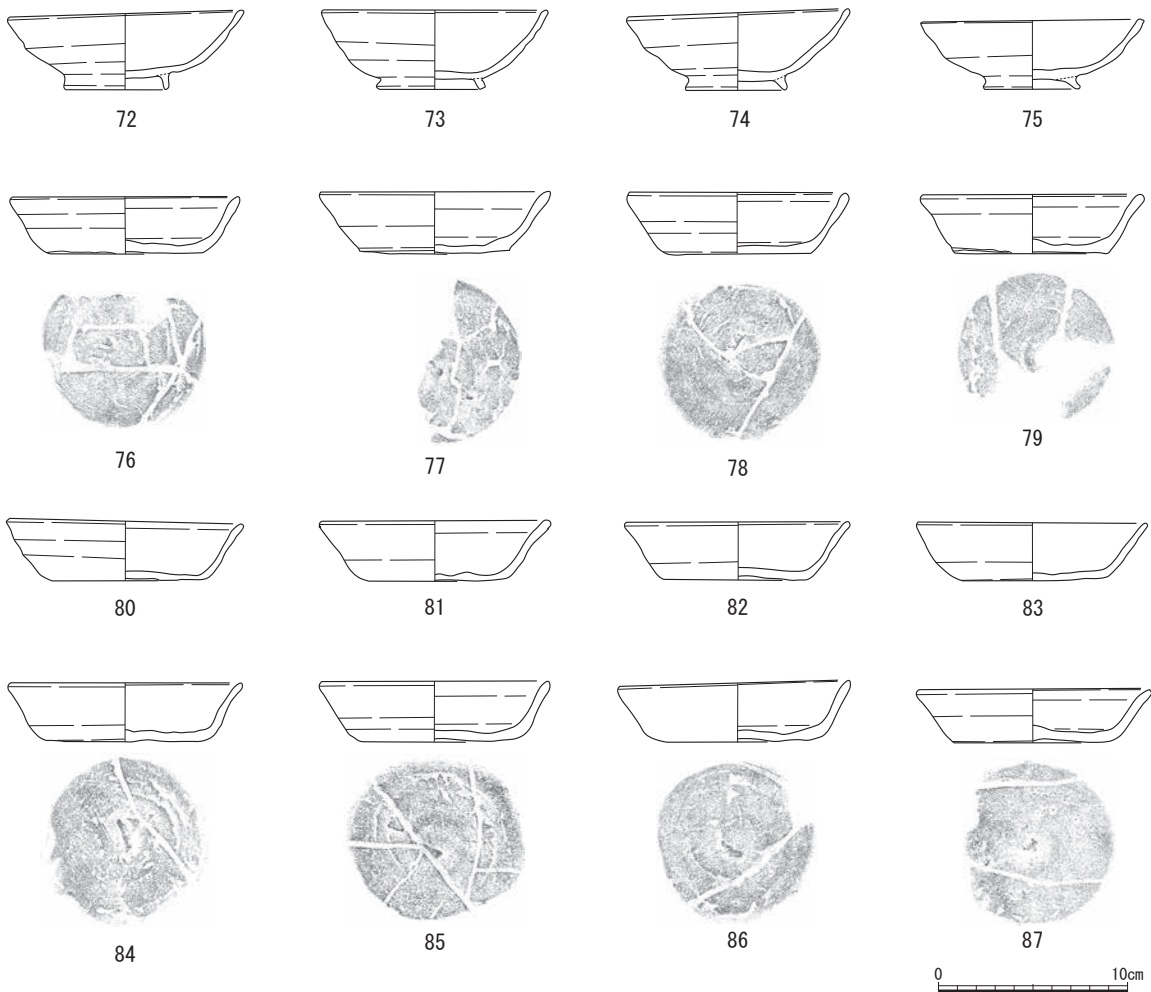
土坑4 (第25・33・34図、図版8-4、10-3)

調査区の東側、土坑3の東に隣接する土坑で、平面形は東西に長い楕円形を呈する。長さは83cm、幅は70cm、検出面からの深さは12cmを測る。西側壁面の立ち上がりは垂直に近いが、東側は緩やかである。底面は緩やかに東に向かって浅くなる。

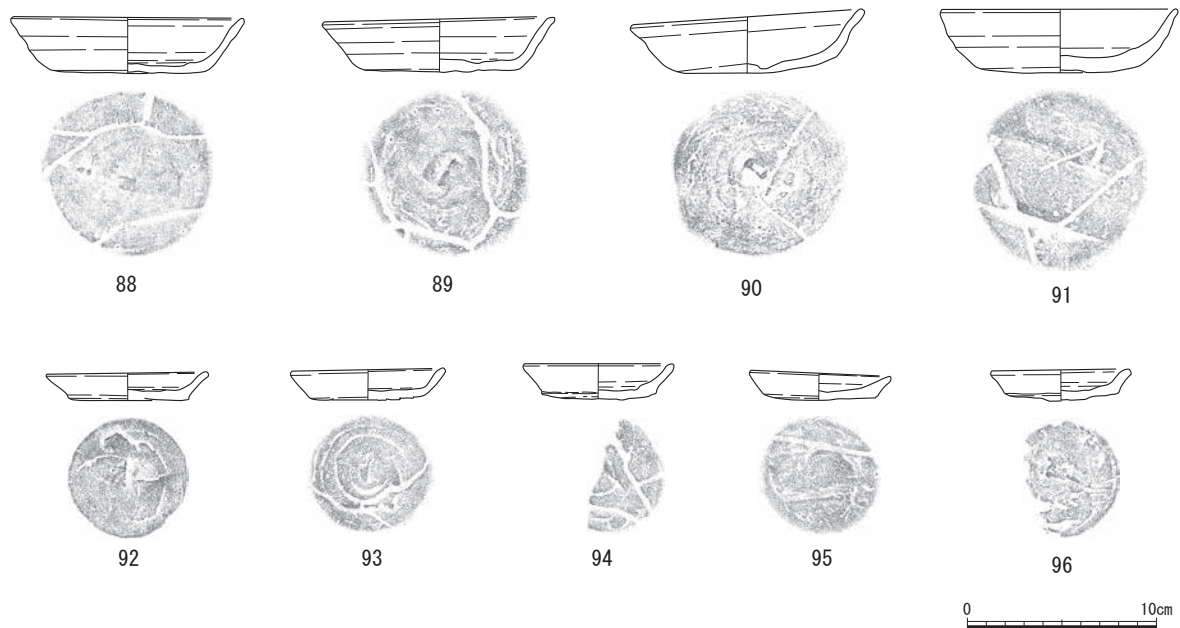
第1層の東側では、土師器の高台付椀や皿などが重なった状態で出土している。底面では、西側に皿 82・高台付椀 73、東側に皿 83 が置かれた状態で出土して



- 1 暗灰色土 (土器・炭粒多い)
- 2 暗茶褐色土 (土器含む)



第33図 土坑4 (1/30)・出土遺物① (1/4)



第34図 土坑4出土遺物② (1/4)

いる。

図示した遺物は、土師器の高台付椀 72～75・皿 76～91・小皿 92～96、土錘 C 1 である。高台付椀は口径 11.3～12.1cm・器高 3.7～4.9cmを測り、75の底部内面には重ね焼きの痕跡が認められる。皿は口径 11.4～12.2cm・器高 2.8～3.4cmを測り、口縁部は緩やかに外反する。底部外面はヘラ切りが認められるものが多いが、板目が残るものもある。小皿は口径 7.2～8.4cm・器高 1.4～1.9cmを測り、底部外面はヘラ切りが認められるものが多いが、板目が残るものもある。

出土遺物から、遺構の時期は鎌倉時代後期と考える。

土坑5 (第25・35図)

調査区の東側、掘立柱建物1の南東隅P5に接して位置する土坑である。掘り方上面は溝2と重複関係があり、それよりも古いことが分かる。平面形は円形を呈し、径59cmを測る。底面はほぼ平坦で、断面形は逆台形を呈する。検出面からの深さは23cmである。

周辺遺構の在り方から、遺構の時期は鎌倉時代後期と考える。

土坑6 (第25・35図)

調査区の東側、土坑1の北東1.8mに位置する土坑である。南側の掘り方は溝2と重複関係があり、それよりも古いことが分かる。平面形は円形を呈し、径70cmを測る。壁面の立ち上がりは比較的緩やかで、断面形は椀形を呈する。検出面からの深さは27cmである。

周辺遺構の在り方から、遺構の時期は鎌倉時代後期と考える。

土坑7 (第25・35図)

調査区の東側、土坑1の北東1.3mに位置する土坑である。南側の掘り方は溝2と重複関係があり、それよりも古いことが分かる。平面形は楕円形を呈し、長さは68cm、幅は59cmを測る。底面はほぼ平坦で、断面形は椀形を呈する。検出面からの深さは28cmである。

周辺遺構の在り方から、遺構の時期は鎌倉時代後期と考える。

土坑8 (第25・35図)

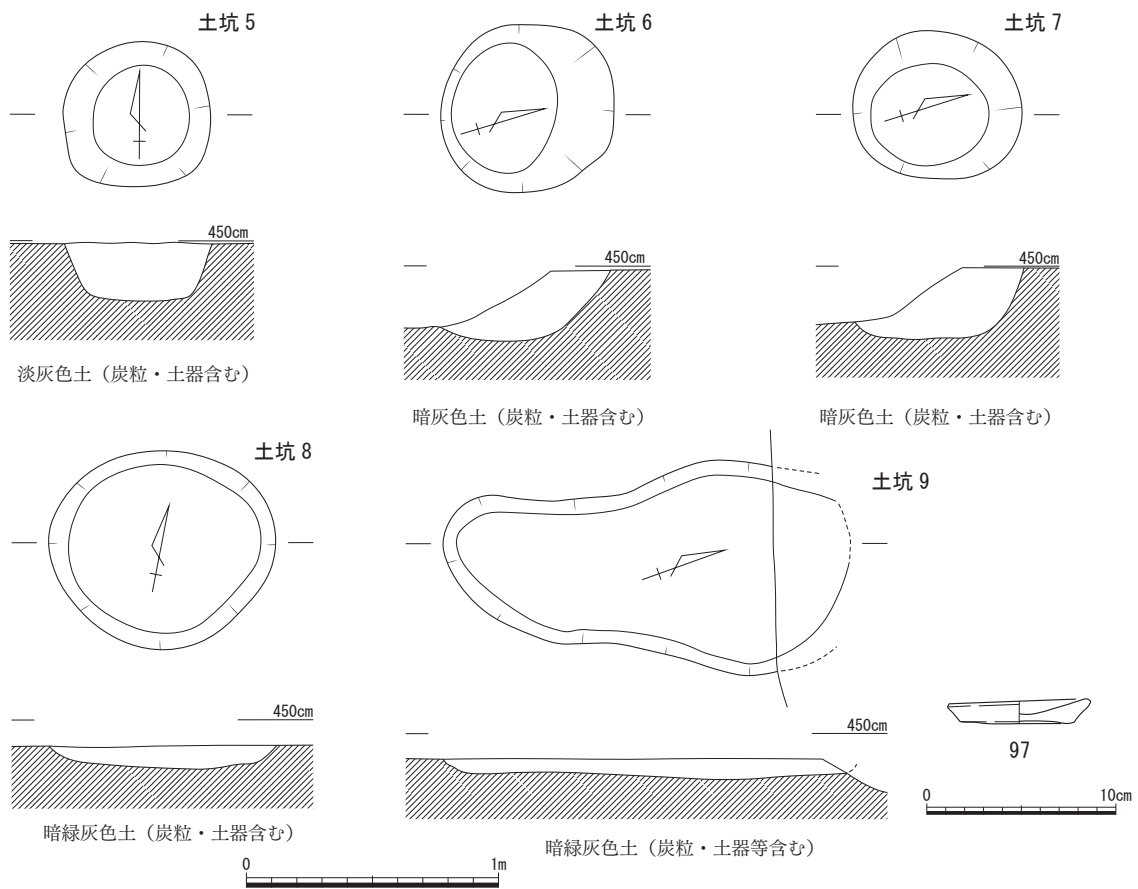
調査区の東側に位置する土坑で、柱穴列1の南端のP1と重複関係があり、それよりも新しいことが分かる。平面形は楕円形を呈し、長さは90cm、幅は79cmを測る。底面はほぼ平坦で、断面形は皿形を呈する。検出面からの深さは9cmである。

周辺遺構の在り方から、遺構の時期は鎌倉時代後期と考える。

土坑9 (第25・35図)

調査区の東側に位置する土坑である。掘り方の北側は溝2と重複関係があり、それよりも古いことが分かる。平面形は、南北に長い不整な楕円形を呈し、長さは161cm(残存)、幅は85cmを測る。底面は北側がわずかに低くなっており、断面形は皿形を呈する。検出面からの深さは8cmである。

土師器の小皿97が出土しており、周辺遺構の在り方から、遺構の時期は鎌倉時代後期と考える。

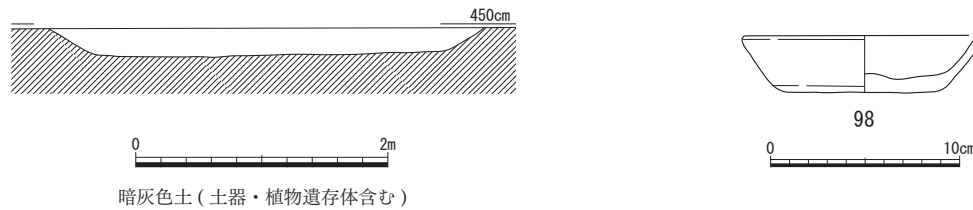


第35図 土坑5～9 (1/30)・土坑9出土遺物 (1/4)

溝2 (第25・36図)

調査区東側で検出した東西方向に延びる溝で、掘立柱建物1などの方向とはやや異なる。西端は方形に収束し、長さは16.4m以上、幅は3.1～3.4m、検出面からの深さは20～25cmを測る。埋土は暗灰色土で植物遺存体が認められ、底面では土師器皿98が出土しているが混入の可能性が高い。

他の遺構との重複関係から、それらよりも新しい時期の遺構であることは明らかである。底面出土遺物には大きな時期差が認められないが混入の可能性が高く、近世～近代の遺構と考える。(柴田)



第36図 溝2断面図 (1/60)・出土遺物 (1/4)

第4節 総括

原尾島遺跡は、百間川原尾島遺跡の北に位置する。両者は低位部や河川などで分断されている可能性はあるが、関係性の強い一連の集落遺跡と考えられる。旭川放水路（百間川）の北側については、現在の地名として「清水」・「藤原光町」・「藤原西町」・「穢東町」などがあり、本書収載の原尾島遺跡及び原尾島遺跡（藤原西町3丁目地区）⁽¹⁾は、近世では「藤原村」に含まれる。

当調査地では、百間川原尾島遺跡⁽²⁾など周辺の遺跡で検出されている弥生時代前期や後期の水田は確認できなかった。この地点に後期の水田があるとすれば、想定される田面の標高は270cm～360cmの間、特に310cm前後の可能性が高い⁽³⁾。しかし今回は、その標高310cmで古墳時代の溝1や河道1を確認していることから、水田は河道等で消失したのか、もともと存在しなかったかのいずれかである。また、溝1や河道1は全容が不明であるが、原尾島遺跡（藤原光町3丁目地区）や百間川原尾島遺跡で検出している古墳時代の溝⁽⁴⁾と関連する可能性も視野に入れる必要がある。

古代では、遺構は確認できなかったが、古墳時代の河道が埋没した後の土層で水田層を確認した。この水田層を覆っていた砂層の堆積状態から、調査地点では南東から北西に向かって低くなる地形を復元できた。これは、前後の時期の堆積や遺構検出状態と整合する。

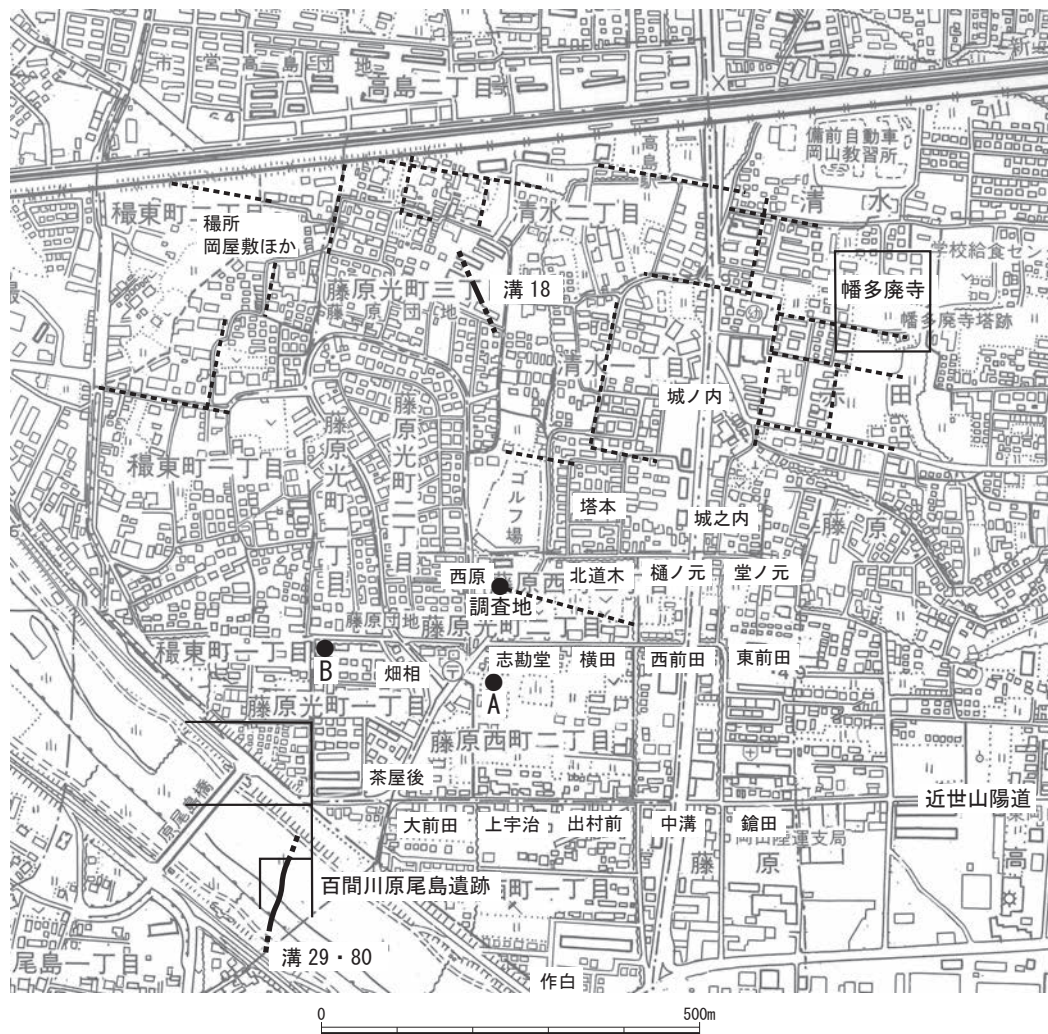
鎌倉時代以降の地形も引き続き東側が高く、鎌倉時代後期には当調査区付近を西端とする、短期間の集落が展開することが明らかになったが、その広がりや想定できるような根拠はほとんどない。そこで今回は、当地の性格を知る手がかりとするために、調査で判明した遺構の方向性と周囲の地割との関係を概観し、併せて小字名を検討しておく。

当地域において、南の旭川放水路（百間川）からJR山陽線の南400m付近までは、「真北-0.5～±0度」⁽⁵⁾の真方位指向で、1町108m前後の条里地割が良好に認められ、掘立柱建物1は棟方向がほぼ東西（N-89°-W）で「真北+1度」となり、それとほぼ一致する。同様に近隣の赤田東遺跡でも、12世紀末と推測されている遺構（A群）は真方位を指向しており⁽⁶⁾、百間川原尾島遺跡の中世集落も、同方位指向の溝等で区画されていることが分かっていることから、少なくとも鎌倉時代から室町時代までの期間は、この条里地割が当地域における土地区画の基本になっている。

一方で調査地付近を境として北側のJR山陽線との間の範囲は、真方位指向の条里地割が不明瞭になり、それよりも東偏する「真北+5.5～+12.5度」を示す地割が所々で認められる⁽⁷⁾。また、当調査区で検出した溝2（近世～近代）は、それよりもさらに東偏する「真北+15.5度」であることから、このような地割は、室町時代までとは異なる新しい基準を採用した可能性を指摘できる⁽⁸⁾。

この限定された範囲の新地割について、現状では近世以降と考えざるを得ないが、どこまで遡り得るかについては今後検討の余地がある。実際に赤田東遺跡では、真方位指向のA群とは大きく異なる15世紀頃の遺構（B・C群）が確認されている。B・C群ともに新地割と一致こそしないが、草原孝典氏が指摘するように、このような地割の更新が室町時代に行われた可能性があることに注目したい⁽⁹⁾。そうした時期に当調査地で集落が継続しないことは示唆に富み、一方で百間川原尾島遺跡では、依然として真方位であり続けていることも非常に興味深く、その相違と経緯の解明が望まれるところである。

次に地名についてみると、調査地の小字名は「西原」で、道路を挟んだ南側は「志勘堂」であるが、近世では清水村であった北東側には「塔本」・「城之内」・「城ノ内」が認められる。特に「城ノ内」周辺には上記の新地割が確認でき、同様に調査地の北西700mあたりには、中世後期の龍ノ口山城主税（穢）所元常と同じ「税（穢）所」やその他にも屋敷の付く小字名が集中する場所があり、周辺に新地割も認められる。これらは、新地割の時期を考えると近世集落の在り方を示すと言うしかないが、時期が遡ることが明らかになれば、この中に平地の城館跡を想定しながら⁽¹⁰⁾、同時に新たな基準による土地開発と利用の展開を見出すことも可能である。ただ、そこに至るには現状では課題が多く、今後の資料蓄積に期待したい。（柴田）



第37図 周辺の地割と主な小字名 (1/10,000)

註

- (1) 岡山県教育委員会 1999「原尾島遺跡（藤原光町3丁目地区）雇用促進住宅（岡山宿舎）建替え工事に伴う発掘調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』139
- (2) 岡山県教育委員会 1996「百間川原尾島遺跡5」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』106、岡山県教育委員会 2004「百間川原尾島遺跡6」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』179 など
- (3) 岡山市教育委員会による原尾島遺跡の発掘調査事例については次のとおり。
- ・調査地の南 120 m（第 37 図 A）で、洪水砂に覆われた弥生時代後期の水田が確認されている。
岡山市教育委員会 2005『岡山市埋蔵文化財センター年報 4 2003（平成 15）年度』
 - ・調査地の西 240 m（第 37 図 B）で、標高 350cm と 315cm で遺構面が確認されている。
岡山市教育委員会 2002『岡山市埋蔵文化財センター年報 1 2000（平成 12）年度』
- (4) 該当の溝は、第 37 図に示した原尾島遺跡（藤原光町 3 丁目地区）の溝 18（5 世紀末～6 世紀）、「百間川原尾島遺跡 5」の溝 29・「百間川原尾島遺跡 6」の溝 80（両者は同一の溝、5 世紀末～6 世紀前半）である。
- (5) 遺構の方位に関しては、比較しやすくするために南北方向に統一し、真北からの角度で表している。真北より東に振る場合は「真北+〇度」、西は「真北-〇度」と表記している。特に掘立柱建物の方向については、棟方向が東西のものが多く、比較のために南北方向に変換している。ただし、基準の根本理念が「南面」や「真北-真南」であるのか「真東-真西」であるのか、また当時の磁北が真北に近いのかなどについて議論の余地があるため、本稿では便宜上、「真北-真南・真東-真西」指向については真方位指向と表記した。
- (6) 草原孝典 2005『赤田東遺跡-吉備中樞地における集落遺跡の発掘調査報告-』岡山市教育委員会
- (7) 1947 年の米軍による空中写真（国土地理院ウェブサイト）と 1976 年を基本とする地形図の両方で確認できる地割を示した。
- (8) 備中南部の中心地における古代から中世の遺構等の方向に関して、古代では真方位から磁針方位への変更があった可能性や、中世ではそのいずれにも該当しない方向を指向することを指摘したことがあるが、そうした変更には地域差や時期差が予想される。本調査例では、鎌倉時代後期まで真方位指向を踏襲した可能性と、それとは別にその時期から磁針方位指向を採用した可能性が考えられ、中世後期以降に限定的な範囲で磁針方位指向あるいは地形に影響された方向になると推測する。
- 岡山県教育委員会 2019「神明遺跡 刑部遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』249
- (9) 前掲註（6）
- (10) 調査地周辺では、税所屋敷（岡山市中区榎東町 2 丁目）や清水城・難波城（岡山市中区清水 1 丁目）の存在が伝えられているが、現状では場所の特定が困難である。
- 岡山県教育委員会 2020『岡山県中世城館跡総合調査報告書 第一冊 -備前編-』の備前国不明中世城館跡一覧表の上道郡に「434 税所屋敷」、「437 清水城」、「438 難波城」がある。

表5 遺構一覽表

掘立柱建物

遺構名	旧遺構名	規模	柱間距離(cm)		桁行(cm)	梁間(cm)	面積(m ²)	棟方向	掘り方	時期	備考
			桁	梁							
掘立柱建物1	-	3×2間	204~239	187~191	640	378	25.1	N-89°-W	円形	鎌倉時代後期	

柱穴列

遺構名	旧遺構名	規模	柱間距離(cm)		桁行(cm)	梁間(cm)	面積(m ²)	棟方向	掘り方	時期	備考
			桁	梁							
柱穴列1	-		95~143		550			N-6°-E	円形	鎌倉時代後期	

土坑

遺構名	旧遺構名	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面海拔高 (cm)	時期	備考
土坑1	No.10	長方形	椀形	185	138	47	393	鎌倉時代後期	
土坑2	No.6	円形	逆台形	(56)	53	21	426	鎌倉時代後期	
土坑3	No.9	楕円形	逆台形	151	116	24	420	鎌倉時代末期	
土坑4	No.11	楕円形	椀形	83	70	12	440	鎌倉時代後期	
土坑5	No.12	円形	逆台形	59	57	23	386	鎌倉時代後期	
土坑6	No.4	円形	椀形	70	65	27	421	鎌倉時代後期	
土坑7	No.5	楕円形	椀形	68	59	28	421	鎌倉時代後期	
土坑8	No.7	楕円形	皿形	90	79	9	431	鎌倉時代後期	
土坑9	No.8	長楕円形	皿形	(161)	85	8	432	鎌倉時代後期	

表6 遺物観察表

土器

掲載番号	遺構名		種別	器種	計測値 (cm)			色調	胎土	保存	形態・手法の特徴など
	掲載名	調査名			口径	底径	器高				
1	土坑1	No.10	須恵器	椀	—	5.0	(2.0)	灰白色(2.5Y8/1)	2mm以下の砂礫	底部のみ	底部糸切り
2	土坑1	No.10	土師器	高台付椀	12.9	5.5	4.3	浅黄橙(10YR8/3)	3mm以下の砂礫	3/4残存	内面重ね焼き痕径5.6cm
3	土坑1	No.10	土師器	高台付椀	12.5	5.0	3.9	灰白色(10YR8/2)	5mm以下の砂礫	完形	内面重ね焼き痕
4	土坑1	No.10	土師器	高台付椀	12.5	5.8	3.9	浅黄橙色(10YR8/3)	3mm以下の砂礫	完形	
5	土坑1	No.10	土師器	高台付椀	12.6	5.2	4.2	灰白色(10YR8/1)	5mm以下の砂礫	完形	内面重ね焼き痕径5.0cm
6	土坑1	No.10	土師器	高台付椀	12.4	5.1	4.1	灰白色(10YR8/2)	4mm以下の砂礫	完形	内面重ね焼き痕径5.5cm
7	土坑1	No.10	土師器	高台付椀	12.2	5.6	3.8	灰白色(10YR8/2)	4mm以下の砂礫	2/3残存	内面重ね焼き痕
8	土坑1	No.10	土師器	高台付椀	12.3	5.3	4.2	浅黄橙色(10YR8/3)	3mm以下の砂礫	完形	内面スス
9	土坑1	No.10	土師器	高台付椀	12.3	5.6	4.0	灰白色(10YR8/2)	5mm以下の砂礫	完形	内面重ね焼き痕
10	土坑1	No.10	土師器	高台付椀	12.3	5.3	4.2	浅黄橙色(10YR8/3)	4mm以下の砂礫	完形	内面重ね焼き痕径5.0cm
11	土坑1	No.10	土師器	高台付椀	(12.8)	5.7	4.1	浅黄橙色(10YR8/3)	3mm以下の砂礫	1/3残存	内面墨書
12	土坑1	No.10	土師器	高台付椀	12.2	5.1	3.8	灰白色(10YR8/2)	4mm以下の砂礫	完形	内面重ね焼き痕径5.0cm
13	土坑1	No.10	土師器	高台付椀	12.2	5.3	4.2	灰白色(10YR8/2)	3mm以下の砂礫	3/4残存	
14	土坑1	No.10	土師器	高台付椀	12.1	5.2	3.8	灰白色(10YR8/2)	4mm以下の砂礫	4/5残存	内面重ね焼き痕径5.0cm
15	土坑1	No.10	土師器	高台付椀	12.0	5.2	3.8	灰白色(2.5Y8/1)	3mm以下の砂礫	完形	内面重ね焼き痕
16	土坑1	No.10	土師器	高台付椀	12.3	5.4	4.3	淡黄色(2.5Y8/3)	4mm以下の砂礫	完形	
17	土坑1	No.10	土師器	高台付椀	12.0	5.4	4.0	浅黄橙色(10YR8/3)	4mm以下の砂礫	4/5残存	
18	土坑1	No.10	土師器	高台付椀	12.1	5.2	4.1	灰白色(10YR8/2)	4mm以下の砂礫	完形	
19	土坑1	No.10	土師器	高台付椀	11.9	4.9	4.1	灰白色(10YR8/2)	3.5mm以下の砂礫	完形	
20	土坑1	No.10	土師器	高台付椀	12.1	5.6	4.1	灰白色(2.7Y8/2)	5mm以下の砂礫	完形	内面重ね焼き痕

掲載 番号	遺構名		種別	器種	計測値 (cm)			色調	胎土	保存	形態・手法の特徴など
	掲載名	調査名			口径	底径	器高				
21	土坑1	No.10	土師器	高台付椀	11.9	5.1	4.2	灰白色(10YR8/2)	2.5mm以下の砂礫	5/6残存	内面重ね焼き痕径5.0cm
22	土坑1	No.10	土師器	高台付椀	11.9	5.6	3.7	灰白色(10YR8/2)	3.5mm以下の砂礫	1/2残存	口縁部内面工具痕
23	土坑1	No.10	土師器	高台付椀	11.6	5.9	3.7	灰白色(10YR8/2)	4mm以下の砂礫	完形	
24	土坑1	No.10	土師器	高台付椀	11.9	4.8	4.4	灰白色(10YR8/2)	3.5mm以下の砂礫	完形	
25	土坑1	No.10	土師器	高台付椀	12.0	5.5	4.3	灰白色(10YR8/2)	4mm以下の砂礫	2/3残存	
26	土坑1	No.10	土師器	高台付椀	11.7	5.0	4.5	灰白色(10YR8/2)	3mm以下の砂礫	完形	
27	土坑1	No.10	土師器	高台付椀	11.7	4.9	4.1	灰白色(10YR8/2)	5mm以下の砂礫	4/5残存	
28	土坑1	No.10	土師器	高台付椀	11.4	4.8	3.7	灰白色(10YR8/2)	3mm以下の砂礫	2/3残存	内面重ね焼き痕
29	土坑1	No.10	土師器	高台付椀	(12.4)	—	(3.0)	浅黄橙色(10YR8/3)	1.5mm以下の砂礫	破片	内面墨書
30	土坑1	No.10	土師器	高台付椀	(12.3)	—	(2.0)	にぶい黄橙色(10YR7/3)	2mm以下の砂礫	破片	内面墨書
31	土坑1	No.10	土師器	皿	12.5	7.9	3.3	にぶい黄橙色(10YR7/3)	3mm以下の砂礫	2/3残存	底部ヘラ切り
32	土坑1	No.10	土師器	皿	12.3	8.3	3.2	浅黄橙色(10YR8/3)	1mm以下の砂粒	4/5残存	底部ヘラ切り
33	土坑1	No.10	土師器	皿	11.5	7.7	3.0	浅黄橙色(7.5YR8/4)	1mm以下の砂粒	4/5残存	底部ヘラ切り
34	土坑1	No.10	土師器	皿	12.7	8.6	3.4	にぶい橙色(7.5YR7/4)	1mm以下の砂粒	2/3残存	底部ヘラ切り・板目
35	土坑1	No.10	土師器	皿	11.8	7.5	3.2	にぶい橙色(7.5YR7/4)	2mm以下の砂礫	2/3残存	底部ヘラ切り
36	土坑1	No.10	土師器	皿	12.0	8.4	3.2	にぶい黄橙色(10YR7/4)	4mm以下の砂礫	完形	底部ヘラ切り
37	土坑1	No.10	土師器	皿	12.4	8.0	3.5	にぶい黄橙色(7.5YR7/4)	2mm以下の砂礫	1/2残存	底部ヘラ切り
38	土坑1	No.10	土師器	皿	12.3	8.8	3.3	にぶい橙色(7.5YR7/4)	2.5mm以下の砂礫	3/4残存	底部ヘラ切り
39	土坑1	No.10	土師器	皿	12.4	9.2	2.7	にぶい橙色(7.5YR7/4)	3mm以下の砂礫	2/3残存	底部ヘラ切り
40	土坑1	No.10	土師器	皿	11.7	8.3	3.1	にぶい橙色(7.5YR7/4)	3.5mm以下の砂礫	完形	底部板目
41	土坑1	No.10	土師器	皿	13.2	10.2	3.4	にぶい橙色(7.5YR7/4)	2mm以下の砂礫	完形	底部板目
42	土坑1	No.10	土師器	皿	12.4	9.7	3.0	にぶい橙色(7.5YR7/4)	2.5mm以下の砂礫	2/3残存	底部板目
43	土坑1	No.10	土師器	皿	12.7	9.2	2.9	にぶい橙色(7.5YR7/4)	2.5mm以下の砂礫	1/2残存	底部板目
44	土坑1	No.10	土師器	皿	12.1	9.1	2.5	橙色(5YR7/6)	1mm以下の砂粒	完形	底部ヘラ切り
45	土坑1	No.10	土師器	小皿	8.1	6.5	1.6	にぶい橙色(7.5YR7/4)	1.5mm以下の砂礫	完形	底部ヘラ切り
46	土坑1	No.10	土師器	小皿	8.0	7.1	1.2	にぶい橙色(7.5YR7/4)	1.5mm以下の砂礫	完形	底部ヘラ切り
47	土坑1	No.10	土師器	小皿	8.0	6.0	1.6	にぶい黄橙色(10YR7/3)	1.5mm以下の砂礫	完形	底部ヘラ切り
48	土坑1	No.10	土師器	小皿	7.9	6.9	2.3	にぶい橙色(7.5YR7/4)	2mm以下の砂礫	完形	底部ヘラ切り
49	土坑1	No.10	土師器	小皿	7.9	5.7	1.4	にぶい橙色(7.5YR7/4)	2mm以下の砂礫	完形	底部ヘラ切り
50	土坑1	No.10	土師器	小皿	7.9	6.1	1.3	にぶい黄橙色(10YR7/4)	1.5mm以下の砂礫	完形	底部ヘラ切り
51	土坑1	No.10	土師器	小皿	7.8	5.7	1.4	にぶい橙色(7.5YR7/4)	1.5mm以下の砂礫	完形	底部ヘラ切り
52	土坑1	No.10	土師器	小皿	7.8	6.9	1.6	橙色(5YR7/6)	2mm以下の砂礫	3/4残存	底部板目
53	土坑1	No.10	土師器	小皿	7.8	5.8	1.5	にぶい橙色(7.5YR7/4)	1.5mm以下の砂礫	完形	底部ヘラ切り
54	土坑1	No.10	土師器	小皿	7.6	6.5	1.3	にぶい橙色(7.5YR7/4)	1.5mm以下の砂礫	完形	
55	土坑1	No.10	土師器	小皿	7.5	6.1	1.3	にぶい橙色(7.5YR7/4)	1.5mm以下の砂礫	完形	底部ヘラ切り
56	土坑1	No.10	土師器	小皿	7.4	5.6	1.4	にぶい橙色(5YR6/4)	1.5mm以下の砂礫	4/5残存	底部ヘラ切り
57	土坑1	No.10	土師器	小皿	7.0	5.3	1.5	淡黄色(2.5Y8/3)	2.5mm以下の砂礫	完形	底部ヘラ切り
58	土坑1	No.10	土師器	小皿	7.4	5.6	1.7	にぶい橙色(7.5YR7/4)	2mm以下の砂礫	完形	底部ヘラ切り
59	土坑1	No.10	青磁	碗	—	—	—	灰オリーブ色(5Y5/2)	—	破片	
60	土坑2	No.6	土師器	高台付椀	11.9	6.1	4.5	灰白色(10YR8/2)	2mm以下の砂礫	完形	口縁部2か所にスス
61	土坑3	No.9	土師器	高台付椀	11.3	4.9	3.6	灰白色(2.5YR8/1)	4mm以下の砂礫	完形	口縁部広くスス、内面重ね焼き痕
62	土坑3	No.9	土師器	高台付椀	10.9	3.8	3.6	灰白色(10YR8/2)	2mm以下の砂礫	4/5残存	
63	土坑3	No.9	土師器	高台付椀	(10.7)	4.0	3.6	灰白色(10YR8/2)	2mm以下の砂礫	1/3残存	
64	土坑3	No.9	土師器	高台付椀	10.6	4.1	3.3	灰白色(2.5YR8/1)	1mm以下の砂粒	完形	
65	土坑3	No.9	土師器	高台付椀	(11.4)	4.4	2.9	褐色(10YR6/1)	3mm以下の砂礫	1/3残存	
66	土坑3	No.9	土師器	高台付椀	11.0	3.8	3.9	灰白色(2.5YR8/2)	2mm以下の砂礫	2/3残存	外面底部に窪み8か所
67	土坑3	No.9	土師器	高台付椀	10.6	4.8	3.3	灰白色(2.5YR8/1)	1mm以下の砂粒	完形	口縁部広くスス
68	土坑3	No.9	土師器	小皿	7.1	4.7	1.3	浅黄橙色(10YR8/3)	1mm以下の砂粒	完形	底部ヘラ切り
69	土坑3	No.9	土師器	鍋	—	—	—	灰白色(2.5Y8/1)	2mm以下の砂礫	脚部のみ	
70	土坑3	No.9	須恵器	こね鉢	(27.0)	—	(7.0)	灰白色(N7/)	2mm以下の砂礫	破片	
71	土坑3	No.9	白磁	碗	—	—	—	灰白色(7.5Y8/1)	—	破片	口縁端内面施釉なし
72	土坑4	No.11	土師器	高台付椀	12.1	5.3	4.2	灰白色(10YR8/2)	2mm以下の砂礫		
73	土坑4	No.11	土師器	高台付椀	11.7	5.3	4.2	灰白色(2.5Y8/1)	5mm以下の砂礫	2/3残存	
74	土坑4	No.11	土師器	高台付椀	11.5	5.1	4.9	灰白色(10YR8/2)	4mm以下の砂礫	完形	
75	土坑4	No.11	土師器	高台付椀	11.3	4.8	3.7	灰白色(2.5Y8/1)	2mm以下の砂礫	1/2残存	内面重ね焼き痕
76	土坑4	No.11	土師器	皿	11.9	8.2	3.0	にぶい橙色(7.5YR7/4)	1.5mm以下の砂礫	1/2残存	底部ヘラ切り

第2章 原尾島遺跡

掲載 番号	遺構名		種別	器種	計測値 (cm)			色調	胎土	保存	形態・手法の特徴など
	掲載名	調査名			口径	底径	器高				
77	土坑4	No.11	土師器	皿	12.0	7.9	3.3	にぶい黄橙色(10YR7/4)	2.5mmの砂礫	1/2残存	底部ヘラ切り
78	土坑4	No.11	土師器	皿	11.4	7.8	3.3	にぶい黄橙色(10YR7/3)	1.5mm以下の砂礫	1/3残存	底部ヘラ切り
79	土坑4	No.11	土師器	皿	11.5	8.1	3.1	にぶい橙色(7.5YR7/4)	2.5mm以下の砂礫	2/3残存	
80	土坑4	No.11	土師器	皿	12.1	8.0	3.3	にぶい橙色(7.5YR7/4)	1mm以下の砂粒	4/5残存	底部ヘラ切り
81	土坑4	No.11	土師器	皿	11.8	7.4	3.2	にぶい橙色(7.5YR7/3)	1mm以下の砂粒	完形	底部ヘラ切り
82	土坑4	No.11	土師器	皿	11.6	7.7	3.1	浅黄橙色(7.5YR8/4)	1mm以下の砂粒	完形	底部ヘラ切り
83	土坑4	No.11	土師器	皿	11.9	7.6	3.2	浅黄橙色(7.5YR8/4)	1mm以下の砂粒	完形	底部ヘラ切り
84	土坑4	No.11	土師器	皿	12.1	8.3	3.1	浅黄橙色(7.5YR8/3)	1mm以下の砂粒	4/5残存	底部ヘラ切り
85	土坑4	No.11	土師器	皿	11.9	8.4	3.2	にぶい黄橙色(10YR7/4)	3mm以下の砂礫	1/2残存	底部ヘラ切り
86	土坑4	No.11	土師器	皿	12.1	8.2	3.3	にぶい橙色(7.5YR7/4)	1mm以下の砂粒	2/3残存	
87	土坑4	No.11	土師器	皿	12.1	8.5	2.8	にぶい黄橙色(10YR7/3)	2mm以下の砂礫	3/4残存	器面摩耗
88	土坑4	No.11	土師器	皿	12.0	8.4	3.1	にぶい橙色(7.5YR7/4)	2.5mm以下の砂礫	完形	
89	土坑4	No.11	土師器	皿	12.1	8.2	2.9	にぶい黄橙色(10YR7/4)	4mm以下の砂礫	4/5残存	底部ヘラ切り
90	土坑4	No.11	土師器	皿	12.0	8.0	3.4	灰白色(10YR8/2)	1mm以下の砂粒	完形	底部ヘラ切り
91	土坑4	No.11	土師器	皿	12.2	8.6	3.4	にぶい橙色(7.5YR7/4)	1mm以下の砂粒	3/5残存	底部板目
92	土坑4	No.11	土師器	小皿	8.4	6.2	1.5	にぶい黄橙色(10YR7/3)	2mm以下の砂礫	完形	底部ヘラ切り
93	土坑4	No.11	土師器	小皿	7.9	6.0	1.7	にぶい橙色(7.5YR7/4)	2.5mm以下の砂礫	完形	底部ヘラ切り
94	土坑4	No.11	土師器	小皿	7.8	6.0	1.9	にぶい黄橙色(10YR7/4)	2mm以下の砂礫	1/2残存	
95	土坑4	No.11	土師器	小皿	7.3	5.4	1.4	にぶい橙色(5YR6/4)	1mm以下の砂粒	完形	底部板目
96	土坑4	No.11	土師器	小皿	7.2	6.0	1.7	明褐灰色(7.5YR7/2)	2mm以下の砂礫	2/3残存	底部ヘラ切り
97	土坑9	No.8	土師器	小皿	7.1	5.8	1.3	にぶい橙色(7.5YR7/4)	1mm以下の砂粒	完形	
98	溝2	No.1	土師器	皿	12.3	7.6	3.0	浅黄橙色(7.5YR8/4)	1mm以下の砂粒	4/5残存	

土製品

掲載 番号	遺構名		器種	計測値 (mm)			重量 (g)	色調	胎土	焼成	時期	備考
	掲載名	調査名		最大長	最大幅	穿孔径						
C1	土坑4	No.11	土錘	(25.7)	(11.9)	3.6	2.32	灰白色(2.5Y8/1)	2.5mm以下の砂礫	良好	鎌倉時代後期	



1 立会調査状況（北東から）



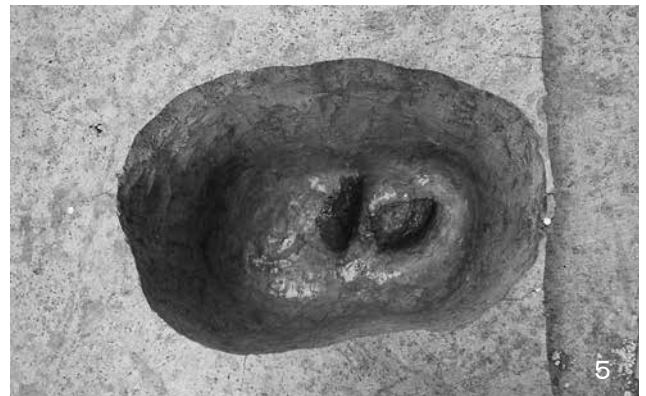
2 立会調査状況（南西から）



3 立会調査区遺構完掘状況（西から）



- 1 発掘調査 2 区遺構検出状況 (北東から)
- 2 発掘調査 3 区遺構検出状況 (南西から)
- 3 発掘調査 2 区北遺構検出状況 (北西から)
- 4 発掘調査 2 区中央遺構検出状況 (北西から)
- 5 発掘調査 2 区南遺構検出状況 (北西から)
- 6 発掘調査 3 区北遺構検出状況 (北西から)



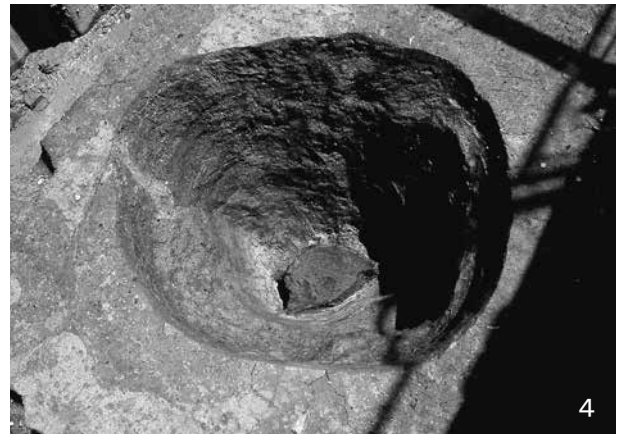
- 1 発掘調査1区遺構完掘状況（北東から）
- 2 発掘調査1区遺構完掘状況（南西から）
- 3 P247（北西から）
- 4 P243（西から）
- 5 P236・237（南西から）
- 6 発掘調査2区遺物出土状況



1 P194 上層遺物出土状況 1 (北から)



2



4



3



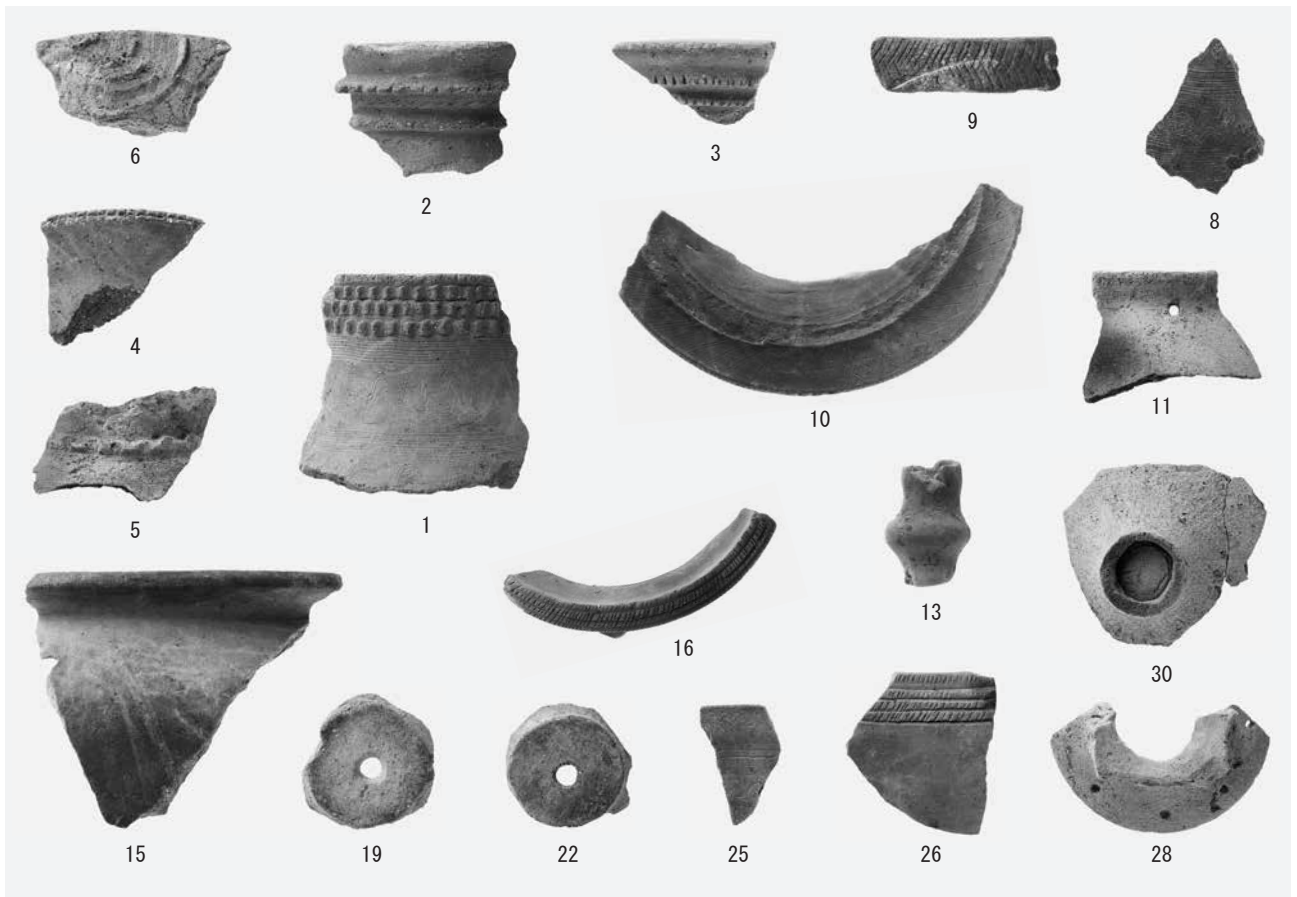
5

2 P194 上層遺物出土状況 2 (北から)

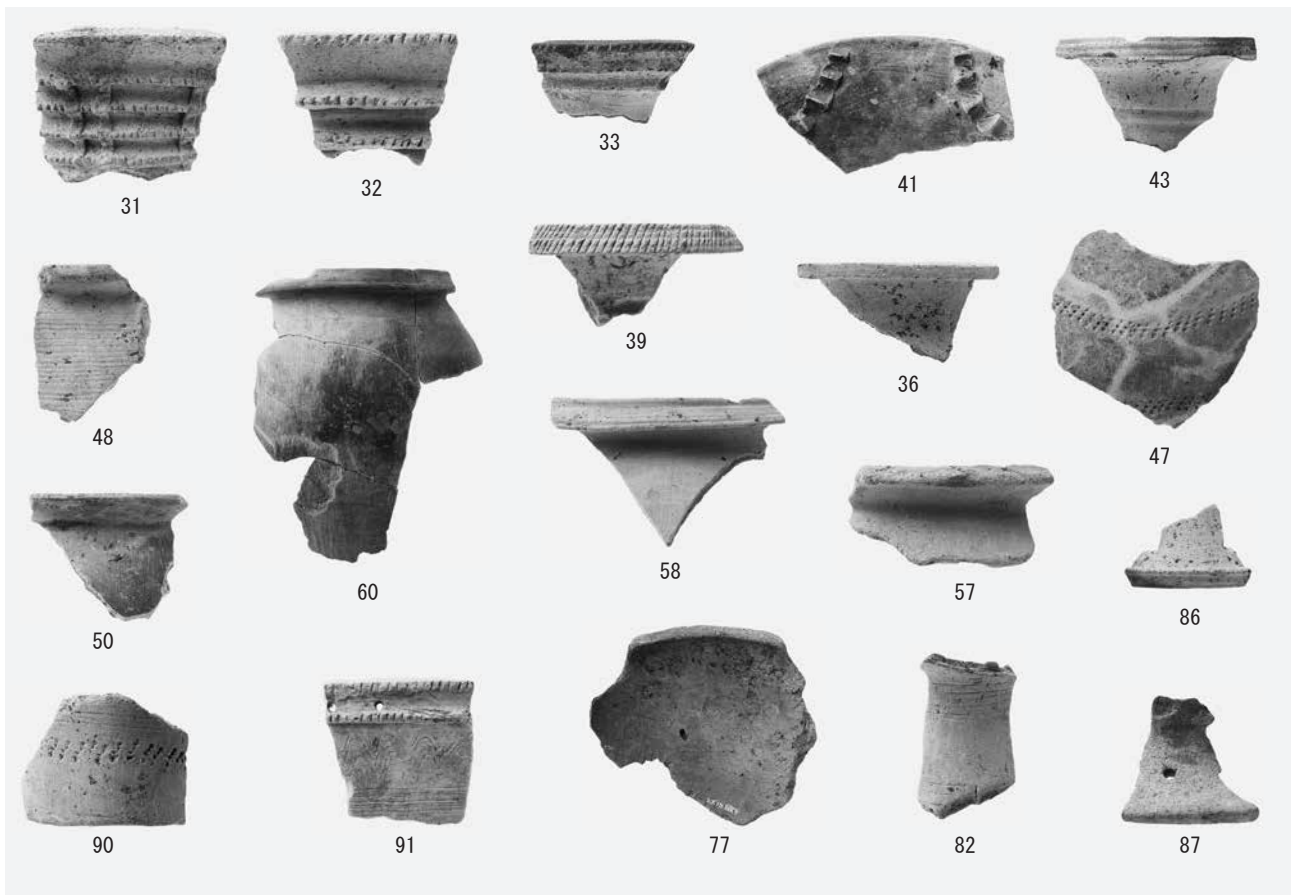
3 P194 上層出土遺物 (北から)

4 P194 下層遺物出土状況 (北から)

5 P194 下層出土遺物 (W1)



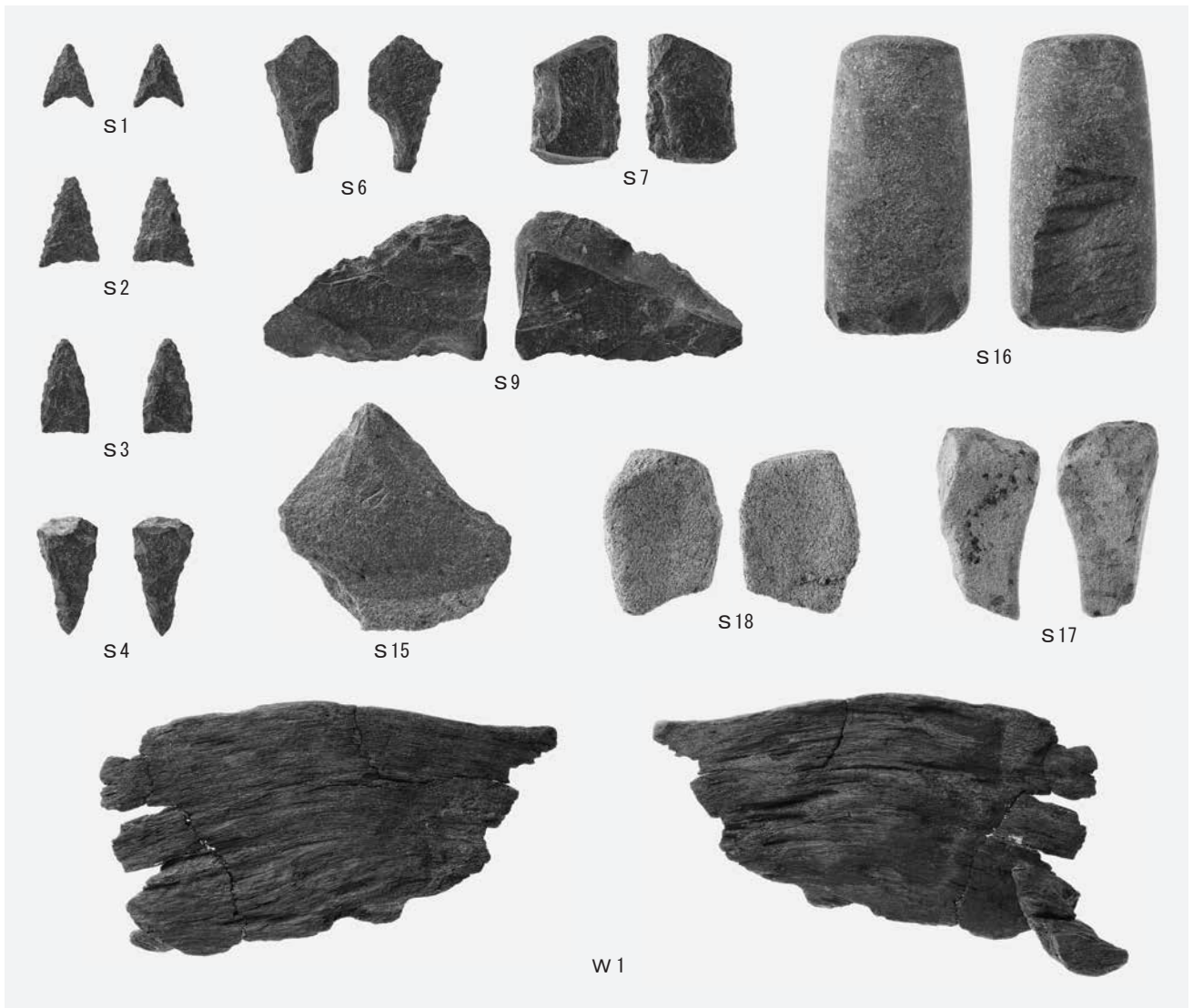
1 立会調査区出土弥生土器



2 発掘調査区出土弥生土器



1 発掘調査区出土土師器



2 立会調査区・発掘調査区出土石器・木器



1 1区調査前状況(東から)



2 2区発掘作業状況(西から)



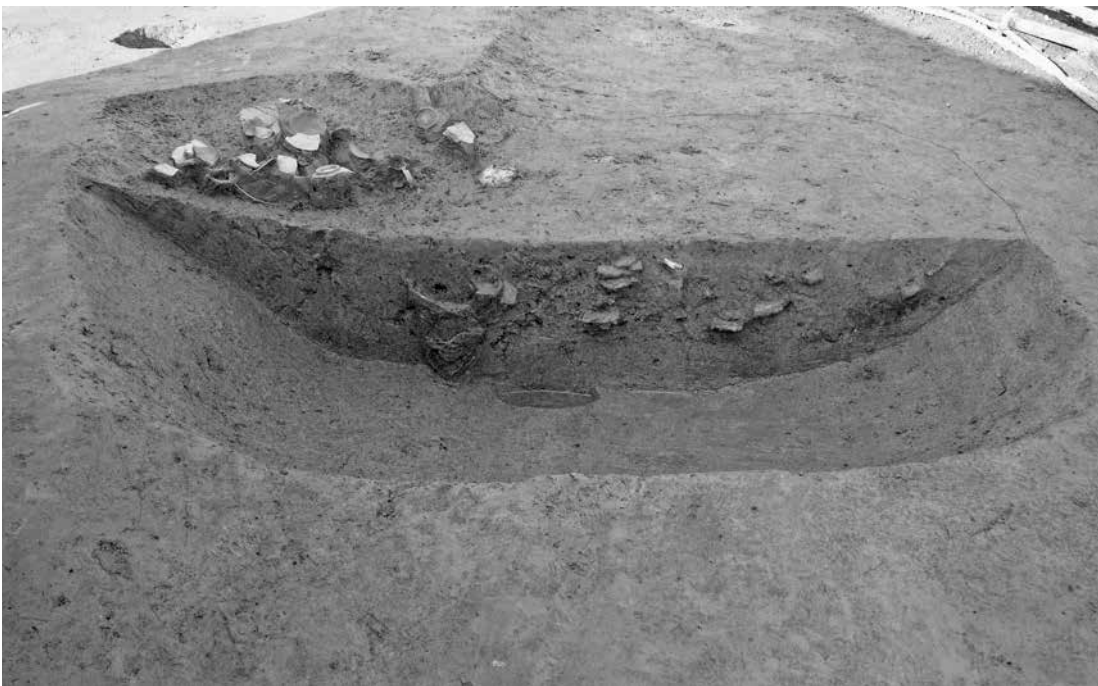
3 調査区土層断面 (g-h) (南から)



4 中・近世遺構(1区東)検出状態(南西から)



1 土坑 1 遺物出土状態 (東から)



2 土坑 1 埋土断面 (東から)



3 土坑 3 遺物出土状態 (南から)



4 土坑 4 遺物出土状態 (南から)



4



6



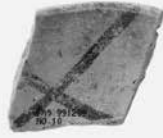
10



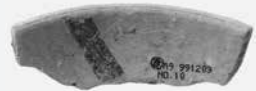
18



26



29



30



36



38



40



41



44



46



47



53



54



58



59

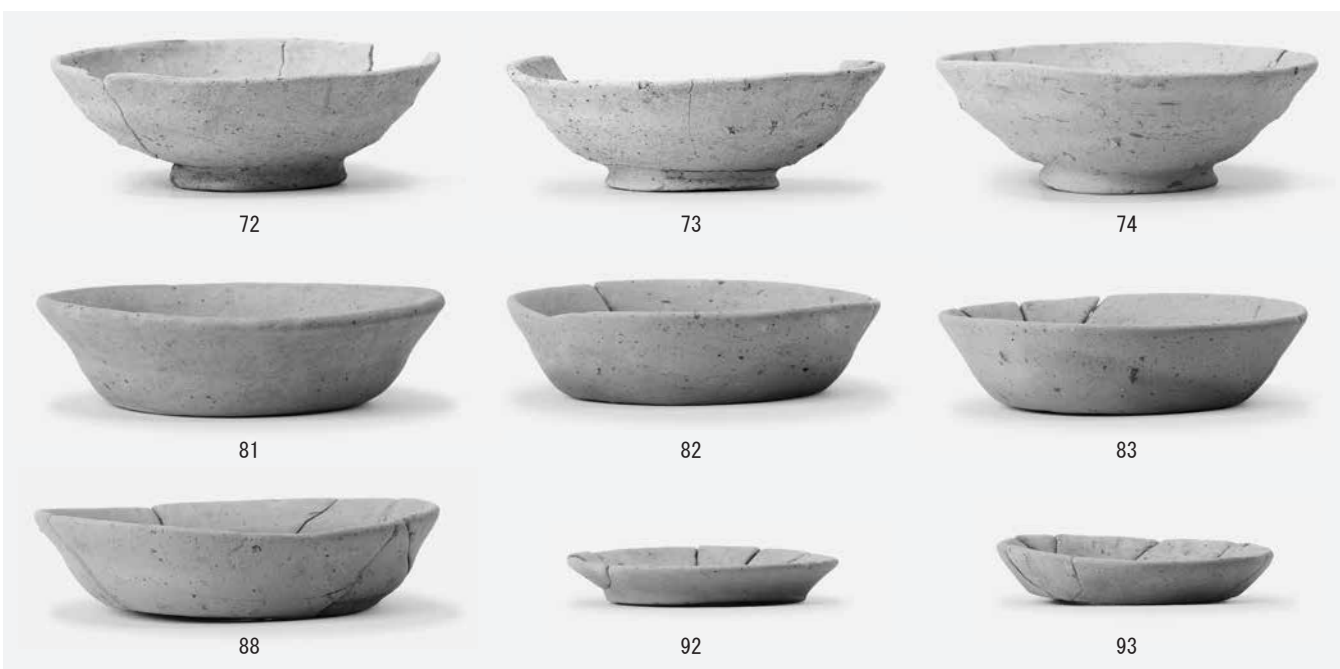
1 土坑 1 出土遺物①



1 土坑 1 出土遺物②



2 土坑 3 出土遺物



3 土坑 4 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	えづいせきに はらおじまいせき							
書名	絵図遺跡 2 原尾島遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	264							
編著者名	亀山行雄 柴田英樹							
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター							
所在地	〒701-0136 岡山県岡山市北区西花尻 1325-3 TEL 086-293-3211 URL https://www.pref.okayama.jp/site/kodai/							
発行機関	岡山県教育委員会							
所在地	〒700-8570 岡山県岡山市北区内山下 2-4-6 TEL 086-224-2111							
発行年月日	2023年3月17日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
えづいせき 絵図遺跡	おかやまけん 岡山県 おかやまし 岡山市 きたく 北区 えづちよう 絵図町 いちぼんち 1番地	33101	332011478	34° 40' 34"	133° 55' 15"	19930426 ～ 19930427	40m ²	記録保存 調査
						19930517 ～ 19930528		
はらおじまいせき 原尾島遺跡	おかやまけん 岡山県 おかやまし 岡山市 なかく 中区 ふじわらにしまち 藤原西町 2-3-34	33102	332012770	34° 40' 39"	133° 57' 21"	19990614 ～ 19990618	20m ²	記録保存 調査
						19991118 ～ 20000317		
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
えづいせき 絵図遺跡	集落	弥生・古墳時代		井戸、土坑、柱穴、 溝		弥生土器、土師器、 須恵器、石器、木器		
はらおじまいせき 原尾島遺跡	集落	鎌倉時代		掘立柱建物、柱穴列、 土坑、柱穴、溝		土師器、陶磁器、 土錘		
要約	<p>絵図遺跡は、水田稲作開始期の集落として著名な津島遺跡の南に位置する。弥生時代中期の柱穴・土坑・溝、古墳時代前期の井戸を検出した。</p> <p>原尾島遺跡は、古墳時代の集落が発掘された地点の南に位置する。鎌倉時代の掘立柱建物・柱穴列・土坑・溝等を検出した。</p>							

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 264

絵図遺跡 2 原尾島遺跡

令和5年3月17日 印刷

令和5年3月17日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター
岡山県岡山市北区西花尻1325-3

発行 岡山県教育委員会
岡山県岡山市北区内山下2-4-6

印刷 株式会社 中野コロタイプ
岡山県岡山市北区玉柏390

